敵の先頭を壓迫し距離八、〇〇〇米に近づいた。此の時敵は機乘ずべしと爲し、旗艦スウォーロフから第一彈を放ち、尋いで各艦から一齊に砲火を開き戰を挑んだが、我が艦隊は滿を持して之に應ぜず、更に敵に近接して午後二時十分距離六、〇〇〇米に迫り、旗艦三笠初めて第一彈を放ち、各艦之に倣ひ砲火を敵の旗艦に集中し、斯くて驚天動地の砲戰は開始された。

黑煙海をおほふ　我が艦隊は快速を利用して所謂丁字戰法を實施し、距離を短縮して敵の先頭艦より順次に攻擊を集中したが、交戰僅に數十分で旗艦スウォーロフ・オスラービヤ及アレキサンドル三世は火災を起して列外に出で、午後三時七分オスラービヤは遂に沈沒、第五驅逐隊は敵の混亂せるに乘じスウォーロフに對して白晝魚雷襲擊を決行し、我が主力艦隊は正々堂々の陣形を以て混亂せる敵艦隊の殘敵を包圍し、遂に午後三時三十分頃には全く敵を制壓して立つ能はざらしめる程の打擊を與へた。

敵の兩旗艦　第一戰艦隊旗艦スウォーロフ、第二戰艦隊旗艦オスラービヤ。

無二無三　脇目も振らず一心に爲すさま。

四分五裂　幾つにも分裂すること。ばら〳〵にさけ離れること。秩序もなく混亂するさまに言ふ。

欝陵島　朝鮮半島の東方、日本海上に在る火山島、面積三平方粁・周圍四五粁、島は玄武岩・石英粗面岩・火山灰から成り、最高峯は聖人峯で標高九八三米。海岸は絶壁を成し船舶の寄泊地に乏しく、島内山多く產業が發達しない。人口一一、二三一。

ネボカト少將　西暦一九〇五年第三艦隊司令官に任ぜられ、バルチック海より極東に赴き、ロジエストウエンスキー中將の艦隊に併合。對馬沖で日本艦隊の爲に擊破され、其の身は武裝解除・捕虜と成り、一九〇七年本國に於て死刑の宣告を受けた。

戰艦ニコライ一世以下の四艦　戰艦ニコライ（九、六七二噸）裝甲海防艦アブラクシン（四、一

二六噸）セニヤーウキン（四、七九二噸）ウシヤーコフ（四、六四八噸）。

ロジエストウエンスキー中將　西暦一九〇三年より軍令部長、日露戰役の時太平洋第二艦隊を率ゐて一九〇四年十月十六日出發、對馬海峽で東鄕艦隊と戰ひ、其の大部分を擊沈され、一部は降服（ネボカトフ艦隊）し殘餘は辛うじてフイリッピン群島附近に逃亡するを得た。ロジエストウエンスキーは負傷して居たので水雷艇ベドヴイ號に便乘、日本軍に降服、後ペテルグルグに歸り病歿。

幕僚　大將の麾下に屬して謀議に參與するもの。陸海軍の司令官又は總督等に直屬して參謀事務に從事する將校。

我が軍の死傷　戰死一一六名、負傷五三八名。

東鄕司令長官の發せし戰況報告　堂々たる長文であるが、其の冒頭には「天佑ト神助ニ因リ、我聯合艦隊ハ五月二十七・八日、敵ノ第二・第三艦隊戰ト日本海ニ戰フテ遂ニ殆ンド之ヲ擊滅スルコトヲ得タリ。始メ敵艦隊ノ南洋ニ出現スルヤ、上命ニ基キ當隊ハ豫メ之ヲ近海ニ迎擊スルノ計畫ヲ定メ、朝鮮海峽ニ全力ヲ集中シテ徐ニ敵ノ北上ヲ待チシガ、敵ハ一時安南沿岸ニ寄港シタル後漸次北行シ來リシヲ以テ、其ノ我近海ニ到達スベキ數日前ヨリ、豫定ノ如ク數隻ノ哨艦ヲ南方警戒線ニ配備シ、各戰列部隊ハ一切ノ戰備ヲ整ヘ、直ニ出動シ得ル姿勢ヲ持シテ各々其ノ根據地ニ泊在セリ。果然二十七日午前五時ニ至リ、南方哨艦ノ一隻信濃丸ノ無線電信ハ敵艦隊二〇三地點ニ見ユ、敵ハ水道ニ向フモノノ如シト警報シ、全軍勇躍直ニ發動シ、各部隊ハ豫定ノ部署ニ準ジテ對敵行動ヲ開始セリ。午前七時內方警戒線ノ左翼哨艦タリシ和泉亦敵艦隊ヲ發見シテ、敵既ニ宇久島ノ北西二十五海里ノ地點ニ達シ北東ニ航進スルヲ報ジ、巡洋艦隊（片岡中將直率）東鄕（正路）戰隊續テ出羽艦隊モ午前十時・十一時ノ交、壹岐・對島ノ間ニ於テ敵ト接觸ヲ保持シ詳カニ時々

刻々ノ敵情ヲ電報セシカバ、此ノ日海上濛氣深ク展望五海里以外ニ及バザリシモ、數十海里ヲ隔ツル敵影恰モ眼界ニ映ズルガ如ク、未ダ敵ヲ見ザル前既ニ敵ノ戰列部隊ハ其ノ第二・第三艦隊ノ全力ニシテ、特務艦船約七隻ヲ伴フコト、敵ノ陣形ハ二列縱陣ニシテ、其主力ハ右翼列ノ先頭ニ占位シ特務艦船ハ後尾ニ續行セルコト、又敵ノ速力ハ約十二節ニシテ尙北東ニ航進セルコト等ヲ知リ、本職ハ之ニ依リ我主力ヲ以テ午後二時頃沖ノ島附近ニ敵ヲ迎ヘ、先ヅ其ノ左翼列先頭ヨリ擊破セントスル心算ヲ立ツルヲ得タリ。主力隊（主力艦隊『東郷大將直率』裝甲巡洋艦隊『上村中將直率』）瓜生戰隊及各驅逐隊ハ正午頃沖ノ島北方約十海里ニ達シ、敵ノ左側ニ出デンガ爲更ニ西方ニ針路ヲ執リシガ、午後一時三十分頃出羽戰隊・巡洋艦隊及東郷（正路）戰隊等モ敵ト接觸ヲ保チツヽ相前後シテ漸次ニ來リ合シ、同四時十五分ニ至リ正ニ我左舷南方數海里ニ始メテ敵影ヲ發見セリ。敵ハ豫期ノ如ク其ノ右翼列ノ先頭ニポロチノ型戰艦四隻ノ主力艦隊ヲ置キ、オスラービヤ・シソイウェリーキー・ナワリン・ナヒーモフヨリ成ル一隊左翼列ノ先頭ニ占位シ、ニコライ一世外海防艦三隻ヨリ成ル一隊之ニ次ギ、ゼムチユーク・イズムルードノ二艦ハ兩列ノ間ニ介立シテ前方ヲ警戒セルモノヽ如ク、尙其ノ後方濛氣中ニオレーグ・アウローラ以下二・三等巡洋艦ノ一隊ドミトリードンスコイ・ウラジーミルモノマーフ其ノ他特務艦等數浬ニ亙リテ連綿航續スルヲ仄ニ認ルヲ得タリ。是ニ於テ全軍ニ戰鬪開始ヲ命ジ同時五十五分視界内ニ在ル我全艦隊ニ對シ、皇國ノ興廢此ノ一戰ニ在リ各員一層奮勵努力セヨトノ信號ヲ揭揚セリ。而シテ主戰艦隊ハ少時南西ニ向首シ敵ト反航通過スルト見セシガヾ午後二時五分急ニ東ニ折レ其ノ正面ヲ變ジテ斜ニ敵ノ先頭ヲ壓迫シ、裝甲巡洋艦隊モ續航シテ其ノ後ニ連リ出羽戰隊・

瓜生戰隊・巡洋艦隊及東郷（正路）戰隊ハ豫定戰策ニ準ジ孰レモ南下シテ敵ノ後尾ヲ衝ケリ。之ヲ當日戰鬪開始ノ際ニ於ケル彼我ノ對勢トス。云々〃とある。然して其の末尾が玆に擧げられた感激的な一節である。　**奇績**（キセキ）　珍しい功績。不思議と思ふ程の成果。　**御稜威**（ミイツノ）　稜威（イツ）の敬。鋭き御威勢。尊嚴な御威光。　**人爲**（ジンヰ）　人がことさらにすること。人のしわざ。人間わざ。人工。（自然の對）。　**神靈**（シンレイ）　神のみたま。神の靈德。みたま。　**加護**（カゴ）　神佛の御力で守護せられること。神佛のまもり。擁護。　**麾下**（キカ）　將軍の旗下。幕下。指揮權の下に在るもの。はたもと。　**上聞**（ジヤウブン）　君主の御耳に入れること。君主へのきこえ。上聽。日本海々戰の捷報天聽に達するや、明治天皇は五月三十日東郷聯合艦隊司令長官に此の勅語を賜つた。即ち〃聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峽ニ邀擊シ奮戰數日遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ惟フニ前途ハ尙遼遠ナリ汝等愈ヨ奮勵シテ以テ戰果ヲ全フセヨ〃之が其の全文である。　**祖宗**（ソソウ）　祖は先祖、宗は中興の祖。現代以前の代々の君主の總稱。　**感泣せざるはなかりき**（カンキフ）　感泣は感極まつて泣く。感涙。東郷司令長官は優渥なる如上の勅語を拜受し、翌三十一日次の奉答文を上つた。即ち〃日本海ノ戰捷ニ對シ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣等感激ノ至リニ堪ヘス此海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ陛下御稜威ノ普及及ヒ歷代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスヘキ所ニアラス臣等唯々益々奮勵シテ犬馬ノ勞ヲ盡シ以テ皇謨ヲ翼成センコトヲ期ス〃と。此の海戰に依り露國は東洋に於て制海權を掌握せんとする企圖は見事に破碎された。陸には奉天の大勝、海には日本海の殲滅戰に依り急速に平和克復の途が開かれ、日露兩國はポーツマス條約を締結す

るに至つたのである。

資料

參考

日露大海戰經過一覽

明治三十六年

四月二十九日　山本海軍大臣、長官等に特別訓示を出す。

十二月三十一日　アルゼンチン國より日進・春日兩艦を購入す。

明治三十七年

一月十六日　對露作戰方針が東郷長官に示さる。

二月四日　宣戰が御前會議で決定す。

開戰の大命降下

二月五日　公文を露國外相ラムスドルフに送附して國交斷絶を告げて開戰の大命降下す。

二月六日　小村外務大臣ロシア・ローゼン公使を招きて國交斷絶を宣言す。

午前一時、東郷長官、三笠將官室に四十餘人の艦長を集め大命を傳達さる。

二月七日　聯合艦隊佐世保を出發す。

早曉朝鮮沖南西に於て露商船ロシア號を捕獲す。

旅順大連在留民に引揚命令下る。

二月八日　英船福利號にて在留民芝罘へ引揚。

驅逐隊旅順口外の敵を攻撃す。

仁川沖の海戰

二月九日　午前十時旅順口沖に達し、港外の敵艦隊を攻撃す、敵艦の損傷六隻、我戰死四名、負傷五十四名。

午前七時陸兵上陸完了、露艦ワリヤーク及コレーツ仁川港より出で來たるを瓜生艦隊八尼島以西に邀撃して仁川沖の海戰となりワリヤーク及コレーツは仁川港内に遁入し其後破壞沈沒す、商船ズンガリーも自ら爆沈す、敵の死傷者百四名我が艦隊は一の死傷なし。

宣戰の詔勅降る

二月十日　宣戰の詔勅降る。

商船奈古浦丸、青森縣艦作崎沖にて露艦四隻に撃沈さる。

二月十一日　商船全勝丸、同所にて砲撃さる。

二月十四日　第二次攻撃第四驅逐隊速鳥・朝霧旅順口を襲撃す。

二月十六日　日進・春日横須賀に到着す。

第一次旅順口閉塞

二月二十四日　第一次旅順口閉塞——報國丸・武州丸・天津丸・武陽丸・仁川丸の五隻に七十七の勇士を載せて自ら破壞沈沒す、天佑能く一兵を損せず。

日韓議定書調印。

二月二十五日　港内を砲撃す、鳩灣にて敵驅逐艦を撃沈す。

三月六日　浦鹽砲撃——第二艦隊七隻を以てす。

三月十日　旅順港外の激戰、六隻の敵驅逐艦と交戰、我が戰死二名、負傷四名。
三月二十二日　主戰艦隊の間接射擊。

第二次旅順口閉塞

三月二十七日　第二次港口閉塞——千代丸・福井丸・彌彥丸・米山丸の四隻、決死隊六十五名、廣瀨中佐福井丸と共に敵魚雷のため港内深く爆沈す。
四月十一日　日進・春日聯合艦に來會す。
四月十三日　敵旗艦、ペトロパウロスク號我機械水雷に觸れて爆沈、司令長官マカロフ中將戰死、他六百名溺死。
四月二十五日　金洲丸の遭難。

第三次旅順口閉塞

五月三日　第三次港口閉塞——十二隻小倉丸・長門丸・愛國丸・小樽丸・江戸丸・朝顏丸・新發田丸・三河丸・遠江丸・佐倉丸・相模丸・釜山丸、二百四十四名、百有餘の勇士死傷す。
五月五日　鹽大澳に第二軍の陸兵を護送す。
五月十二日　第三艦隊大孤口掃海、第四十八號水雷艇沈沒。
五月十四日　宮古、敵機雷に觸れ沈沒。
五月十五日　吉野・春日と衝突し沈沒、初瀨・八島は敵の機械水雷に觸れ沈沒す。吉野の戰死將校三十一名、下士二百八十六名、初瀨の戰死將校三十二名、下士四百三十九名。
五月十六日　大島・赤城と衝突して沈沒す。
五月十七日　曉、敵機械水雷に觸れ沈沒、二十餘名戰死。
五月二十一日　敵驅逐艦一隻港外にて爆沈。

五月二十六日　東鄕司令長官、遼東半島南部の封鎖宣言。
六月六日　乃木軍上陸、東鄕司令長官大將に任ぜらる。
六月十日　驅逐隊の活動、金州灣にて坐礁の敵驅逐艦を鹵獲す。
六月二十一日　敵驅逐艦二隻旅順港外にて我敷設水雷に觸れ沈沒。

旅順港外の攻擊

六月二十三日　旅順港外の攻擊——旅順港外に出擊せる戰艦・巡洋艦・驅逐艦等十七隻を夜襲す、白雲にて三名戰死、二名負傷。
七月四日　海門、敵機械水雷に觸れて沈沒、二十餘名戰死。
七月十五日　常陸丸・佐渡丸、浦鹽艦隊に攻擊せられ常陸丸擊沈さる。須知中佐自刄。
七月二十四日　鮮生角の東灣に敵驅逐隊を襲擊二隻を沈む。
七月二十七日　千代田、機雷に觸れ、三十四名死傷。

黃海の大海戰

八月十日　黃海の大海戰——旅順口を脫出南下せんとする敵艦隊を遇岩附近に邀擊、キトゲフト提督戰死、死傷は將校以下約百七十名、敵艦の遁竄するもの十隻、一隻は擱坐す。

蔚山沖の海戰

八月十四日　蔚山沖の海戰——出雲・吾妻・常磐・磐手四隻は浦鹽艦隊三隻の南航するに會し午前五時二十三分戰鬪開始、浪速・高千穗二隻赴援『リエーリツク』は擊沈、その乘員六百名を救ふ、我が死傷二百二十八名。
八月十八日　敵艦港外に於て機械水雷に罹り爆沈。

八　月二十日　敗敵の追擊對島ノーウキツクを砲擊す。
八　月二十一日　千歲、ノーウキツクを砲擊、ノーウキツクは樺太・大泊の淺瀨に乘上げ破壞す。
八　月二十四日　老鐵山東海に於て敵の驅逐艦二隻機械水雷に罹り一隻沈沒、一隻は港內に曳航さる。
八　月三十一日　城頭山下に敵の特殊掃海艇一隻機械水雷に罹り爆沈。
九　月　二　日　遠鳥、機械水雷に觸れ沈沒、二十名戰死。
九　月十八日　平遠、鐵島西海に於て敵の浮流水雷に罹り沈沒、二百名戰死。
十　月十五日　水雷艇隊の旅順口夜襲により旅順艦隊全滅す。
　　バルチツク艦隊リバワ軍港を出發す。
十一月　六　日　愛宕、暗礁に坐し沈沒す。
十一月三十日　濟遠、鳩灣にて機械水雷に觸れ沈沒、四十名戰死。
十二月　五　日　二〇三高地占領、港內砲擊開始。
十二月十三日　高砂、機械水雷に罹り沈沒、二百七十餘名戰死。

明治三十八年

一　月　二　日　水師營にて旅順開城の約成る。

日本海の大海戰

五　月二十七日　日本海大海戰――午前五時南方哨艦信濃丸より『敵艦見ゆ』の無電、午前七時警戒線の哨艦和泉亦敵を發見觸接す。
　　一時五十五分『皇國の興廢――』の信號揭揚――戰鬪開始を命ず。
五　月二十八日　十時三十分敵艦五隻を發見、ネボカトフ少將は降意を表す。驅逐艦ビエードウイに移乘せる司令長官ロジエストウエンスキー中將降伏、捕虜總數六千を算す。

七　月　四　日　陸軍輸送船隊を護衛し北遣艦隊出發す。
七　月　七　日　樺太大泊上陸、掃海隊砲擊を加へられるも我が損傷なし。
七　月　八　日　大泊を占領す。
七　月二十四日　第一アルコアに上陸占領。
七　月三十日　敵の軍使來り降伏、將校七千、下士約三千を捕虜。
八　月　一　日　我が軍樺太北部をも占領敵降伏す。
九　月十四日　海軍休戰の協定。
十　月十六日　平和克服に關する詔勅降る。

五月三十日、聯合艦隊司令長官東鄕平八郎に左の勅語を賜はる。

勅　語

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峽ニ邀擊シ奮戰遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對スルヲ懼フ惟フニ前途ハ尙ホ遼遠ナリ汝等愈〻奮勵シ以テ戰果ヲ全フセヨ

同日帝國海軍に左の勅語を賜はる。

勅　語

我海軍ハ籌畫攻戰共ニ宜シキヲ得中外相待テ敵ノ艦隊ヲ殲滅シ以テ朕カ望ニ副ヘリ朕深ク其ノ偉功ヲ嘉賞ス汝等益〻努力シテ大成ヲ期セヨ

東鄕司令長官の奏答

五月三十日聯合艦隊司令長官東鄕平八郎に賜はりたる勅語に對する奉答左の如し。

日本海戰捷ニ對シ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣等感激ノ至リニ堪ヘス此海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ陛下御稜威ノ普及及ヒ歴代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスヘキ所ニアラス臣等唯々益々奮勵シテ犬馬ノ勞ヲ盡シ以テ皇謨ヲ翼成センコトヲ期ス

明治三十八年五月三十一日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

東郷司令長官凱旋奉告

客歳二月上旬聯合艦隊カ大命ヲ奉シテ出征シタル以來、玆ニ一年有半、其ノ間海陸ノ交戰皇軍勝利ヲ獲サルコトナク、今日復ヒ和平ノ秋ニ遇ヒ、臣等犬馬ノ勞ヲ了ヘテ大纛ノ下ニ凱旋スルヲ得タリ是レ一ニ

大元帥陛下御威德ノ然ラシムルモノニシテ、臣等ノ終始感激措ク能ハサル所ナリ

初メ聯合艦隊ヲ海上ニ第一期作戰ヲ開始スルヤ、臣ハ大命ニ基キ海陸ノ形勢ト陸戰ノ方向ヲ考察シ、敵艦隊ノ主力ヲ旅順方面ニ拘束シ、之ヲシテ浦鹽ノ要地ニ據ラシメサルヲ以テ戰略ノ主旨トシ、先ツ旅順仁川ニ敵ヲ迅擊シ、更ニ數次ノ攻擊ヲ重ネ以テ漸次ニ其ノ勢力ヲ減殺シ、又屢々冒險ナル敵港ノ閉塞及ヒ敵前ノ水雷沈置等ヲ試ミ、以テ敵ノ出動範圍ヲ縮小スルニ力メ、尙陛下艦隊ノ一部ヲ常ニ朝鮮海峽ニ駐メテ海上ノ要害ヲ扼シ、以テ浦鹽ノ敵ヲ監視スルト同時ニ、旅順ノ敵ニ對スル第二戰線タラシメタリ。此ノ作戰ノ前期中、敵ハ終始地利ニ據リテ退嬰ヲ事トシ、我カ軍連續ノ攻擊モ容易ニ其ノ成果ヲ收ムル能ハサリシカ、八月中旬敵艦隊主力ノ旅順ヨリ浦鹽ニ逃レントスルニ及ヒテ、黃海及ヒ蔚山沖ノ海戰ヲ見ルニ至リ期セスシテ全ク敵ノ戰略的企圖ヲ摧破シ、我カ作戰目的ノ過半ヲ達成スルヲ得タリ。其ノ後陸戰漸ク歩武ヲ進メ、旅順ノ背面ニ對スル我カ攻圍軍不撓ノ追擊ハ海上ニ於ケル耐久ノ封鎖ト相須テ、遂ニ敵艦隊ノ主力ヲ其ノ要塞ノ下ニ殲滅スルニ至レリ。惟フニ此ノ期ノ作戰ハ、戰勢ノ自然ニ伴ヒ

テ漸進微功ヲ積ミ攻戰約十箇月ニ亘リ、我カ將卒ノ心力ヲ傾注シ智勇ヲ發揮シタルコト、本戰役中ニ冠絕シ、忠死ノ士殉難ノ艦亦少カラサリシト雖モ、戰局ノ大勢ハ玆ニ初テ定リ、爾後日本海ニ於ケル決勝ノ機運モ此ノ間ニ萌芽シタルヲ疑ユ。

今春年改ルト共ニ第二期ノ作戰ニ移リ、我カ艦隊ハ更ニ兵力ヲ整頓シテ敵ノ第二艦隊ニ備ヘ、傍ラ露領沿海州ヲ包鎖シテ敵國軍資ノ輸入ヲ遮斷シ、時ニ支隊ヲ南洋ニ分遣シテ敵ノ航通ヲ威嚇スルニ勉メ、其ノ間對馬・津輕・宗谷・國後等ノ諸水道附近ニ於テ捕獲シタル船舶三十餘隻ヲ算ス。初夏五月ニ入リ敵ノ第二艦隊近海ニ出現スルニ及ヒテ、豫メ我カ全力ヲ朝鮮海峽ニ集中シ、逸ヲ以テ勞ニ乘スルノ策ヲ執リシカ、我カ將卒ノ勇敢ナル動作ハ神明ノ加護ニ由リ著々其ノ功ヲ奏シ、日本海海戰ノ一環敵影ヲ海上ヨリ掃蕩シ、以テ此ノ期ノ作戰ヲ終結スルヲ得タリ。爾來海洋ハ名實共ニ我カ艦隊ノ制壓ニ歸シ、作戰第三期ニ入リシモ、負擔ノ任務ハ輕減シ、或ハ陸軍ト與ニ樺太ノ攻略ニ從事シ、殆ト一兵ヲ損セスシテ協同ノ任務ヲ果シ、或ハ時々北韓方面ニ作動シテ敵ヲ脅威シ、且依然露領ノ包鎖ヲ續行シテ休戰復和ノ終局ニ至ル迄、確實ニ之ヲ維持セリ。

之ヲ要スルニ聯合艦隊ノ作戰ハ、其ノ第一期ニ於テ戰勢ヲ定メ、第二期ニ移リテ戰勝ヲ決シ、第三期ニ入リテ戰果ヲ收メントシタルモノニシテ、其ノ間緩急難易ノ差異アリシト雖モ、全局ニ亘ル一貫ノ攻戰ハ、其ノ始ヨリ順當ニ經過シ、終ニ今日アルヲ見ルニ至レリ。今ヤ凱旋シテ東京灣ニ集合セル帝國艦船大小百七十餘隻、固ヨリ戰役ニ亡失シタルモノアリト雖モ、更ニ戰利トシテ獲得シタルモノヲ加ヘ、尙能ク戰前ニ劣ラサル武力ヲ保有スルヲ得タルハ、臣等ノ誠ニ光榮トスル所ナリ。

終ニ臨ミ臣ハ聯合艦隊カ滿韓ニ於ケル陸戰ノ效果ニ依リ、其ノ餘利ヲ蒙リタルコト少カラス、又海軍大小諸機關ノ整備活動其ノ他諸官衙ノ支助協力ニ依リ、海上ノ作戰遺憾無ク進捗シタルコトヲ感喜ス。玆ニ謹テ海上作戰ノ經過ヲ奉告シ

大命ニ對スル責務ノ結了ヲ奏聞ス
明治三十八年十月二十二日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

指導精神

第二十七の空中戰と呼應する軍事教材で、國家の非常時に直面した際發露する國民の意氣と氣魄の程を思はせたものである。文の觀點は〝皇國の興廢此の一戰にあり〟から〝風叫び海怒りて〟に至る驚天動地の戰況に在るは勿論であるが、指導の核心は後半の戰況報告と司令長官に賜へる勅語に在るは言ふ迄もない。東鄕司令長官が〝歴代神靈ノ加護ニ由ルモノト信仰スルノ外ナク〟と奏上したのに對して、〝朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌ブ〟と仰せられて居る。何と感激の極みであらう。上下一致、此處にも皇國精神の赫奕たるものがある。取扱の核心も亦茲に在るは勿論である。

取扱上注意すべきは這般の事變を招來した戰爭目的を先づ明確に意識させ置く事である。兵は兇器である。濫に動かすべきものではない。にも拘らず戰はねばならぬのには止み難き理由が無ければならぬ。理由なきに戰ふのは無名の師である。明治三十七八年戰役に於ても優渥なる勅語を下し給ひ、尙兵を動かさゞるべからざる所以を中外に宣揚し給うた。これ實に世界平和を御軫念あらせ給ふ大御心に出でたもので、皇國本然の戰爭に關する正しき意圖を鮮明にせさせ給ひ、且つ之に伴ひ採る可き國民精神の態樣と所謂忠君愛國の眞髓とを明かに宣示し給へるものと拜察し奉る。

思ふに戰時事變に際し、熱烈なる愛國心が忠勇なる我が國民の間に發露せられることは今更事新しく言ふ迄もない。之を明治維新後に就て見ても、我が皇國の遭遇せし對外事變と戰役とは其の數一二に止らない。其の主なるものを擧ぐるも日清・日露二大戰役の外、明治七年の臺灣征討を始めとし、明治十五・同十七年朝鮮に於ける壬午・甲申の變があり、同三十三年北清事變があり、大正に入つて世界戰爭に參加し、爾後濟南事變・滿洲事變・上海事變等を數へることが出來る。然も今正に擧國一致暴支膺懲の聖戰が勃發して居る事は周知の如くである。是等の國難や事變に際し、我が帝國軍隊は常に其の包有せる底力を發揮して赫々たる偉勳を顯し、爲に國威益々振ひ、國勢彌々進み、遂に我が國現時の世界的地歩を獲得し、東洋平和の保障として常住に其の威武を發揚し、一面宇内の和平と世界文化の發展とに貢献する所大であるのは、全世界の驚嘆する所である。我々は茲に我が國柄の尊さを謳歌せずには居られない。卽ち皇國日本に於て、萬一戰はる可き戰爭ありとせば、そは實に如上の國是實現に關し眞に已み難き場合のみである。我々の眞に戰ふ可き戰爭は、人々相剋し國民相食み沒義道なる惡鬪又は殘虐では無い。正義の追進・創造の努力を妨害せんとする野望・覇道等の諸障碍を排除し、且つ之を受容・馴致・同化して遂に仁愛・正義の大和魂に化成し、皇道の洪大無邊なる大慈悲の恩惠に浴せしめるのが皇國日本の使命であり、皇軍の負擔すべき最大なる重責である。我が國に於ける戰爭は此の意義に於てのみ、止むを得ず戰はる可きものである事を知らねばならぬ。〟

之を歴史に徴して見る。古來我が國に於ける戰が常にまつろはぬを膺懲して反省自覺せしめ、夫等をして心から天皇の廣大なる御仁慈に浴せしめるに至つたのは、記紀其の他の史實に據つても察知される。降つて戰國時代に至るも此の遺風は自から國民の間に浸潤し、無道の軍や欺瞞的の戰爭は武士道の恥辱とされた。

然して明治維新後に於ける戰爭が一に東洋平和を念とし給ふ天皇の大御心に出でたのは、屢次の御詔勅に依り明白である。斯くて戰爭の目的は其の都度普く國民の間に傳達され、忠君愛國の至情は日を追うて益々發揮せられ、遂に曠古の大捷を博するに到つたのは周知の事實である。

曾て日清戰役に依り、其の隱れたる存在より一躍して世界の表面に亞細亞の健鬪者として立ち上れる日本に取り、此の日露戰役は亞細亞の守護者としての體驗と試練とであつた。そは東洋平和の保全に對する我が民族的使命の遂行であり、亞細亞民族としては白人閥に對する迷夢打破でもあつた。蓋し此の戰役は實に歐羅巴列强侵略行の一つであつた露西亞の東亞侵略阻止の爲に戰はれた。然して此の戰に依つて神國日本は露西亞の東亞獲得慾・權力慾を彼等元來の故鄕たる歐羅巴へ叩き返した。彼等は其の侵略行の前途に踰え難き儼乎たる鐵壁の存する事を知り、遂に後退せざるを得なかつたのである。明治二十七八年の日清戰役は外國を相手とする日本帝國の初陣とも言ふべきものであり、三十七八年の日露戰役は小國日本が幾十倍の大國に對し國家の存亡を賭して戰つた必死の戰爭であつた。然も上下能く戰爭の目的を了解し、國と人とを擧げて奮戰力鬪、全く驚異的な空前の大捷を得たのは寔に天佑神助の賜と言ふの外はない。東鄕司令官が戰況報告の終りに『前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ』と其の實感を吐露して居るのも宜べなりと言ふべしである。神國日本は山紫水明の國、正に人爲と天爲の合一せる極致であつて、美と偉大さが相合致せる有樣は何と言ふ男性美であらう。"戰は詩だ"と言つた或哲人の言も成程と頷かれる。海の雄叫、國民の誇、それは堂々世界に鼓吹すべき戰爭目的を明確にする事に依つて、愈々光彩を發揮する。本課指導の要諦も此の一點に在るを忘れてはならぬ。

指導形態

指導上の認識點

1　本課は曠古の大勝を博した日本海々戰に於ける我が海軍の武勳を物語り、明治天皇の御稜威・歷代神靈の加護に感激せしめ、且つ東鄕司令長官以下各將士の勇往敢戰に對してひたすら感謝の念を抱かしめ愛國的熱情を鼓舞し國防意識を涵養するのが主眼である。

2　特に勅語の拜讀には細心の注意を拂ひ、苟も不敬に亘る事なき樣注意し、上下能く國難を克服せる神祕的大事實に傾倒させ、非常時局突破の勇猛心を養ふ事を念とせねばならぬ。

3　文は逐次的・時間的に展開する戰況を活寫して居るから、叙事的・歷史的叙述の態度を學ばしめ、語句運用の巧妙を極めた點に就ても着目させる事が大切である。

4　本課は大體四時間見當で指導を完了する樣立案すべきである。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽海軍記念日に連繫させ簡單に話合ふ。然し餘りに深入して內容に觸れてはいけない。

2　全課を一度ゆつくり讀ませて見る。
　▽たつぷり時間を與へて。

3　話合。
　▽第一印象を中心に。

4　更に讀ませて話の大體を摑ませる。
　▽何時の話か、何處の國と戰つたのか、場所は何處か、誰と誰とが兩方の大將か？等。

5　不明の箇所を拾はせる。
　▽ノートに整理して記帳させる。

6　新出文字の指導。
　▽字書を輔導して其都度索引させる。
　編　擊　豫　闘　距　亂　着　熟　逃
　包　捕　獲　泣

7 難語句の指導。

▽術語が多いから一々板書して入念に取扱ふ。

連敗　回復　ほとんど　全勢力　編成　近海　豫め　全力　集中　報告　出動　いざなひ　皇國　興廢　各員　奮勵　努力　士氣　先頭　主力　後尾　先頭部隊　砲火　距離　應戰　艦列　戰列　熟練　續々　火災　前路　無二無三　四分五裂　進路　退路　包圍　覺悟したりけん　降服　幕僚　追擊　捕獲　捕虜　戰況報告　末尾　前記　奇績　御稜威　人爲ノ能クスベキニアラズ　僅少　歴代　神靈　加護　曩ニ　勇進敢戰　麾下　成果　感激の極　勝敗　上聞　祖宗ノ神靈　對フル　懌ブ　感泣

8 個有名詞は引離して別箇に指導する。

▽地名は地圖・人名は寫眞帖等に依り成るべく具體的に。

露國　第三艦隊　ウラヂボストック　朝鮮海峡　哨艦信濃丸　無線電信　小巡洋艦　沖島附近　旗艦三笠　戰闘旗　信號旗　司令長官　片岡・出羽・瓜生・東郷（正路）の諸隊　驅逐隊　水雷攻擊　水雷艇隊　鬱陵島　主戰艦隊　巡洋艦隊　ネボカトフ少將　戰艦ニコライ一世　ロジエストウエンスキー中將　連・陽炎　聯合艦隊

9 默讀。

▽文意の所在を考へさせて。

10 ノート作業。

▽讀み取つた事項を殘らず記帳させる。此の際教師は机間を巡視し個別に指導する。

11 指名讀。

▽一句切づゝ、數名に。

12 低音讀。

▽讀みの徹底を目的として。

13 ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1 通讀練習。

▽個讀に自由讀を交へて。

2 不明の箇所を質問させる。

3 指名讀。

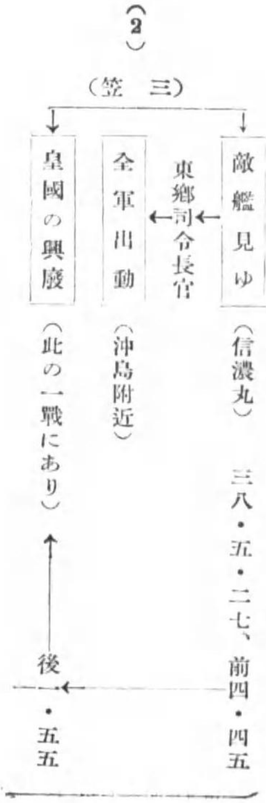
▽誤讀の箇所は板書して一齊に指導する。

4 箇讀。

▽文の觀點に注意させて。

5 逐次研究。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し各自のノートと對照させる。



(3) 東郷司令長官（六隻の戰艦）上村艦隊

先頭 敵（包圍）

後尾 片岡・出羽・瓜生・東郷（正路）の諸隊

(4) 我 ←（砲撃）→ 敵

我 → 六千メートル（沈着・熟練）

（前路をさへぎり）

（二回の水雷攻撃）

艦列忽ち亂れ → 續々火災 → 勝敗すでに定まる → 兩旗艦を始め諸艦沈没 → 四分五裂

後二・四五

（廿七日）

二十八日（天よく晴れて海上波靜か）

鬱陵島附近（敵を包圍）

前一〇・一五

(5) 敵

ニコライ一世以下四隻（降服）

司令長官ロジエストウエンスキー中將（捕へらる）

三十八隻（撃沈・捕獲）

逃れ得たるもの（巡洋艦以下數隻のみ）

死傷・捕虜（一萬六百餘人）

(6) 戰況報告

末尾に

奇績（能ク勝ヲ制シテ）

天皇陛下ノ御稜威

我ガ軍ノ損失・死傷僅少

歷代神靈ノ加護

麾下將卒（感激ノ極）

(7) 勅語

朕 → 汝等ノ忠烈ニ依リ

朕 → 得ルヲ懼ブ

朕 → 祖宗ノ神靈ニ對フル

將兵（感泣）

6 グループ學習。

▽文圖を中心に問題を作製させて。

7 默讀。

▽戰況の推移と文の眼目に注意させて。

8 話合。
▽文意を中心に、感想も交へて。
9 指名讀。
▽前半の戰況と後半の結末とに分ち、輪讀式に。
10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 全課を反覆通讀させる。

- 戰況
  - 我は近海に迎へ
  - 『敵艦見ゆ』
  - 『皇國の興廢……』
  - 六千メートル（砲火）
  - 水雷攻擊
  - 敵三十八隻
    - 擊沈・捕獲
    - 死傷・捕虜（一萬六百餘人）
- 結末
  - 天皇陛下の御稜威
  - 歷代神靈の加護
  - 將兵の忠烈
- （奇績）
- （感激）

▽活潑々地の戰況と後半の感激的場面を想像に描かせて。
2 指名讀。
▽中・劣生を主として。
3 話合。
▽感想を中心に。
4 文の主題を究明させる。
▽要點を文圖に纏めさせる。
5 話方練習。
▽劇的に、模寫的に。
6 文意の話合。
▽讀後の所感を交へて。

7 默讀。
▽文意を確認させる意味で。
8 朗讀練習。
▽特に勅語の箇所に注意させて。
9 作業。
▽說明入の海戰地圖を作製させる。
10 學習事項整理。
▽內容・形式の兩面に亘つて。

テスト問題

一、次の――線の附いた箇所を拔出して解釋しなさい。

1 午後一時五十五分、我が旗艦三笠は戰鬪旗をかゝぐると共に、信號旗を以て令を各艦に下せり。いはく

『皇國の興廢此の一戰にあり。各員一層奮勵努力せよ』

と。我が軍の士氣大いに振るふ。

2 風叫び海怒りて、波は山の如くなれども、沈着にして熟練なる我が砲員の打出す砲彈は、よく敵艦に命中して、續々火災を起し、黑煙海をおほふ。

3 我ガ聯合艦隊ガ能ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。

11 視寫・聽寫練習。
▽文の眼目たる重要な箇所を選んで。
12 補充說話。
▽海戰當時に於ける逸話の數々を實感的に。
13 新出文字の書取。
14 語句の應用練習。
15 テスト。

二、次の語句を使用する場合を例を擧げて答へなさい。

1　さへぎりて　　2　のみ

3　集中　　4　感激

5　感泣

三、次の文に（テン）や（マル）や（カギ）を附けて讀み易く文脈を正しなさい。

勝報上聞に達するや司令長官にたまへる勅詔の中に朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懼ブと仰せられたり將兵すべて感泣せざるはなかりき

第十一　皇國の姿

古事記其の儘の風格を具へた一大雄篇、皇國精神の行進曲だ。皇國に生れた御民我等は、何を措いても先づ此の皇國精神を辨へねばならぬ。それは古事記だ、日本書紀だ。

或る我が外交官が某國の大使館附と成つて其の國へ渡り、彼の國の人から御國の古事記とは何んな內容かと眞面目に訊ねられて返答が出來ず、大いに赤恥をかいたと聞くが、赤恥をかくのは右の外交官一人に止まらず、現代國民の大多數が御同樣では有るまいか。本卷第十一・第十二と引續いて、古事記を題材とされたのは所以なき事では無い。

前には紫式部の〝源氏物語〟で中古文字の概念に接し、〝見渡せば〟の國風に依つて古典文學の片影に觸れ、今又茲に力强い皇國精神の一大行進曲に接するを得た。斯くて御民我等の意氣を鼓吹し國魂を培はうと言ふ編者の親心であらう。本課は其の序曲とも見るべく、次課で解說と成り、更に第十三に引續いて古事記研究の第一人者本居宣長の逸話に繫がつて、三部作の完璧を期した當局の苦心に頭が下る。之でこそ我が國語讀本の眞骨頂も大いに發揮されるわけである。萬葉調の莊重・嚴肅な歌風、敬虔其の物の雰圍氣の中に古事記精神が燦として輝く。かしこしや產靈のみわざ。

文字語句

新出文字

ナシ

讀替文字

和（ヤハラギ）（新出は巻八、ワ）　幸（サチ）（新出は巻七、カウ）

語句と其の解說

皇國（クニ）　我が國の敬稱。主上の治め給ふ國土。御國。　**葦原の中つ御國**（ナカツクニ）　我が國の異稱。古事記、上に〝天照大神の命以（ミコトモチ）て、豐葦原の、千秋の、長五百秋（ナガイホアキ）の、水穗の國は、我（アガ）御子、正勝吾勝勝速日天の忍穗耳の命（マサカアカチカチハヤビアメノオシホミヽノミコト）の、知らさん國と、言（コト）よさし給ひて、天降（アマクダ）し給ひき。〟とあるに出づ。葦原は天上より此の國土を指して、開闢の木だ造まざる有樣を言つたもの。古事記の最初の伊邪那岐の命が、黃泉の國から逃げ歸り給ふ段に、葦原の中つ國とある。之は葦原に等しい。中つ國は後世に至つて、支那の中華・中國等といふに思ひ合せて、美稱と說く人もあるが、之は單に葦原の中に在る國と見る方が自然である。　**皇孫**（スメミマ）　皇御孫。天照皇大神の御孫。卽ち瓊瓊杵尊。日本書紀、神代記、下に皇孫（スメミマ）とある。延いて天照皇大神の御子孫。皇統の御子孫をいふ。　**いやさかえまし**　いやは彌。いよいよ。いよいよ。ますます。いやが上に。最も。さかえはさかえること。さかり。繁盛。繁榮。ましは未來を指し定めて言ふ助動詞。推量又は願望の意をあらはす。　**天壤**（アメツチ）　天と地と。宇宙。てんち。乾坤・六合（日本書紀神代紀、上）天壤（同、下）二儀（日本書紀

天智紀）　**きはみ**　極。きはまる所。はて。かぎり。きはまり。　**みことのまゝ**　みことは御言。こと（言）の敬稱。おほせ。みことのり。日本書紀神代紀、上に勅（ミコトノリシタマハク）、萬葉集、十四に〝大君の美己等（ミコト）かしこみ云々〟等ある。**神の御子**（カミ）　天照皇大神の御子孫。皇統の御子孫。卽ち代々のみかどをいふ。　**しろしめす**　知食。しろす（知）の敬語。統べ治め給ふ。領し給ふ。しろしめす。御治めになる。　**和らぎむつび**（ヤハラギ）　和らぎは和合。とけあふ。とける。爭はぬやうになる。睦しくなる。親しくなる。おだやかになる。むつびはむつぶこと。仲よく交る。親しむ。親睦。　**天と地**（アメツチ）　天壤を分けて言つたもの。日本書紀神代紀、下、天孫降臨の勅に〝因て皇孫（スメミマ）に勅して曰（ノタマハ）く、葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾（ア）が子孫（ウミノコ）の王（キミ）たるべき地（クニ）なり。宜しく爾（イマシ）皇孫就（ユ）きて治（シラ）せ、行矣（サキクアレ）、寶祚（アマツヒツギ）の隆（サカ）えまさんこと、まさに天壤（アメツチ）と窮（キハマリ）無かるべし〟とあるに出づ。行矣は天孫降臨の御發途を送る御詞で、行先の平安を祈らせ給ふ意を以て、サキクアレと讀むべきである。　**とは**　ときは（常磐）の略。とことは。ときは。とこしなへ。いつまでも。ふだん。いつも。つねに。永久。永遠。　**幸**（サチ）　さいはひ。幸福。しあはせ。　**日に月に進みて**（ヒニツキニスヽミテ）　日進月歩を碎いて言つたもの。日增に進むこと。絕間なく進歩すること。常に發達して居ること。日新。　**敷島の**（シキシマノ）　枕詞。やまとに續けていふ。敷島（磯城島）はもと崇神・欽明兩朝の都し給うた所。大和國磯城郡磯城島に在る。それで名高く成り遂に大和の枕詞と成つた。萬葉の〝しきしまのやまとの國にいかさまにおもほしめせかつれもなき城（キ）のべの宮に〟

と有るはそれである。轉じて日本の別名たるヤマトの枕詞にも用ひる事に成つた。例へば萬葉の〝しきしまのやまとの國はことだまのたすくる國ぞ〟等と有るはそれである。敷島は日本の國號の一。欽明天皇の磯城（シキ）島の金刺宮（カナサシノミヤ）から出で、敷島の大和と言つた。本居宣長の說に大和は一國を指すのでは無く、邦の意味で有つたが、後に敷島の大和の國とも言つて、枕詞の樣に成つたと言ふ。枕詞を其の枕詞が修飾する詞の代に使ふ例があるから、敷島を大和の代に使つて國號としたものである。

なべて　並て。おしなべて。ひつくるめて。すべて。一般に。大抵。一切。

高皇產靈（タカミムスビ）・神皇產靈（カンミムスビ）　天地開闢の神話に出づ。天地の始、高天原には天御中主尊・高皇產靈尊・神皇產靈尊の三神が生れた。之を造化の三神と言ふ。（古事記）　此の時宇宙は天地も未だ別れず、混沌として漂ふ中に、諸の物の芽を含んで居た。其の中に澄んで輕い物は浮び上つて天と成り、重く濁つたものは澱み沈んで地と成つた。中に葦の芽の樣に萠え出て生れた神、國常立（クニノトコタチ）尊（古事記には天之常立神とある）から七代目に伊弉諾・伊弉冉の二神は國土生成の爲、天浮橋に立ち、天瓊矛（アマノヌボコ）を下して探ると、矛の滴りが滴たつて島と成つた。之を磤馭盧（オノコロ）島（自凝島）と名附け、二神は此處に降り、天の御柱を立て、八尋殿を建て給うた。之からが所謂國土生成の神話である。

かしこしや　かしこしは恐れ多い。勿體ない。かたじけない。有難い等の意味を持つが、此處のかしこしは靈驗あらたかな意に解すべきであらう。やは感動詞、いたく感じた際に發する聲。けにや・あなや等。

產靈（ムスビ）　天地萬物を產み出す靈妙な神靈。神祇信仰の一種。又魂の字を宛て、產巢日とも

書く。生成化育の力に對する日本民族の根本的信仰で、神代紀には造化三神として天之御中主神に次で產靈の神として現る。古語拾遺・延喜式祈年祭の祝詞（ノリト）に依れば、神祇官の八神殿には此の二柱の神の外に、魂留（タマツメ）產靈（玉積魂）・生產靈（生魂）・足產靈（足魂）等を祀る。平安朝にはムスブ（結）の神としての信仰が行はれた。ムスは見えないものが目に附く樣に發生する作用、又は見えない力の發動する作用を言ひ、ビとは靈又は日の字を宛てた樣に、ヒと同じく現象界乃至宇宙間に於ける靈妙な力を名づけたもので、明滅の間を動く力に對する信仰である。明治以後の神道家には、此の信仰を哲學的に論ずる者が多い。

みわざ　わざ（業）の敬。何事かをすること。するわざ。しわざ。おこなひ。しごと。又子を產むこと。產み出すこと。產。

指導精神

皇國精神の淵源、本卷各課の朝宗する所、前課の思想的背景に依つて一段の感激性を帶び、次の『古事記の話』『松阪の一夜』に至つて愈々最高潮に達する。配材の苦心を忖度して取扱を誤らぬ用意が肝要であらう。前半は惟神（カンナガラ）の道、後は明滅の間に動く產靈の力、皇國精神の核心は之を置いて他に無い。詩柄も莊重・雄大。然も敬虔其の物の風格を具へ、恰も萬葉の歌集を繙くの思ひがある。蓋し稀に見る雄篇、俗流の企及し得ぬ大作と言つて過言では有るまい。

指導に際して注意すべきは、先づ比類無き我が國體精神を明かにして掛ることである。德富蘇峰の〝國民小訓〟に、日本國民の第一の義務は日本國を知ることである。詳く言へば日本の國體を知ることである。

日本の國體の世界に卓越したる所以を知ることである。日本は國として面積も廣くない。人口は少くはないが、世界第一と言ふ程ではない。天福地惠には最も薄く且つ貧しと言はざるも、決して豐葦原の瑞穗國として獨り自ら誇る程ではない。されど日本は世界に比類なき國體を持つて居る。それは言ふ迄もなく萬世一系の皇室を元首として戴く事だ。之は世界の何れの隅々迄探しても我と同じきもの無きは勿論、其の後に續く者さへ未だ見出さぬ。然も萬世一系の皇室は我が大和民族の外に聳えたるものでなく、大和民族の中心であり本根であり樞軸である。平たく言へば、大和民族なる一大家族の本家本元である。所謂君父の熟字は我が皇室に於て全く適當である。即ち一方に於ては日本國の元首であり、他方に於ては大和民族の家長である。即ち之が君であり、且つ之が父である。日本帝國の誇りは此の君民一家族である事と思ふ。之が日本國體の精華である。若し之を除外し去らば、日本は他の諸國と一長一短あるに過ぎぬ。

凡そ新に國を建てるものは、必ず先づ組織を先にして實際を後にす。初めに制度を設け然して後それを施す。人民ありて然して後元首あり。其の元首は人民の中の或者を選擇するあり、或は他國より迎へ立てる者あり、或は他の民族が其の國を侵略し其の人民を征服して自ら其の元首となるあり。何れにしても人民と元首との關係は人と帽子との如く、頭首には戴くも身體とは直接の關係なく、時と場合によりては取換へ引換へが出來る樣だ。之は世界列國、其の君主國と共和國との差別なく、概して其の通りである。然るに我が日本帝國の國體は全く之に反して居る。日本に於ける元首と人民とは、頭首と身體との關係である。單に上に頂くのみではない。頭首其の物が人身の一部である。否人身の主腦である。帽子は取換へ又も將た捨て去りても、人身には何等關係がない。されど頭首を斷てば人身は全く死せねばならぬ。日本では人民ありての皇

室でなく皇室ありての人民である。皇室と人民とは本是れ同根より生じたる者である。然して皇室が大和民族の本幹にして、人民は其の枝葉である。固より皇室と人民とは、軫卑の別はある。されど我等臣民は皇室を元首として仰ぐのみならず、我が民族の宗家として仰ぐを得るのは、我等に取りて無上の光榮である。

國の本は家にありと言ふが、我が日本帝國に於ては一國即ち一家であり、一家即ち一國である。法制的に見れば一國の元首と、其の臣民である。八族的に見れは一族の族長と、其の眷屬である。君となり父となるとは、支那に於ける堯舜政治の理想であつた。されど我が日本帝國に於ては、それが現實であつた。然して又實際である。然して萬々世迄も其の通りであらねばならぬ。若し單に建國の古きを比較せん乎。支那の如きは寧ろ日本帝國より優れりとせん。されど支那の漢民族は古今を通じて存續するも、革命の國體だ。陶虞三代より國民政府の今日に至る迄、殆ど三十朝を經來つて居る。固より我が萬世一系の皇室を頂くものと同一に論ず可き筋合でない。

支那各朝の領域は時と場合とに依りて恒に伸縮して居る。然して漢民族が支那內地に於ける中樞民族である事は終始一貫であるが、然も勘もすれば外部の民族に脅威せられ侵略せられ襲擊せられ征伏せられたる歷史的事實が多い。兎に角支那は革命の國體であり乍ら、漢民族の悠久なる存續は世界史上の一大驚異と言ふも差支へあるまい。されど日本は猶更である。其の主權は神代の古より昭和の今日に至る迄、未だ曾て他より侵されたる事がない。絕對獨立の主權とは日本に於ける天皇に於て始めて其の事實を見る。現在の大和民族と言ふ中には、種々の混合したる要素がある。そは弘仁六年萬多(マタ)等親王等の撰せられた新撰姓氏錄に皇別・神別・蕃別の差別あるを見ても分明だ。歷史上に於て明白な差別さへ此の如くなれば、歷史の未だ存せざる

以前若くは歴史に記載せられる事の漏れたるもの尚多かる可きは固より言ふ迄もない。されば現在の大和民族は必ずしも單一の種族でなく、凡ゆる種族の混一・化合したるものである事は決して疑ふ迄もない。されど各種の鑛物を鑄冶して一種の合金をなしたる如く、然して其の合金は他の單純の金屬よりも更に硬勁の性を帶びたる如く今や嚴然として一種の大和民族は出で來りて居る。然して我が皇室を中心として、本支相倚り相續りて居る。今日に於て復た何ぞ皇別・神別・蕃別を說く必要あらむ。長き歴史の潮流には總てのものを融會して、一の大和民族をなして居る。乃ち此の如くして我が日本帝國は世界に比類なき一種の血族的帝國をなして居る。

我が長き歴史の上に國運の隆替盛衰の存したる事は決して不思議はない。されど未だ一回も外敵に征伏せられたる事實はない。領域其の物に就ても聊かの伸縮曾て無かりしとは言はぬ。されど我が蜻蛉洲、我が大八島は古も今も依然たる我が日本帝國の版圖である。此の如く我が日本國として最も完全なる資格を持つて居る。一定の領域、一定の民族、然して一定の主權、悉く皆圓滿に具足して居る。今古世界何れの國か之に比す可きものがある。然してそれよりも尚一層日本帝國の特色と言ふ可きは、一國の主權者が同一民族の中心より起り、同一の領域を悠久永遠に統治する事である。之が日本の國體の世界萬國に比類なき所以だ。此の如き國體は決して一朝一夕に構成したるものでない。有史以前より卽ち我が神代より極めて長き年代の內に、自然に發達成長して茲に至りたるもの。されば日本の國體は歴史的に觀察すれば、製造したるものでなく成長したるものである。然して其の成長の本源は我が民族の大宗たる皇室に存す、と。國體精神を明瞭に指示して居る。本課の指導者も先づ之に依つて國體觀念を明確にし、彝倫攸叙の我が國振を知つて然る後敎

壇に立つの用意が肝要であらう。

指導形態

指導上の認識點

1　本課に於ては先づ御神勅の廣大な御精神に感激せしめ、皇統と國土と國民とが一つの見事な統合の下に、日に月に產靈のみわざを發揮して天壤無窮の大發展を遂げ行く有樣に限りなき喜悅と誇を內觀せしめるに在る。

2　更に此の國に生れた事の感激から、皇國民の一人として生を受けた光榮に報ひる事に深き決意を持たしめる事も忘れてはならぬ事である。

3　指導に際しては古典的な用語も少く無いから、其の出典と成つて居る古事記や日本書紀を適宜引用して多少の補說を加へる要があらう。語句に兒童性から見て多少の距離があるものも多いから、兒童の能力に依つては幾らか補說を要するであらう。

4　尙初學年で學習した神話や尋五の國史學習等と密接に連繫させ、國體觀念の養成と皇國精神の明徵に力める事は本課指導の鐵則たるを忘れてはならぬ。

5　本課は二時間見當で如上の目約を貫徹する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽既習の〝御民われ〟と聯關させ、題意を漠と豫想させて見る。

2　徐に一回通讀させる。
▽視寫又は聽寫させても良い。

3　讀後の印象を話させる。
▽紙片を與へテスト式に筆答させるも良い。

4　不明の箇所を質問させる。
▽古典的の語句は特に入念に處置し、場合に依つては出典を示し簡單な附說を加へる。

天照らす神　のたまはく　葦原の中つ國
皇孫の治むべき國　いやさかえまし　天
壤　きはみ　みことのまゝ　神の御子
しろしめす　神と人と　和らぎむつび
天と地と　とはに　幸　敷島の日本の國
人の世　なべて　高皇産靈　神皇産靈
かしこしや　産靈のみわざ

5　數回繰返して默讀させる。
▽國史學習の御神勅を想起させる。
6　話合。
▽把握した詩境を中心に。
7　範讀。
▽文の觀點に力を入れて。

皇國の委

- 御神勅
  - 葦原の中つ御國……國土（大日本）
  - 皇孫の治むべき國……主權（皇統）
  - 御位はいやさかえまし……寶祚（彌榮）
  - 天壤ときはみなからん……天壤無窮
- 神と人
  - 大神のみことのまゝ……神隨の道
  - 代々のみかどのしろしめす……現人神の統治國
  - 神と人和らぎむつび……和魂親睦
  - 天と地とはとに幸あり……國土安泰

8　指名讀
▽一聯づゝ、輪讀式に。
9　低音讀。
▽歌はれた詩の趣を頭に描かせて。

第二、三次指導

1　全詩の聽寫。
2　讀合。
▽讀合せと同時に語句を吟味する。
3　一度靜かに通讀させる。
▽詩心や詩情を汲ませて。
4　逐次研究。
▽頃合を見て要點を板書して纏める。

5　書取。
▽板書事項を視寫させる。
6　話合。
▽詩境や詩情を中心に。
7　語譯練習。
▽一句づゝ口語化させて。
8　全詩を散文化させる。
▽難譯の箇所は示範して。
9　詩形の吟味。
▽既習の詩形と比較させ、本詩が(五)(七)の五句三聯から成り、莊重・雄大然も敬虔其の物の風格を具へた萬葉風の作柄である事を呑込ませる。

- 産靈の神わざ
  - 日に月に進みて止まぬ……日進月歩
  - 敷島の日本の國……神國日本
  - 人の世の力はなべて……舉國一致
  - 高皇産靈・神皇産靈……造化の神
  - かしこしや産靈のみわざ……創造化成

10　範讀。
▽詩柄に卽して嚴かに重々しい口調で。
11　追範讀。
▽敬虔な態度で教師先づ範讀し一句宛唱和させる。
12　朗讀練習。
13　全詩の暗誦・暗寫
14　歌謠化練習。
▽各自にメロデーを工夫させて。
15　新出文字の書取。
16　語句の應用練習。
17　テスト。

テスト問題

一、次の詩句を分り易い口語に直しなさい。

日に月に進みて止まぬ
敷島の日本の國の
人の世の力はなべて
高皇產靈・神皇產靈の
かしこしや、產靈のみわざ。

二、次の詩を讀んで後の問に答へなさい。

天照らす神のたまはく
『葦原の中つ御國は
皇孫の治むべき國
御位はいやさかえまし
天壤ときはみなからん。』

(1)　のたまはくの意味內容。
(2)　葦原の中つ御國とはどこのことか。
(3)　皇孫とあるのはどなたのことか。
(4)　御位はいやさかえましのわけ。
(5)　こゝを讀んでどう思ふか。

三、次の詩を讀んで一線の附いた箇所を解釋しなさい。

(1)大神のみことのまゝに
神の御子、代々の(2)みかどの

(3)しろしめす我が日の本は
神と(4)人和らぎむつび
天と地(5)とはに幸あり。

(1)（　　）
(2)（　　）
(3)（　　）
(4)（　　）
(5)（　　）

第十二　古事記の話

古事記の由來する所を知らせた三部作の中核である。觀點は言ふ迄もなく古代精神の感得に在るが、如何にも具體的で分り易く、其の成立や編纂上の苦心の程が手に取る樣に巧に描かれて居る。文は大體古事記の序に據り、阿禮の强記と安萬侶の苦心が其の中心と成つて居る。取扱には先づ本課の母胎たる古事記の序を一讀し、同書の成立や古事記精神の淵源する所を確める要があらう。

古事記の由つて來る所は遠く天武天皇の朝に在る。天皇は諸家の傳ふる帝紀及び本辭が既に正史に相違して、多く虛僞を加ふるを憂ひ給ひ、新たに帝紀を撰錄し舊辭を討覈し、僞を削り實を定めて、以て後世に傳へ給はんとし、舍人の阿禮に勅語し史實を誦せしめ給うたので有つたが、阿禮は性來記憶强く、一度耳にした事は悉く之を暗誦して忘れぬと言ふ稀代の人物で有つた。然るにそれから三十數年を經た和銅四年に至つて、阿禮は既に六十に近く頭髮も白く成りかけたので、元明天皇は彼が生存のうちに、早く其の暗んじた處を語らせ、太安萬侶に撰錄する樣にと勅命が下つたのが同年九月十八日の事であつた。即ち古事記の編纂が完了して獻上された和銅五年正月二十八日迄、僅か四ヶ月餘で大成したわけである。阿禮は一說に婦人であつたとも言ふが詳かではない。安萬侶は當時正五位上勳五等の位階を有して朝廷に奉仕する博學能文の學者で有つて、彼の手に成る古事記の序文を見ても如何に名文家であつたかゞ察知される。斯くて我が開闢以來の歷史編纂の大業が初めて此の二人に依つて完成されたと言ふが、其の以前には何うして我が國に大切な史

實を記載した書物が無かつたのかと不審を抱く兒童も有らう。其の書類さへあれば阿禮に暗誦させる迄もなく、それらの文獻を更に改編收錄すれば良い筈だと言ふ疑問が起るかも知れぬ。

實はそれから前に溯ること六十六年前の皇極天皇四年六月十二日、中大兄皇子は石川麻呂と謀らせられ、蘇我入鹿を大極殿に誅し、其の翌十三日には巨勢德太古が官兵を率ゐて蘇我蝦夷を攻めた時、蝦夷は最早抗して敵はぬと見て自害する前に、其の豪壯な邸宅に火を放つて灰燼と化せしめた。其の中に大きな寶庫や書庫もあり、書庫には帝紀・國記等の貴重な文獻が藏されて居たが、それらも忽ち燒失して仕舞つた。外に同樣の記錄（寫本）が無かつた爲、開闢以來の歷史は悉く喪失されたわけで、それ故文武天皇は宸襟を惱ませ給ひ、即ち阿禮と安萬侶に勅し給ふた次第である。兩人の大業完成に依り、我が尊い史實が今日に傳はつた事を思へば、其の功績の如何に偉大なもので有つたか、察するに餘りがあらう。

文字語句

新出文字

凡（ボン）　殆（ホトンド）　簡（カン）　單（タン）

讀替文字

魂（コン）（新出は卷七、タマシヒ）　便（ベン）（新出は卷十、ビン）　例（タトヘ）（新出は本卷、レイ）

語句と其の解說

古事記（コジキ）　上中下三卷。我々國開闢の初めより推古天皇の御代迄の事を記した最古の史書。此の以前に

編せられたものは多く蘇我蝦夷の滅亡と共に燒け失せた。天武天皇は諸家に傳はる皇紀に誤多きを歎かせ給ひ、撰錄して親ら語部（カタリベ）の舍人稗田阿禮に口誦して置かせられた。後凡そ三十年を經て和銅四年に元明天皇が史（サクワン）太安萬呂に詔して阿禮の口誦に本づき編述、翌五年正月、完成したのが此の古事記である。萬葉假名で記し音讀・訓讀を交へた國文で、古傳を修飾せずに記した點で日本書紀より價値が高いと言はれて居るが、著しく神話的色彩に富んで居る。

元明天皇（ゲンメイテンノウ）　御名は阿閉、日本根子天津御代豐國成姫天皇と謚す。天智天皇の第四皇女、御母は蘇我山田石川麿の女蘇我嬪、草壁皇太子の妃であつて文武・元正兩天皇の母后、第四十三代の天皇。奈良七代の最初のみかど。

大安萬侶（オホヤスマロ）　和銅四年元明天皇の詔を奉じ、天武天皇が稗田阿禮に誦習せしめられた舊辭を撰錄し、翌五年之を奏上した。本課の古事記三卷が卽ち之である。安萬侶は又日本書紀の撰修にも與つた。從四位民部卿。養老七年歿。明治四十四年三月贈從三位。

稗田阿禮（ヒエダノアレ）　天鈿女命の裔。天武天皇國史撰修の爲、阿禮に勅して帝皇の日嗣及先代の舊辭を誦習せしめられた。時に阿禮は二十八歳の舍人であつた。後、太安萬侶をして阿禮の記憶せる古事を撰錄せしめたのが卽ち今傳はる所の古事記である。

古傳（コデン）　ふるい言ひたつへ。舊辭。古事記の序に、天皇（天武）詔り給はく、朕聞く諸家の賫（モ、齎の古字）たる所の帝紀及本辭、旣に正實に違ひ、多く僞虛を加ふと。今の時に當つて其の失を改めずば末だ幾年を經ずして其旨の滅びむとす。斯（コレ）乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟（カレコレ）帝紀を撰錄し舊辭を討覈して、僞を削り實（マコト）を定め、後葉に流（ツタ）へむとすと詔（ノ）給ふ。時に舍人あり、姓は稗田、名は阿禮、年是れ廿八。人と爲り聰明にして、目に度（ワタ）れば

口に誦み、耳に拂（フ）るれば心に勒（シル）す。卽ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼及先代の舊辭を誦（ヨ）み習はしむ。然れども運移り世異（カハ）りて、未だ其の事行はれず。伏して惟ふに皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育し給ふ。紫宸に御して德馬蹄の極むる所に被（カウム）り、玄扈に坐して化船頭の逮ぶ所を照し給ふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね、穗を併すの瑞。史書すことを絕たず、烽を列ね譯を重ぬるの貢、府空しき月無し。名は文命より高く、德天に冠（マサ）れりと謂ひつべし。焉（コヽ）に舊辭の誤り忤（タガ）へるを惜み、先記の謬り錯（アヤマ）れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、稗田阿禮が誦（ヨ）む所の勅語の舊辭を撰錄して、以て獻上せしむてへり、とある。

非凡（ヒボン）　凡庸でないこと。秀でゝ居ること。なみなみならぬこと。

心魂（シンコン）　こゝろ、たましひ。精神。

安萬侶の苦心（アンマロノクシン）　之は表記の苦心である。此の邊も古事記の序に、謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り摭（ヒロ）ふ。然るに上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て卽ち難し。已に訓に依りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音を以て連ぬれば事の趣更に長し。是を以て今或は一句の中、音訓を交へ用ひ、或は一事の內、全く訓を以て錄す。卽ち辭の理見え匡（ガタ）きは、注を以て意を明かにし、況や解し易きは更に注せず。亦姓の日下（クサカ）を玖沙訶と謂ひ、名の帶（タラシ）の字を多羅斯と謂ふ。此の如きの類は本（モト）に隨つて改めず。大抵記す所は、天地の開闢より始めて、以て小治田（ヲハリダ）の御世に訖（ヲ）ふ。天の御中主の神より以下、日子波限建鵜草葺不合の尊より以前を上卷と爲し、神倭伊波禮毘古天皇より以下、品陀（ホムダ）の御世より以前を中卷と爲し、大雀（オホサ

ヽギ）の皇帝（スメラミコト）より以下、小治田の大宮より以前を下卷と爲す。併せて三卷を錄し、謹みて以て獻上す、臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首、とある。

いろ〳〵の方法　所謂萬葉假名である。其の苦心の程は前の序を見れば詳かである。萬葉集に主として用ひられたから此の名がある。宇音・宇訓・戲訓などの種類がある。宇音は阿（ア）安（ア）伊（イ）以（イ）烏（ウ）衣（エ）延（エ）の如く、宇訓は足（ア）枝（エ）の如きものを言ふ。戲訓には牛鳴をムと讀み、十六と書いてシシと讀み、山上復有山をイヅル（出）と讀ます如きものがある。例へば家持の和（ワ）我（ガ）保（ホ）利（リ）之（シ）安（ア）米（メ）波（ハ）布（フ）里（リ）伎（キ）奴（ヌ）可（カ）久（ク）之（シ）安（ア）良（ラ）波（バ）許（コ）登（ト）安（ア）氣（ゲ）世（セ）受（ズ）杼（ト）毎（モ）登（ト）思（シ）波（ハ）佐（サ）可（カ）延（エ）牟（ム）の如きは音で讀むもので比較的容易であるが、忘哉語意遣（ワスルヤトモノガタリシテココロヤリ）雖過不過猶戀（スグセドスギズナホゾコヒシキ）の如きは訓で讀むもので、前者に比して一層困難を加へる。更に前二者を混用されるものに漢文其の儘を用ひる正訓、朝露（アサツユ）天地（アメツチ）秋霧（アサギリ）、意義に從つて讀むべき義訓、金風（アキカゼ）若月（ミカヅキ）若兒（ミドリゴ）、又虛榮的・兒戲的な戲訓、重二（四）八十一（九九）蜂音（ブ）馬聲（イ）追馬喰犬（ソマ）犬馬（マソ）義之（テシ）大王（テシ）等があつて頗る難解を極める。

和銅　元明天皇の御宇の年號。慶雲五年正月十一日、曩に武藏國秩父郡から和銅を獻したので改元された。七年を經て元正天皇卽位し給ひ靈龜と改められた。

國初以來　國初は一國成立のはじめ。建國の當初。以來はこのかた。この後。

資料

原據

古事記序（太安萬侶上書）

臣安萬侶言す。夫混元既に凝り、氣象未だ效れず、名も無く爲も無し、誰か其形を知らむ。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、二天之御中主神、高御產巢日神、神產巢日神の三柱を云ふ陰陽斯に開けて、二靈群品の祖たり。（伊邪那岐伊邪那美の二柱を云ふ）所以に幽顯に出入して、（黃泉國）日月目を洗ふに彰れ、海水浮沈して、神祇身を滌ぐに呈る。（阿波岐原の御禊を云ふ）故れ太素の杳冥なる、（天の岩屋の故事）本數に因りて土を孕み島み產み給ひし時を識り、元始の綿邈たる、先聖に賴りて神を生み人を立て給ひしの世を察にす。寔に知る鏡を懸け珠を吐きて（須佐之男命の御誓約）百王相繼き、劒を喫ひ蛇を切つて、（八俣の大蛇の故事）萬神蓄息することを。安の河に議りて天下を平げ、（天孫降臨）小濱に論ひて國土を淸めき。（伊邪那岐の小濱の故事）是を以て番仁岐命、初め高千の嶺に降り給ひ、神倭の天皇秋津島を經歷し給ふや、化熊爪を出で、天劒高倉に獲、生尾徑に遮り、大烏吉野に導く。傷を列れて賊を攘ひ、歌を聞いて仇を伏す。（何れも神武御東征の故事）卽ち夢に覺りて神祇を敬ひ給ふ、（崇神天皇の故事）所以に賢后と稱せらる、烟を望みて黎元を撫で給ふ、今に聖帝と傳ふ。（仁德天皇の故事）境を定め邦を開いて近ツ淡海に制し給ひ、姓を正し氏を撰みて、（允恭天皇の故事）遠飛鳥に勒し給ふ。歩驟各異に、文質同じからずと雖、古を稽へて以て風猷を既に頹れたるに繩し、今を照して以て典敎を絕えむと欲するに補はずといふ事

莫し、飛鳥清原の大宮に大八州御めしゝ天皇の御世に壓びて、（以下天武天皇の御事）潛龍元に體し、洊雷期に應ず、夢の歌を聞いて業を纂むことを想ひ、夜の水に投りて基を承むことを知ろしめす。然れども天の時未だ臻らず南山に蟬の如く蛻け給ひ、人事共に洽くして、東國に虎の如く步み給ひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌ぎ渡り、六師雷の如く震ひ、三軍電如く逝く。杖矛威を擧げて、猛子烟の如く起り、絳旗兵を耀かして凶徒瓦の如く解けつ。未だ浹辰を移さずして、氣沴自清まりぬ。乃ち牛を放ち馬を息へ、愷悌して華夏に歸り、旆を卷き戈を戢め、儛詠して都邑に停り給ふ。歲大梁に次り、月夾鍾に踵りて、淸原の大宮にして、昇りて天位に卽き給ふ。道軒后に軼ぎ、德周王に跨え給ふ。乾符を握り六合を總べ天統を得て八荒を包ね給ふ。二氣の正しきに乘じ、五行の序を齊へ給ふ。神理を設けて以て俗を奬め、英風を敷きて以て國を弘め給ふ。重加ならず智海浩瀚にして、潭く上古を探り、心鏡煒煌として、明かに先代を覩給ふ。是に於てテ天皇詔りして給はく、朕聞く諸家の賫たる所の帝紀及本辭、旣に正實に違ひ、多く僞虛を加ふと。今の時に當つて、其失を改めずば、未だ幾年を經ずして、其旨滅びむとす。斯乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟帝紀を撰錄し、舊辭を討覈して、僞を削り實を定め、後葉に流へむとすと詔給ふ。時に舍人あり、姓は稗田、名は阿禮、年是れ廿八。人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒す。卽ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼及先代の舊を誦み習はしむ。然れども運移り、世異りて、未だ其事行はれず。伏して惟ふに皇帝陛下、（元明天皇の御事）一を得て光宅し、三に通じて亭育し給ふ。紫宸に御して德馬蹄の極むる所に被り、玄扈に坐して化船頭の逮ぶ所を照し給ふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね、穗を拜すの瑞。史書することを絕たず、烽を列ね譯を重ぬる貢、府空しき月無し。名は文命より高く、德天乙に冠れりと謂

ひつべし。焉に舊辭の誤り忤へるを惜み、先記の謬り錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、稗田の阿禮が誦む所の勅語の舊辭を撰錄して、以て獻上せしむてへり。謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り摭ふ。然るに上古の時、言意幷に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て卽ち難し。已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮はず。全く音を以て連ぬれば、事の趣更に長し。是を以て今或は一句の中、音訓を交へ用ひ、或は一事の內、全く訓を以て錄す。卽ち辭の理見え匡きは、注を以て意を明かにし、況や解し易きに更に注せず。亦姓の日下を玖沙訶と謂ひ。名の帶の字を多羅斯と謂ふ。此の如きの類は本に隨つて改めず。大抵記す所は、天地の開闢より始めて、以て小治田の御世に訖ぶ。（推古天皇御世）天の御中主の神より以下、日子波限建鵜草葺不合の尊より以前を上卷となし、神倭伊波禮毘古天皇（神武天皇）より以下、品陀の御世（應仁天皇）より以前を中卷と爲し、大雀の皇帝（仁德天皇）より以下、小治田の大宮（推古天皇）より以前を下卷と爲す。幷せて三卷を錄し、謹みて以て獻上す。臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首。

和銅五年正月二十八日　　正五位上勳五等　太朝臣安萬侶　謹上

指導精神

前課の後を受け此處では愈々其の古代精神を宿す我が國唯一の神典とも言ふべき古事記の由來する所を知らせ、之が編纂に際しての苦心と、古典愛好の念を培はうと言ふのである。題材の古事記は和銅五年正月二十八日の撰進、其の由來は太安萬侶が書いた古事記の序に據つて知られる。（資料參照）卽ち天武天皇は諸家に傳ふる帝紀や本辭の正實に違ひ多く虛僞を加へたるを歎かせ給ひ、邦家の經緯であり王化の鴻基である

帝紀及舊辭を撰錄討覈して後葉に傳へんと思召され、非凡なる記憶力を有して居た舍人稗田阿禮に詔して、帝皇の日繼と先代の舊辭とを誦習せしめられた。然るに此の事は天皇の御在世中には完成され無かつたが、御遺志は元明天皇に依つて繼承せられ、天皇も舊辭の誤忤と先紀の謬錯とを惜しみ給ひ、和銅四年九月十八日に太安萬侶に對して、稗田阿禮が誦習した勅語の舊辭を撰錄して獻れと命じ給うた。安萬侶は聖旨を體して仔細に採り摭ひ、古意古言の保存に努め、三卷を錄して和銅五年正月二十八日に獻つたとある。天武天皇の帝紀・舊辭削定の御事業は、一に天皇の復古的精神と敬神崇祖の大御心、即ち日本主義的精神に基くものである。此の事は序に〝智海浩翰にして潭く上古に探り、心鏡煒煌として明かに先代を覩給ふ〟と有るに據つても知られる。當時大陸文化は遺憾なく我が國に押寄せ、之に憬れた結果大化の改新が斷行せられ、一方には佛教思想が朝野に浸潤して固有の精神を尠からず壓迫した。茲に於て急進主義の天智天皇に代らせられた保守主義の天皇が外に在つては國家の獨立と尊嚴を宣揚し、內に在つては皇室並に諸氏族公民等の由來と國土の起原とを明かにして國家的精神を高調し、日本主義的精神を貫徹せんとして舊記の削定を企て給うたのである。

古事記は上中下三卷から成り、上卷は天地開闢の時から鵜草葺不合命迄、中卷は神武天皇から應神天皇迄下卷は仁德天皇から推古天皇迄の記事を收め、皇室の御系譜を經とし、神話・傳說・說話を緯として、國土の起原、皇室の由來、諸氏族の出自を語り、全體に一貫した國家的精神を以て統一したものである。全卷から御系譜の部分を除くと、上卷は主として神話であり、中卷以下は主として傳說であり、其の間に三輪山式說話・浦島式說話・太陽崇拜說話・太陽托胎卵生說話・動物說話・怪物退治說話・妻爭說話・兄弟軋轢說話

力競說話・英雄求婚說話・大樹說話・地名說話等や、無定形のものに出發し漸次片歌・旋頭歌・短歌・長歌と形式的に整齊せられた各種の上代歌謠、及び若干の俚謠を織交ぜて居る。上卷の說話は大體に於て絕對神自然神・人格神を主動者としての物語を展開し、宇宙の初發から國土人類の生成・生死の問題を叙述し、三貴子の出現に依つて須佐之男命を楔として、天照大神（高天原）と大國主神（地上界）との交涉を詳說し、天孫の降臨・延いては海神の宮居に就いて物語つて居る。神話の舞臺も高天原・地上（主として出雲と日向）黃泉國・常世國と變化して居るが、國家的精神を以て全篇を貫き、一つの繼つて物語として叙述されて居るのが其の特徵である。中卷以下の傳說に於ても國家的精神が其の基調を成して居る事は上卷と同樣であるが、天皇御一代每に話が改まつて居るのが著しい差異である。又上卷に於ては神が現身の儘に活動して居るが、中卷以下に於ては現身を顯す事なく、神夢・神託に依つて人と交涉してして居ること、即ち上卷は神の代、中卷は人の代と確然と區別されて居るのが特徵である。更に上・中兩卷に比して下卷は歌物語的色彩に富んで居ること、及び中卷には天下國家に關係を持つ物語や神祕的物語が多いに拘らず、下卷には其等が極めて少い事も注意すべき特徵である。尙全篇を通じて見ると、古言・古意を忠實に保存して居ること、主として神若しくは人を中心として物語つて居ること、人物事件が概して類型的であること等の特徵を擧げる事が出來る。古事記の藝術的價値として諸家の見る所は、

1 豐富な直觀を素朴な思惟に依つて纏めて居ること。
2 無邪氣な愛らしい調子に富んで居ること。
3 物語は深刻味に乏しが其の中に常に濕やかな情趣深い調子を含んで居ること。

4　英雄的性質と情趣的性質との交錯に依つて氣分の轉換が行はれ、之に依つて藝術的價値を著しく高めて居ること。

5　場面の變化に依つて生々とした感じが全篇に漲つて居ること。

6　挿話を適宜に配して本系的說話に變化を與へ其の質量を增加せしめて居ること。

7　當時の歌謠を巧みに人物又は事件に結ひつけて居ること。

8　叙事的・抒情的・劇的の諸要素を包括して之を一體と成し得たこと。

等の諸點に一致して居る。古事記の研究は多樣を極めるが、更に觀點を異にすれば此書は古代國語の寶庫であり、神話・傳說・說話に富み、精靈及神の信仰、神祇の祭祀・生死に關する儀式慣習、禁忌・呪術・宇氣比・探湯・卜占・神夢・神託・拂淨等の宗教的信仰儀式を豐富に示し、同時に歷史的事實を多分に包含した點に於て、實に古代に於ける國民生活を活寫した最も貴重な文獻の一つである。從つて文學作品としての研究は勿論、言語・神話・宗教・土俗・歷史・民族心理等の各方面からの檢討を俟つて、初めて其の眞價が明かにされるのである。本課は大體古事記卷頭の序を基とし、之を具體化するに萬葉假書を以てして居る。取扱に際しては如上の大要を知悉し、尙直接原據たる古事記卷頭の序を一讀すべきである。古典特有の聊か難澁な箇所も少く無いが、上述の解說と對照して讀めば、大意を得るには大した面倒も無いであらう。源氏物語や古事紀等も同樣であるが、古典は古典に依らねば其の風格を味ひ得ない事を忘れてはならぬ。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指標は古事記の由來する所を知らせ之が編纂の任に當つた安萬侶の苦心と、天武元明兩天皇の御叡慮の程を拜察せしめるに在る。

2　尙古事記は古代精神の淵源であり一箇の堂々たる文學であるから、我が國柄を知らせるに良く、古代の國民精神や感情を讀むに良い事を知らせ、古事記に就ての關心を深める事も重要な指導眼目である。

3　既習の神話や古傳說・並に國史學習と連繫させ、古事記が如何なる內容を持ち、それが我々の生活と如何に密接であるかを知らせて古事記の概念を與へると共に、假名や漢子に就いて現代と聯關させ昔時の文化に想到させる事を念とせねばならぬ。

4　本課は大體四時間見當で、如上の指導を完了する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽板書して讀ませ疑問符の儘で直ぐ讀みに入るが良い。

2　一二回自由に通讀させる。

▽讀んで得た印象や感想は記帳させて置く。

▽何んな話か、何が何うしたか、何が中心か等。

3　話の筋を摑ませる。

4　話合。

▽讀後の印象や感想等を話合はせる。

5　更に讀ませて不明の箇所や疑はしい箇所を質問させる。

▽新出文字は字書の引方を輔導して其の都度索引させる。

凡　殆　魂　便　例　簡　單

▽難語句は質問を俟ち隨所に指導する。

勅命　古傳　記憶力　非凡　仰せのまゝ

古記錄　そらんじ　若盛　神代以來　歷史　文學　物語　天にも上る心地　心魂

片假名　平假名　漢文　普通　古語　漢字　差當り　漢文流　不便　簡單　神代

御事蹟　要するに　國初以來　感情　古代　あり〳〵

6 個有名詞は多少の補說を加へ入念に指導する。
▽既習のものは其の箇所を想起させて之と連繫を保たせる。
元明天皇　大安萬侶　稗田阿禮　天武天皇　古事記　和銅　速須佐之男命　天の岩屋　八岐のをろち　大國主命　天孫降臨　二つの玉　神武天皇　日本武尊

7 指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。

8 文意を豫想させる。
▽把捉した文意は記帳させて置く。

9 低音讀。
▽聲を出して反覆讀誦させる。

天武天皇 → 勅命 → 稗田阿禮（古記錄）（言傳へ）そらんじ（二十八歲の若盛）

古傳を文字に ← 心魂を捧げ（六十近い老人）

大安萬侶（苦心）

10 ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1 自由に通讀させる。
▽尙質問ある者には聞いてやる。

2 指名讀。
▽一場面づゝ輪讀式に反覆通讀させる。

3 誤讀の箇所を指摘して再度新出文字や難語句を確める。

4 文意の自己檢討。
▽默讀させて各自の文意を反省させる。

5 話合。
▽文意や感懷を自由に話合はせる。

6 逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

元正天皇 → 勅命

- 例一　古語を漢字ばかりで　其のまゝに　草木青（サウモクアフシ）
  - クサキハアヲイ
  - 久佐幾波阿遠以（長過ぎて不便）
- 例二　アメツチ　天地
- 例三　クラゲ　久羅下
- 例四　ハヤスサノヲノミコト　速須佐之男命

言葉を文字に

三卷の書物　古事記（和銅五年正月二十八日）（一千二百餘年の昔）

古事記
- 神代の尊い物語（天の岩屋・八岐のをろち・大國主命・天孫降臨・二つの玉）等
- 古代のすべての事（神武天皇や日本武尊の御事蹟、其の他）
- 要するに我が國初以來の尊い歷史であり文學である
- 殊に大切なことは古傳が　古語　のまゝに殘つたこと

其の言葉を通じて（あり〳〵と）

古代國民の精神がとけ込んでゐる

7　グループ研究。
▽グループに分れ配付した文圖を中心に問題を作製させて研究させる。
8　默讀。
▽文の眼目や觀點に注意させて。
9　話合。
▽感想や所見を自由に。
10　低音讀。
▽聲を出して反覆通讀させる。
11　ノートを纒めて提出させる。

第三次指導

1　指名讀。
▽中・劣生を主として。
2　範讀。
▽文の要所に力を込めて。
3　話合。
▽古事記の成立や安萬侶の苦心等。
4　文意の檢證。
▽把捉した文意を表現面に即して例證させる。
5　默讀。
▽前項の文意を確める文意で。
6　話方練習。
▽阿禮が古傳を讀上げる場面から、安萬侶がそれを漢字で書き表す苦心の場面迄を各自に劇化させ、模寫的に話させて見る。
7　學習事項の整理。
▽特に内容方面に重きを置き、前課とも連絡させ文圖を作製して古事記の概念を與へる事に力を用ひる。
8　演習。
イ萬葉假名を示し簡單な語句を復文させて見る。

例　サクラ（佐久良）アサガホ（安佐我保）トリ（登利）アメフリ（安米布里）コトバ（許登波）等。
9　補充說話。
▽古事記や日本書紀に關する興味ある話や片假名・平假名の發明されるに至つた經路等
10　新出文字の書取。
11　語句の應用練習。
12　テスト。

テスト問題

一、次の言葉の中意味の通らぬ方を消しなさい。

1　稗田阿禮がなくなつたら我が國の古傳も文字も〔彼の死と／彼の記憶力と〕共にほろびてしまふかも知ない。
2　我が國の古語を〔漢字／平假名〕ばかりで其のまゝに書きあらはすことが、〔阿禮／安萬侶〕に取つての大きな苦心であつた。
3　古事記が殊に大切なことは、我が國の古傳が、古語のまゝに〔殘つた／讀む〕ことである。

二、次の□の中に程よい漢字を入れて熟語を作りなさい。

1　當□　2　古□　3　□體
4　□命　5　漢□　6　□神

7　□語　8　□蹟　9　事□
10　言□

三、次の文にあやまりあつたら正しなさい。

1　勅命の下つたことを承つた阿體わ、今や天にも上る心池であつたろう。そうして、長い〳〵物語を讀上げるのに、始ど心塊を棒げつくしたことであろふ。

2　それと要するに我が國初以來の尊い歴史があり、文學がある。殊に大切なことが、かうして我が國の古傳に、古語のまゝに殘つたことがある。

第十三　松阪の一夜

三部曲の後奏曲、古事記精神の究明である。德川時代に一代を風靡した國學の大家本居宣長の遺業中、第一に數へられる大事業こそ〝古事記傳〟の編纂で有つた。其の稿を起す前の寶暦十三年五月の末、豫て私淑して居た先覺加茂眞淵と松阪（今の松阪市）の一旅宿に歴史的會見が行はれた事は、宣長の自著〝玉勝間〟に詳しく記されてある。

其の頃伊勢參宮の客の多くは、松阪を通つて土産物を求めるのを慣例とした。眞淵も其の一人で有つて偶然にも玆に兩雄會見、眞淵は江戸に歸ると直ぐに千蔭・春海等の門人を一室に集め、頗る上々の機嫌で〝われこの度の旅行中新たに門人宣長を得たり、この人年こそ若けれ、志厚く學深く、皇國の大道を釋明して、これを天下に布かんもの、我その人を得たり〟と大いに喜び語つたと言ふ。宣長固より感奮措く能はずと言ふから、松阪の一夜が如何に此の兩大家に取つて記念すべき會見であつたかゞ窺ひ知られよう。然も宣長の古事記傳起稿の決心も此の會見で定められ、翌寶暦十四年には愈〻筆が起されて居る。

當時眞淵は田安中納言の講師で六十七歳、天下に名聲嘖々たる老大家であつた。之に對して宣長は數年前松阪に醫を開業して春庵と號し三十四歳の少壯、言はゞ地方の渺たる一藪醫者に過ぎ無かつた。流石に眞淵程の烱眼、初對面にも拘らず忽ち其の爲人を見貫いて、互に膝を交へ夜の更けるのを忘れ、親しく激勵の言葉を與へたと言ふ、感激に充ちた劇的場面が此の一篇で、情景さながら躍如たるものがある。

挿畫の印象と其の説明

七十二頁の挿畫は伊勢松坂の旅館新上屋の一室に於ける加茂眞淵と本居宣長との歴史的會見の場面である。床の間を背にし上座に構へたのが眞淵、之と向合つて行儀よく座つて居るのが宣長である。天下に聞えた老大家と名も無い市井の一學徒とが斯くも親しく膝を交へる事は、其の時代として全く異數の事で宣長の感激の程が察せられる。眞淵は當時六十七歳の老境、宣長は三十四歳の男盛、時は寶暦十三年五月廿五日、庭の青葉に山時鳥の訪れる頃。本文の〝眞淵はもう七十歳に近く、いろ〳〵りつぱな著書もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘り、温和な人となりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる少壯の學者云々〟を畫にしたもの。粗末な角行燈の臺に載つて居るのは油壺で、上部に行燈を持運ぶ把手が附いて居る。宣長の髪は所謂儒者髷で儒者や醫者等に有觸れた風俗、眞淵は老人向の茶筅に結んで居る。

文字語句

新出文字

訪（トフ）　坐（ザ）　識（シキ）　係（ケイ）　述（ジュツ）

讀替文字

著（チョ）（新出は本卷、イチジルシ）　尙着（チャク）は著の俗字。　尋（ジン）（新出は卷四、タツネ）

弟（テイ）（新出は卷四、オトウト）

語句と其の説明

松阪（マツザカ）　三重縣に在り、もと紀州家領として家老支配六萬石。伊勢平野の南部、津市と宇治山田市との中間、伊勢街道との會合點に位する。伊勢海の西岸に在る大口港の東北四粁に控へる。南部伊勢の中心地で、紡織業甚だ盛。最繁華地は兩街道の交叉點を中心とする田町・中町で、銀行・會社・問屋が櫛比して居る。松阪木綿・茶・生絲・綿絲・椿油等の特産があり、殊に松阪木綿は市の内外に產し、年額百萬圓を超え、耐久と染色の堅實を以て鳴り、本市は其の集散市場。城址は市街の東部に在る。今松阪公園と爲り、眺望良く、園内に南龍神社や本居宣長の鈴廼舍が原形の儘保存され、又記念圖書館がある。本居神社は本居宣長を祀る。津へ一九・一粁、宇治山田へ二二・九粁、人口三五、六六一。

本居宣長（モトヲリノリナガ）　國學者の大宗。伊勢松阪の人、幼名小津宮之助、通稱初め彌四郎、後健藏と改む。鈴廼屋は號。享保十五年五月七日木綿問屋の子として生る。父の時家運傾き、母の手で教養、寶暦二年、二十三歳の時上京、堀景山に儒學を、武川幸順に醫を學ぶ。美貌と才氣とは屢々生活を誘惑したが、賢母の教訓と景山の學風とは何時しか契沖の著書を機緣に志を古學に導き、同十三年、三十四歳、松阪で加茂眞淵の門人と成り、爾來古典研究の開拓と上代思想に對する批判とは前人未發の境地に到達、著書と門人は年と共に增加し、皇國學（ミクニ

宣長の畫像

ヤナビ）の學風天下を風靡するに至り、寛政六年（六十五歳）紀州侯に聘せられた。長男春庭・養子大平（オホヒラ）・其の養子内遠が相繼いで家學を擴め、多數の門人中、植松有信・青柳種信・和泉眞國・城戸千楯・黒澤翁滿・齋藤彦麿・竹村茂雄・林罔雄・鈴木眼（アキラ）・田中大秀・細井貞雄・藤井高尚・伴信友・平田篤胤等の英才輩出、我が國固有文化の尊重に基く學風が空前の發展を遂げた。享保元年九月二十九日歿。年七十二。明治年間縣社山室神社に祭られ、同三十八年特旨を以て從三位を贈られた。

加茂眞淵　江戸時代著名の國學者、遠江國敷智（フチ）郡岡部村の人、通稱參四（サウシ）又衞士。縣居（アガタキ）と號す。資性淵達、學を好み、幼時漢學を渡邊蒙庵（古文辭學者、太宰春臺門人）に學んだが、妻に勵まされて享保十八年（三十七歳）京都に出で、荷田東滿（カダノアヅママロ）の許に國學を研究、後元文三年江戸に出で田安宗武に仕へた。專ら萬葉集・祝詞式等の古典を研究、正しく直く健く雄々しい上代の國民性を追慕し、男性的な歌風と尙古的な學風を以て一世を風靡した。其の新しい研究的態度は國學の文學的方面と古典の批判的方面に固い基礎を與へ多くの學徒を其の門下に集めたが、本居宣長を得るに及んで玆に國學の貴い傳統が成立した。江戸を中心として傑出した門人が各地に輩出したが、村田春海・橘千蔭・荒木田久老（ヒサオユ）・楫取魚彦（カトリナヒコ）・栗田土麿（ヒヂマロ）・山岡俊明（アツアキ）・建部綾足（アヤタリ）・僧海量等は殊に著聞する。女性の門人も多く、油谷倭文子（アブラヤシヅコ）・鵜殿餘野子（ウドノヨノコ）・進藤筑波子は縣門の三才女と稱せられた。著書も多いが、特に國意考の一書は我が上代思想の特色を論じて痛烈に儒佛の思想を排擊したので、漢學者側からは多大の反響があつた。明和六年十月歿。年七十三。

墓は品川東海寺に在る。明治三十八年贈從三位。

新上屋　松阪中町に在つた宿屋。此の時眞淵は田安家の内命で、村田春郷・春海の二人を供に連れて大和巡遊に出掛けた。當時の事情は宣長の自著玉勝間に、かの冠辭考を得て、かへすがへすもよみあぢはふほどに、いよいよ心ざしふかくなりつゝ此の大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年此のうし、田安の殿の仰せ事をうけ給ひて、此のいせの國より大和山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事の有りしをり、此の松阪の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝていみしくくちをしかりしを、かへるさまにも、又一夜やどり給へるを、うかがひまちて、いといとうれしく、いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき、さてつひに名簿を奉りて、教へをうけ給はることにはなりたりきかし、とある。

ほの暗い行燈　"ほの暗い"と結尾の"不滅の光"とが照應して居る點に注目すべきである。行燈は燈火をともす具。四方に框を作り紙を貼り、燈蓋皿を中に置いて油火をともすもの。あんどう。實物か繪畫を利用して具體的に指導する要があらう。

老大家　年を取つた大家。大家は道にすぐれた人。巨匠。名手。其の際眞淵は六十七歳、時は寶暦十三年五月廿五日の事であつた。

温和　おだやか。柔和。温順。

三十歳餘り　宣長は三十四歳、長男春庭が生れた翌年であつた。

人となり　其の人の性質。うまれつき。

才氣　はたらきのある氣性。きばたらき。

少壯　年わか。壯年。

學識　學問と見識。學問上の見識。學問上から得たる識見。

萬葉集　雄略天皇の御宇から淳仁天皇迄三百年間の和歌四千四百九十六首を集めたものである。然し雄略天皇から舒明天皇に至る迄は雄略天皇の御歌一首あるのみであるから、舒明天皇から淳仁天皇迄百三十年間の歌集と言

つて良い。作者は天皇・皇族から一般庶民に及び、然も其の歌は未だ嚴密なる格律上の規則のやかましくない時代であるから、其の風姿自然であつて剛健の氣魄がある。長歌・短歌・旋頭歌の三種あるが、殊に長歌に絶妙なのが多い。因はれざる自然兒としての古代人の精神生活を理會するには絶好の典籍である。題の意は萬（ヨロズ）の言の葉といふ意で、選者は橘諸兄とも大伴家持とも言ふが集中でも家持は中々に活躍して居る。萬葉に關する眞淵の著書は〝萬葉考〟六卷である。註釋は毎句の下に挿入し、舊訓の誤謬を發見し、古意古言を尋ねて註せる等大に見るべきものがある。　**大成**（タイセイ）　完全に成し遂げること。成就。完成。　**感動**（カンドウ）　激しく感じて心を動かすこと。深く感じて意氣の引立つこと。感激。　**希望**（キボウ）　ねがひのぞむこと。のぞみ。ねがひ。願望。志望。　**文通**（ブンツウ）　手紙の音信。書信。　**面會**（メンクワイ）　まのあたり會ふこと。顏を合はせること。相見ること。面謁。面接。對面。　**機會**（キクワイ）　をり。はづみ。まあひ。際會。際次。時機。　**努力**（ドリヨク）　力をそゝぐこと。力を入れること。　**古事記傳**（コジキデン）　四十八卷。古事記の註釋書。天和元年起稿、寛政十年六月宣長六十九歳の時に脱稿、前後三十五年を要した力作。寛政二年より刊行、文政五年完了。古代言語の解釋は精緻に、史實の研究は該博を極めたもので、又時代思潮に留意して古傳を解釋することに努めた古事記最高の註釋書。國學の根據を成し、後世古代史並に古代言語研究の典據となる。　**國文學**（コクブンガク）　國語で綴つた文章の解釋・組織・使用又は其の沿革等を研究する學問。其の國民に特有なる文學。國民文學。　**不滅の光**（フメツノヒカリ）　不滅は消滅しないこと。不磨。國文學の上に何時迄もキラ〳〵と輝いて居るの意。

資料

原據

玉勝間（本居宣長自著）

おのが物まなびの有しやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむよろづよりもおもしろく思ひてよみける。さるはは、か〳〵しく師につきて、わざと學問すとにもあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞからのやまとの、くさ〴〵のふみをあるにまかせうるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よまゝほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひてまなべるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出るばかりなりき。集どもゝ古きちかきこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。かくてはたちあまりなりしほど、學問しにとて、京になんのぼりける。さるは十一のとし父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに、うしなひたりしほどにて母なりし人のおもむけにて、くすのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせむとてなりけり。さて京に在しほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の說をしりそのよにすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、餘材抄勢語臆斷などをはじめ、其の外もつぎ〴〵に、もとめ出て見けるほどに、すべて歌まなびのよすぢの、よきあしきけぢめをも、やう〳〵にわきまへさとりつ、さるまゝに今の世の歌よみの思へるむねは、大かたに心にかなはず、其歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞよの人なみに、こゝかしこの會などにも出まじらひつゝ、よみありきけり、さて人のよむふりは、おのが心には、かなはざりけれども、おのがたて、よむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞ有ける、そはさるべ

きことわりあり、別にいひてん、さて後、國にかへりたりしころ、江戸よりのぼれりし人の、近きころ出たりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居大人の御名をも、始めてしりける、かくて其ふみ、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりことゝほく、あやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、尙あるやうあるべしと思ひて、立かへり今一たび見れば、まれまれには、げにもやとほぼゆるふしゞ〳〵もいできければ、又立かへり見るに、いよ〳〵げにとおぼゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出來つつ、つひにいにしへぶりのこころことばの、まことに然る事をさとり畏、かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の說は、なほいまだしきことのみぞ多かりける、おのが歌まなびの有しやう、大かたかくのごとくなりき。さて又道の學びは、まづはじめより、神書といふすぢの物、ふるき近き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、つきて心ざし有しかど、とくたてゝわざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばむと、こころざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの說になすらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものゝ說おもむきは、みないたくたがへりと、はやくさとりぬれば、師に賴むべき人もなかりしほどに、われいかで古へのまことのむねをかむかへ出む、と思ふこころざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへすよみあぢはふほどに、いよ〳〵心ざしふかくなりつゝ、此大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年此うし田安の殿の仰せ事をうけ給はり給ひて、此いせの國より大和山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事の有しをり、此松坂の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝていみしくくちをしかりしを、かへるさまにも、又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いといとうれしく、いそぎやどりにまうでゝはじめて、見え奉りたりき、さてつひに名簿を奉りて、敎へをうけ給はることにはなりたりきかし、

あかたゐのうしの御さとし

宣長三十あまりなりしほど、縣居大人のをしへをうけ給はりそめしころより、古事記の註釋を物せむのこ

ころざし有て、そのことうしにもきこへけるに、さとし給へりしやうは、われももとより、神の御典をとかむと思ふ心さしあるを、そはまづからごゝろを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずはあるべからず、然るにそのいにしへのこころをえむことは、古言を得たるうへならではあたはず、古言をえむことは、萬葉をよく明らむるこそあれ、さる故に、吾はまづもはら萬葉をあきらめんとする程に、すでに、年老て、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふくみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりて、行さき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ學ばなば、其心ざしとぐること有べし、たゞ世中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきき所を經ずて、またきに高きところにのぼらんとする程に、ひきゝところをだにうることあたはず、まして高き所は、うべきやうなければみなひがごとのみすめり、此むねをわすれず、心にしめて、まづひきゝところより、よくかためおきてこそ、たかきところにはのぼるべきわざなれ、わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはら此ゆゑぞ、ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそと、いとねもころになん、いましめさとし給ひたりし、此御さとし言の、いとたふとくおぼえけるまま に、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのこころ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふものゝ、神の御ふみ解ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえぬものになむ有ける。

おのれがあがたゐの大人の敎をうけしやう

宣長、縣居大人にあひ奉りしは、此里に一夜やどり給へりしをり一度のみなりき、その後はたゞしばしば書かよはしきこえてぞ、物はとひあきらめたりける、そのたび〳〵給へりし御こたへのふみども、いとおほくつもりにたりしを、ひとつもちらさで、いつきもたりけるを、せちに人のこひもとむるまゝに、ひとつふたつととらせけるほどに、今はのこりすくなくなんなりぬる。さて古事記の註釋を物せしの心さし深き事を申せしによりて、その上つ卷をば、考へ給へる古言をもて、假字がきにし給へるをもかし給ひ、又中ノ卷下ッ

卷はかたはらの詞を改め、所所書入などをも、てづからし給へる本をも、かし給へりき、古事記傳に、師の說とて引たるは、多く其本にある事どもなり、そも〳〵此大人、古學の道をひらき給へる御いさをは申すもさらなるを、かのさとし言にのたまへるごとく、よのかぎりもはら萬葉にちからをつくされしほどに、古事記にいたりては、そのかむかへ、いまだあまねく深くはゆきわたらず、くわしからぬ事どももおほし、されば道を說給へることも、こまかなることしなければ、大むねもいまださだかにあらはれず、たゞ事のついでなどに、はし〴〵いさゝかづゝのたまへるのみなり、又からごゝろを去れることも、なほ清くはさりあへ給はで、おのづから猶その意におつることもまれ〳〵にはのこるなり。

賀茂眞淵と本居宣長

（佐々木信綱著）

時は夏の半、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひつれゆくお伊勢參りの群も、春さきほどに騷がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本を商ふ老舗柏屋兵助の店さきに「御免」といふて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居舜庵であつた。醫業を業とはして居るものゝ、名を宣長といふて皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて、「ああ殘念なことをしなされた、あなたがよく名前を言つてお出になつた、江戸の岡部先生が、今の先き若いお弟子と供をつれてお立よりになつたに」と言ふ。舜庵は「先生がどうしてここへ」といつものゆつくりした調子とはちがつて、あわただしく問ふ。主人は、何でも田安樣の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸りに參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもうおよろしいとの事で御出立の途中を何か古い本はないかと暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。舜庵「それは殘念なことである、どうかしてお目にかゝりたいが。」「跡を追うてお出でなさいませ、追付けませう」と主人が言ふので、舜庵は一行の樣子を大急ぎで聞きとつて跡を追つた。港町・平生町・愛宕町を通り過ぎ、松坂の町を離れて次の宿なる垣鼻村のさきまで行つたが、どうもそれらしい人に追

ひつき得なかつたので、すごすごと我が家に戻つて來た。

數日の後岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで再び夕暮に松坂の本陣新上屋に宿つた。萬一歸りにまた泊られることがあつたらば、どうか知らせて貰ひたいと賴んでおいた舜庵は夜に入つて新上屋から使を得た。樹敬寺の塔中なる嶺松院の歌會に赴いて、今しも歸つて來た彼は、取あへず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は廿五、その弟の春海は十八の若盛で、早くも別室につくろいでをつた、衞士はほの暗い行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵通稱岡部衞士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武の國學の師として、その名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど頰豐かなるこの老學者に相對して居る本居舜庵は、眉宇の間にほとばしつて居る才氣を溫和な性格が包んで居る三十四歳の壯年。しかも彼は廿三歳にして京都に遊學し、醫術を學び、廿八歳にして松坂に歸り醫を業として居たが、京都で學んだのは唯に醫術のみでなくして、契沖の著書を讀破し國學の蘊蓄も深かつたのである。舜庵は長い間欽慕して居た身の、ゆくりなき對面を喜んで、かねて志して居る古事記の註釋に就いてその計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聞いて、懇ろにその意見を語つた。「我ももとより神典を解き明らめんの志があつたが、それにはまづ漢意を淸くはなれて古へのまことの意を尋ね得ねばならぬ。古への意を得むには、古への言を得た上でなければならぬ。古への言を得むには萬葉をよく明らめねばならぬ。故に我は專ら萬葉を明めて居た間に、既にかく年老いて、殘りの齡いくばくも無く、神典を說くまでにいたることを得ない。御身は年盛りにゆくさき長ければ、怠らず勤めなば必ず成し遂げ得らるゝであらう。しかし世の學に志す者、皆低いところを經ないですぐに高い處へ登らうとする弊がある故に低いところをさへ得る事が出來ぬのである。此むねを忘れず心にしめて、まづ低いところをよく固めおいて、さて高いところに登るがよい」と諭した。

夏の夜はまだきに更けやすく、家々の門みな閉ざし果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてつた若人は、さらでも今朝から盛り日の、闇夜の道のいろくを踏むともおぼえず、中町の通りを西に折れ、魚町の東側なる我が家のくぐり戸を入つた。隣家なる桶利の主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜もとん〳〵と桶箍をいれて居る。時にはかしましいと思ふ折もあるが、今夜の彼の耳には何の音も響かなかつた。

舜庵は、後に江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中に入つて名簿をさゝげ、うけひごとをして、縣居の門人錄に名を列ぬる一人となつた。爾來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ此は答へた。門人とはいへ、その相會うたことは纔かに一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を去る百五十餘年前寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈は、その光の下に語つた老學者と若人とを照らした。しかも其のほかの暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。

附言　余幼くて松坂に在りし頃、柏屋の老主人より聞ける談話に、本居翁の日記、玉かつまの數節等をあざなひて、この小篇をものしつ。縣居翁より鈴屋翁に贈られし書狀によれば、當夜宣長と同行せし者（尾張屋太右衛門）ありしものゝ如くなれどここには省きつ。

指導精神

前課を受けて之で愈々古事記精神（古代精神）は徹底する。本課は國學の大家賀淵と宣長の對面の場面、勿論古事記を中心とし操縦としての事である。所は伊勢松阪の新上屋の一室、賀淵は七十歳に近い老人（當時六十七歳）宣長は三十歳餘りの壯年（當時三十四歳）二人は仄暗い行燈の下で對座したのである。宛然一

場の劇でも見るやうだ。然も其の間に醸し出された雰圍氣——師弟の純情、宣長の發奮、古事記傳の大成、學問には順序が有ること、不斷の努力が大切であること——斯うした貴い教訓を言はず語らずの間に讀者に感得せしめようと言ふのが本課の狙ひ所で、師弟を一貫する繼續意志と言はうか、大我と言はうか、さうした貴い教訓が此の教材の生命である。宣長は師匠の意志を承け繼いで一生を之が爲に抛ち渾身の努力を傾倒し、三十五年の苦鬪を重ねて遂に古事記傳の大著を完成したのである。結局師弟を一貫する繼續意志である。此の繼續意志が遂に厖大な古事記傳と成つて現れ、我が國文學上に不滅の光を放つに至つたのである。

宣長は享保十五年五月七日伊勢國松坂本町に生る。幼名富之助、後（十二歳）榮貞（ヨシサダ）と改め健良とも稱した。更に（寶曆五年）宣長と改む。通稱彌四郎、後健藏と稱し、芝蘭・舜庵・春庵と號した。父は小野三四右衛門定利、母は勝子、宣長の外に弟一人妹二人が生れた、勝子は定利の後妻で、先妻榮珠の腹には男子が無かつたので道喜定治を嗣子として居たが、後に勝子の腹に宣長が生れた。定利歿するに及び、江戸に出て商業に從事して居た定治は其の家を嗣いだ。宣長は一度出でゝ他家（山田の紙商今井田氏）の養子と成つたが、後　寛延三年）離縁して家に歸つた。此頃から山田で法幢を師として學に志し、度々旅行にも出た。寶曆元年（二十二歳）義兄定治が病死したので江戸に出て其の家を整理し、歸宅してから家督を相續した。然し資産も傾き宣長も商人には不向で有つた爲、母勝子は宣長を醫者に爲すべく京都に遊學させた。寶曆七年（二十八歳）十月六日迄六年の間京都で醫學を修業したが、其の間に堀景山に就いて漢學を學び、又景山が國學に深かつた爲國學にも志した。殊に契沖の百人一首改觀抄を見てから契沖に私淑すること深く、京都の生活が自然王朝文學の研究に進ませ、源氏物語には相當の造詣を示すに至つた。遊學時代にも日記を記し „排蘆

小船」の著も有つた。松坂に歸省した後は醫者を開業して生計を立てると共に國學の研究に入り、門人に講義をし、又歌合等をも催した。彼の講義は源氏物語・萬葉集を始め、古今集・新古今集・祝詞・日本書紀其の他各種に亘つたが、最も多く行つたのは源氏・萬葉で、源氏は二・六・十の夜と定めて講讀し、其の他の古典はそれ以外の日に行つた。源氏は全部三回の講義を終つて第四回に入り、萬葉は全部二回を終つて第三回に入つた。斯かる講義を爲す一方に著述に從つたのである。此の間に寶曆十二年民子（後、勝子と改む）を娶り、翌年には長子春庭が生れると共に、紫文要領・石上私淑言が成つた。彼の王朝文學研究は、之に依つて完成したと言つても良い。さうして翌寶曆十三年五月二十五日には眞淵と會し（即ち本課）古事記研究の志を語り、古道研究に入つた。其の後天明六年五十七歳に至り、古事記神代卷の傳を終つた。又寛政四年（六十三歳）十二月二十日中卷が成り、寛政十年（六十九歳）六月十三日に下卷の傳が成つた。其の間に語學其の他各種の研究が成つた。然も後年になる程門人も增し（天明八年には百四十七人安永二年には四百九十三人）又京都其の他に旅行する事も多く成つた。其頃（寛政四年）加賀侯前田治修が宣長を國學の學頭に招いたが、他國移住を好まず、松坂住か京住ならば仕官すると言ふことで中止と成つた。更に續いて紀州家から招かれたが、之は松坂居住を許されたのでお受けした。寛政十二年（七十一歳）七月には遺言狀を書き鈴號をも秋津彦美津櫻根大人と定め、山室山の頂に墓地をも定めた。其の年の暮から翌年の春に掛けて和歌山に滯在し、又三月二十八日には最後の京都旅行を爲し、滯京七十日の間、古學普及の爲に盡力した。其の間中山愛親に招かれ延喜式祝詞を講じた。斯くて此の年の九月に歿した。子春庭は盲目でも有つたから養嗣子本居大平が後を嗣いで紀州侯に仕へた。宣長は圓滿・調和的な性格で、處世の才も有り常識にも富んで居

た善良な市民であり家長であつた事は、醫を學んで經濟上安固なるを得て靜に古典研究に從つた點からも窺はれる。然し彼の人物が常識的に成らなかつたのは、單に理性の人で無く內に熱情が有つたからである。其處から强い意志も生れる。宣長が眞淵に會つて古事記研究の志を語つてから數十年間、其の研究に專念したのも其の意志の力の現れである。此の意志の力は軈て學問に對する愛と成る。前田家の招きをも其の儘應ぜずして松坂から離れず、古事記傳を完成したのも學問に對する熱情が有つたからである。國學に入つてから其の學問的な信念に基いて儒佛を排し、種々の論難を行つたのも學問に對する信念からである。眞淵を師として尊敬し乍ら尙學說に於て其の儘盲信しなかつたのは、學問に對する愛と信念が有つて初めて成される事である。要するに春の如き圓滿調和的な人格の中に、學問に對する愛と信念とを藏して居たと言つて良い。

本課は主として宣長自身の隨筆『玉勝間』に據り、尙佐々木信綱博士の『眞淵と宣長』を參案してある。（資料參案）起筆先づ宣長の人柄をザッと紹介して直に古本屋との問答に移つて居る。此處で宣長の經歷や眞淵翁の履歷の概要を一通り補說する要がある。宣長が眞淵翁に私淑して居たこと等がハッキリせねば此の邊の趣は味へない。殊に前課と關係づけ古事記の尊い事や古代精神の如何なるものかを忖度させる事も大切である。此の教材は古事記や萬葉集や古事記傳等が話材と成つて居るから取扱が可なり面倒である。問題の古事記傳は四十八卷の厖大な大著述で、前人未踏の大業である。宣長は學問を分類して神學・有職學・一般學・歌學の四つとし、此のうち主として據るべきは神學であると爲して神代記を旨とすべきであると言ひ、就中古事記を最も重んじた。宣長の古事記研究は如上の信念から出發して居る。卽ち神道家の說に慊らず、自ら古事記の註釋を作らうと志し、二十八歳の時、眞淵の冠辭考を得て愈々其の志を深くし、遂に寶曆十三

年（三十四歳）眞淵の門に入つた。斯くて彼は師眞淵の古典研究上の教訓と激勵（本課）と援助とを得て古事記傳の大著に取掛つたのが明和元年（三十五歳）で有つた。斯くて此の業を終へたのは三十五年後の寛政十年六月十三日（六十九歳）で有つた。淨書は全部宣長自ら筆を執り、生涯の願望成就の喜びに堪へず、久老等の知友に報じ、千蔭等も其の成功を祝福感謝した。又同年九月十三夜には鈴屋に記傳修業慶賀會を催し披書視古と言ふ題で師弟共に歌を詠じ、又記中所見の神人を題にして諸國の知友門弟に頒ち歌を募つた。古事記傳は古事記の註釋書として全く空前絶後の著で有つて、加藤千蔭が寛政十年十二月十六日に宣長に贈つた書翰中に『此書皇國之至寶に候を、千歳手を付候もの無之處、誠に御大業此上も無之御儀、難有御事拳存候。』とあり。又漢學者市川多門も『和學の事は此傳にてつきぬべし。』と讃美して居る。本書出版後今日に至る迄、古事記の註釋書の殆ど總てが同書の餘光を仰いで居る事を見ても、本書が如何に絶大なる價値を有して居るかゞ窺はれる。

古事記傳は古事記の文獻學的研究書であつて、眞理を愛求する眞面目な研究的精神に依つて貫かれて居る。從つて研究態度は科學的であり、在來の註釋家の偏見・曲解を排して古典の眞意を究めようとする自由討究主義、空理空論を斥けて古典の事實を基礎として古代を明らめようとする實證主義、即ち獨斷妄推を避けて客觀的歸納的に古事記を取扱つて居り、其處に本書の價値がある。然して其の特筆すべきは精密周到に古言・古意・古事を明らめた事であるが、細かに見れば、

1　古言・古意・古事を保存した第一の經典としての古事記の價値を認めたこと。

2　在來の諸本に比して本文の校訂を嚴密にしたこと。

3　從來の訓點を改めたこと。

4　語釋の精密なこと。

5　他の古書の傳承と比較研究を試み正鵠を得べく努めたこと。

等である。之に依つて古事記の研究は、本文に於ても訓法に於ても全く前人未踏の境地を開拓し、古事記研究史上に於ける永久不變の功績を殘したのである。

宣長は三十有餘年、其の後半生を此の著述の爲に費して居る。彼は人も知る如く多くの著述を遺して居るが、其の著述は總て此の古事記研究の副產物とも見做すべきもので、古事記傳を完成させる間に產れ出た副次的產物に外ならない。從つて彼は全く其の生涯を古事記研究に獻げたと言つて然るべきで、本課の觀點も亦其處に在る。即ち彼は半生三十餘年の長き年月を費し、全力を傾倒して此の大事業の完成に沒頭した。之が唯僅に新上屋の二階で暗い燈火の下で對座した數時間に於ける師匠の感化であつた事を思ふと、實に人間の力の偉大さ、人格の影響の甚大な事を痛感せずには居られない。一夜の會見が百年の知己にも勝る美しい師弟の關係を結ばせ、一言の指導が能く三十五年の一生を左右したと言ふ、何たる貴い教訓であらう。之を我々が三年五年と言ふ長い年月を齷齪して、尙十分の教化を與へ得ない實情に省みて、寔に恥しい次第では無いか。斯うした方面から眺めても、本課は實に活きた教育學であり活きた教師觀でもある。地名其の他當時の狀況は、別項の〝賀茂眞淵と本居宣長〟を參案すべきである。

指導形態

指導上の認識點

1　着眼は勿論古代精神の究明に在るが、文の核心は國學の大家としての宣長・眞淵の篤學と其の熱意に感ぜしめると同時に、師弟の情誼の厚いのに感激せしめ國學傳來の日本精神を窺はせる點に在る。

2　一夕の教訓は能く一生を左右し、三十五年の努力は遂に古事傳の大著と成つて國文學上に不滅の光を放つた師弟を一貫する繼續意志の尊い事や、研學に順序がある事を教へて學問の方法を知らせた點等、學ぶべき箇所が尠くは無い。

3　前課と連絡し我が古代精神を宿す古事記や萬葉集に就いて大體の概念を與へる事も一主眼であり、殊に眞淵が萬葉に依る古語の研究は前課の安萬侶が古語の表現に漢字を利用した苦心と一脈相通ずるものが有る點を見逃してはならぬ。

4　本課は大體四時間見當で指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽地圖に依つて松阪の位置を確め、伊勢との關係や國學の發祥地として相應しい點等を知らせて置く。

2　全課の通讀。
▽たつぷり時間を與へて自學させる。

3　話合。
▽第一印象を自由に話合はせる。

4　不明の箇所を質問させる。
▽前後の關係から類推して分る事は態と答へずに置く。

5　新出文字の指導。
▽上欄文字を拾はせ字書を索引させる。
訪　坐　著　識　尋　努　希　弟　係
述

6　難語句の指導。
▽質問を待つて隨所に指導する。
讀書　將來　買ひつけ　古本屋　愛想よく　訪ふ　行燈　對座　著書　老大家　溫和　人となり　才氣　少壯　學問の道　たどつて　學識　尋常　非常　頼ものしく　努力　大成　順序　土臺　とざされて　未來の希望　胸ををどらせ　文通　師弟の關係　日一日　親密　面會　大著　述　國文學　不滅の光

7　個有名詞は引離して入念に指導する。
本居宣長　伊勢の國　松阪　賀茂眞淵　山城　大和　新上屋　萬葉集　古事記傳

8　文の荒筋を摑ませる。
▽誰と誰とが？　何時？　何處で？　何を？　等。

9　文の觀點を考察させる。
▽反覆通讀させ、要點は記帳させて置く。

10　默讀
▽文意の存在を考察させて。

（1）本居宣長（松阪の人　讀書好き）

11　指名讀
▽適宜に句切つて、何人かに。

12　ノートを纏めて提出させる。

第二次指導

1　全課の通讀。
▽個讀に自由讀を交へて。

2　話合。
▽文の觀點や讀後の感想を中心に。

3　範讀。
▽文の要所に注意させて。

4　挿畫と文とを照合させる。
▽何處を畫にしたものか。文に何う出て居るか等。

5　逐次研究
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し各自のノートと對照させる。

（2）或夏の半ば　古本屋

賀茂眞淵先生

山城・大和方面の御旅行
『先生がどうしてこちらへ。』
『何か珍らしい本はないか』

參宮

（3）◇宣長

『どうかしてお目にかゝりたい。』
『後を追つてお出でになつたら……。』

大急きで後を
町はづれ……見えない
次の宿……追附けない

新上屋

萬一お歸りに　すぐ知らせて

（4）新上屋の一室

ほの暗い行燈のもと

七十歳に近く
りつぱな著書
天下に聞えた

老大家

眞淵

對座

いしも賴

同じ學問の道

我が國文學の上に不滅の光を放つ

（5）眞淵

三十歳餘り
溫和な人となり
才氣のひらめき

少壯の學者

宣長

宣長

よいところにお氣附きでした
私も古事記を……それには

萬葉集（調べて）

何時の間にか（年を取つて）

順序正しく
土臺を作つて
一歩々々高く

注意

かね〳〵古事記を研究したいと

何か御注意下さること

感動

（6）夜はふけ　家々の戸はもう　皆とざされて
宣長は希望に　胸ををどらせ

絶へず文通……眞淵の教を

（7）其の後

二人

師弟の關係……日一日と親密
面會の機會……以後とう〳〵
眞淵の志を受けつぎ
三十五年努力に努力
古事記の研究を大成

未來

古事記傳といふ大著述

6　グループ學習
▽グループに分れ配付した文圖を中心に問題を作製して研究させる。
7　徐に數回通讀させる。
▽場面の雰圍氣を想像に描かせて。
8　話合。
▽文意や感想を中心に。
9　文意の確認。
▽文に即して把捉した文意を檢證させる。
10　低音讀。
▽文意を頭に描かせて。
11　ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1　指名讀。
▽中・劣生を主として。
2　話合。
▽文の觀點を中心に。
3　範讀。
▽熱意を込め一回範讀してから追讀させる。
4　文意の例證
▽表現面を辿つて文意の所在を例證させる。
5　學習事項の整理
▽古事記・萬葉集・古事記傳、篤學者の熱意、師弟の情誼、學問の方法、國學傳來の日本精神等。
6　話方練習。
▽學習事項から適宜に話材を物色させて。
7　朗讀練習。
8　場面の劇化。
▽學級總掛りで。
9　劇化實演。
▽背景其の他を工夫させて。
10　視寫・聽寫練習。
11　新出文字の書取。
12　語句の應用練習。
13　テスト。

テスト問題

一、次の文を讀んで後の問に答へなさい。

二人はほの暗い行燈のもとで對座した。眞淵はもう七十歳に近く、いろ〳〵りつぱな著書もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘り、溫和な人となりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる少壯の學者。年とそ違へ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。

(1)　誰と誰とが對座したか。
(2)　眞淵を老大家といつたわけ。
(3)　宣長を少壯の學者といつたわけ。
(4)　同じ學問の道とはどんな學問か。
(5)　此の一節を讀んで思つたことや感じたことを書け。

二、次の□の中に適當した字を入れなさい。

1　宣長は大□ぎで眞淵の□□を聞取つて□を追つた。
2　順序正しく進むといふことは、□□の研究には特に□□ですから、先づ□□を作つて、それから一歩一歩高く□り、最後の□□を達するやうになさい。
3　宣長の□□□□といふ大著述は、我が□□□の上に不滅の光を□つてゐる。

三、次の漢字を使つて短文を作りなさい。

(1)　學識（　　）
(2)　萬一（　　）
(3)　親密（　　）

（4）感動（　　）
（5）大成（　　）

教材の劇化

第一場

時　寶暦十三年の五月なかば
所　伊勢國松阪の古本屋
人物　宣長
　　古本屋の主人

（幕があくと古本屋、主人が古本を揃へてゐる。そこへ宣長が入つて來る。）

宣長　今日は。
主人　はい、これは本居先生、ようこそ（とちよつと考へ）あゝさう〳〵どうも殘念なことでした。あなたがよく會ひたいとお話しになる江戸の賀茂眞淵先生が先程お見えになりました。
宣長　（驚いて）先生がどうしてこちらへ。
主人　何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。あの新上屋にお泊りになつて、さつきお出かけの途中、何か珍しい本はないかと、お立寄り下さいました。

宣長　それは惜しいことをした。どうかしてお目にかゝりたいものだが。
主人　後を追つてお出でになつたら、大てい追附けませう。
宣長　さうですか、ぢやすぐこれから、後を追つて見ませう。（急いで出かける）

―幕―

第二場

時　前場と同じ日
所　伊勢國松阪の旅宿新上屋
人物　宣長
　　新上屋の主人

（幕があくと、宣長とぼ〳〵と力なく新上屋へ入つて來る。とちやうどそこへ新上屋の主人が出て來る）

主人　あゝ、これは本居先生、どうなさいました。
宣長　とう〳〵眞淵先生にお目に掛ることが出來ませんでした。
主人　先生はお伊勢詣にお出になりました。
宣長　だからあとを追つて、とう〳〵松阪の町外れから次の宿まで行きましたが、殘念なことにけもうお姿は見えませんでした。

主人　さうですか、それはどうも、早くさうとわかりますれば、先生がお出でのうちお知らせ申すのでしたが。

宣長　今日ちよつとあそこの古本屋へ立寄ると、珍しい本はないかと眞淵先生がうちへいらしたといふ話を聞いてびつくりしてとんで行きましたが。

主人　いや、先生は又お伊勢樣からのおかへりにこちらへいらつしやるかも知れませんよ。

長宣　さうですか、ぢやこちらへお出でになつたら、すぐお知らせ下さい。

主人　えゝ〳〵、すぐにお知らせいたします。

宣長　では、どうぞよろしく。是非お目に掛りたいのですから、ぢやお願します。

主人　はい〳〵、かしこまりました。

宣長　おいでになるといゝが。（と言ひながらすご〳〵と歸る）

第三場

時　前場から四五日後（寶暦十三年五月廿五日）

所　伊勢松阪の新上屋

人物　宣長　三十四歳

眞淵　六十七歳

（幕があくと行燈を中にして宣長は眞淵と對座してゐる）

―幕―

宣長　かねゞ〳〵御名前や先生の御本はよく存じて居りました、先生とこゝでお會ひする事が出來まして、本當にうれしう存じます。

眞淵　いや〳〵、それは私の方から言ひたいこと。

宣長　どうぞこれからいろ〳〵お敎へ下さいますやうお願ひ申します。

眞淵　敎へるといふ事は出來ませんが、いつしよに研究して行きませう。

宣長　私は、かねゞ〳〵古事記を研究したいと思つてをります、それについて、何か御注意下さることはございますまいか。

眞淵　それはよいところにお氣附きでした。私も、實は早くから古事記を研究したい考はあつたのですが、それには萬葉集を調べておくことが大切だと思つて、其の方の研究に取りかゝつたのです。ところが何時の間にか年を取つてしまつて、古事記に手をのばすことが出來なくなりました。あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成する事が出來ませう。たゞ注意しなければならないのは、順序正しく進むといふことです。これは、學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一歩々々高く登り、最後の目的に達するやうになさい。

宣長　はい、これはどうもありがたう御座いました、きつと先生の御言葉のやうに注意しまして、出來るだけ研究したいと思ひますから、どうぞこの後ともお敎へ下さいますやう、くれ〴〵もお願いたします。

眞淵　承知いたしました。私でよければ何なりと。

宣長　有難う存じます。では夜も更けましたから、今夜はこれでおいとまいたします。

乱淵　さうですか、では御大事に。

宣長　先生も御道中どうぞ御大事に、さやうなら。

乱淵　さやうなら。（と立つて宣長を見送る）

（外では夜廻の拍子木の音）

―幕―

第十四　北海道

（一）札幌

全國遊覽の地理的教材も漸次發展して北海道が取扱はれ、先づ其の振出しが主都札幌である。文の極めて感覺的なのも他郷から初めて此の地を踏む叔父の印象と純情な甥の觀察眼が鋭いからで、暢達・明快・筆路頗る魅力に富んで居る。苺の味覺に筆を起し、開古鳥（郭公）の聲を拉し來る等、新興文學の薫りが高い。

近時北海道は産業開發の機運に乘つて、流石に主都札幌は昔時の面目から急足の進歩を遂げ、中央都市に劣らぬ各種の文化施設が窺はれる。然も廣漠たる原野を後背地とした札幌には、楡の林やポプラの並木、或は牧牛の群等に北海道らしいローカルカラー（郷土色）が織込まれ、又異色がある。

（二）阿寒

札幌の文化的匂ひから急に一轉、原始的な阿寒湖に讀者を誘つて與れる。此の湖は國立公園として名高い丈で無く、湖沼としては最大深度三十八米の深淵を誇り、嘗ての姫鱒の原産地であり、本邦唯一の毬藻の産地として科學者の間にも問題と成つた事がある。作者は此の雄大な神祕境を各種の角度から眺め、博物學的にも觀察眼を擴げて讀者を陶醉境に導かうと試みて居る。

（三）北千島の漁場

北千島は我が國防上にも産業上にも重大な使命を擔つて居る。長く横はつた邦土に取つて千島は其の觸角

の尖端を成し、北方に何か國際的異變でも有ると此の觸角がピリッと動いて、忽ち中樞部へ傳達されるのである。卽ち我が北方海の生命線たる事を忘れてはなるまい。然も其の近海は海產物の無盡藏の寶庫で、五月頃の解氷期と成ると海の猛者達は俄に殺氣立つて、一漁船毎に漁獲物を滿載し凱歌を擧げる樣は壯絕を極めると言ふ。本課でも其の壯快な一面を叙して海國男子の意氣將に昂然たるものがある。

千島は二百三十年前の西曆一七〇八年ロシヤ人に依つて發見され、爾來露人に依つて經營を進められ、當時鎖國主義で隱退的な江戸幕府が、此の方面へ進出を試み無かつたのは惜しむ可きで有つた。明治初年南樺太との交換條約が成立、邦領と成つてから產業上に各文化施設に、又國防上の裝備に急足の進步を遂げるに至つた。本篇は紀行文中の一話柄の形で、全體的には一種の紀行であるが、寧ろ實業的教材と見做して取扱ふのが妥當であらう。

挿畫の印象と其の說明

七十六頁の寫眞は札幌の大通公園卽ち道遙地の景觀で、市の中央を略〻東西に貫通し、道幅一〇九米・小公園式に花壇や芝生を作り、又運動場や木蔭が作られて居る。冬期は山成す雪の捨場と成るが、晩春から初秋に掛けて綠のローンに千紫萬紅の草花が咲き亂れる。芝生に圍まれた花壇の中心に陸軍中將永山武四郎の銅像が建つて居る。永山中將は北海道開拓の恩人で、第七師團長として功があり男爵を授けられ貴族院議員に勅選された事もあり、明治三十七年五月享年六十歲で歿した人である。同じ公園內に黑田開拓使長官の銅像も建てられて居る。左に圓山・右に三角山、遠くに手稻の山々を望み、近景の廣々した芝生には日傘を差

した母子の和かな姿が見える。當初防火計畫を兼ねて建設されたもので、北海道らしいのんびりした氣分を漂はして居る。

七十七頁は北海道帝國大學の玄關前、一面の芝生を眺め正門を眞直に這入ると此の景觀に接する。構內には農學部は勿論醫學部・工學部・理學部等があり、之に名代の附屬農場や獸科等も設置され、其の領域は極めて廣く、寫眞は其の片影を偲ばせて居る。畫面一杯に見える鬱々たる大樹は楡、建設の恩人クラーク博士の銅像は玄關前の老樹の葉越に隱見して居る。

八十頁右上の寫眞は雄阿寒岳と其の西麓に横たはる阿寒湖の景觀で、水晶を溶した樣な透明な水面に弧舟が悠然と浮んで、天下の絕景を獨占したかの觀がある。舟は獨木舟（ウツロブネ）操る人はアイヌの原始人、其の哀調を帶びた唄聲が湖面を傳つて聞える樣だ。底知らぬ紺碧の水は澄渡つて、毅然たる雄阿寒の雄姿を倒映する神祕其の儘の風致は、全く人をして恍惚たらしめる。左下の挿畫は珍奇を以て知られる特產毬藻の寫眞で、今天然記念物に指定されて居る。形シホグサに似て根が無く、附着器を持たぬ一箇體の枝條が頗る密に分岐錯綜し、寫眞に見る樣な緻密な球形の塊を成して居る。恰も綠色のビロードで作つた毬の如く、大さは直徑二糎乃至三糎位から二〇糎乃至三〇糎位、密生して層を成し湖底に轉々とし、日中は酸素氣泡を含んでフカ〳〵と浮動する。

八十三頁の寫眞は摩周湖の風光で、對岸右方の頂が窪んで見える山は摩周火山群の一つオメウケヌプリの火口、左端の湖心に浮ぶ小さな島は神岩（カムイシュ）近景の立木は白樺で幹が白く光つて見える。湖の周圍は一五〇米前後の斷崖に圍まれ、底深く神秘の水を湛へて居る。昭和六年夏、北海道水產試驗場の實測に據ると、世界で有名なバイカル湖の四〇米五より、又我が田澤湖の三〇米三九よりも更に深く、實に四一米

の透明度を持つと言ふ。此の點世界一と言つて良い。

八十八頁の挿畫は漁場に於ける若人の活躍振を見せたもの、寫眞がカットされて居る爲全體の船の大さや網の種類等をそれと確認する事は出來ぬが、本文と照し合せて想像すると千四五百噸の發動機船らしく、網は恐らくトロール網であらう。トロール網は流し網の一種で長い大綱に依り曳航され、綱と網との長さは海の深さの三倍位を適當とする。船長若くは技師に依り此の邊が魚族の群れて居る所と見當が附くと、船足を少し緩めて投網に取掛かる。作業が終ると先端に半圓形を成した網は海底に膨んで、游泳する魚族を包含し乍ら曳航を續け、軈て網が引上げられると網の目に絡まつた魚族が、續々と船中に投込まれる。獲物が船に一杯に成る迄幾度も投網しては之を引上げる。寫眞に見る如く、漁師は潑剌たる鱒や鮭の頭部を巧に摑んで船底へ投込むのである。

文字語句

新出文字

鏡本　艾　奮　斜　澄　褐　獸

讀替文字

朗（新出は本卷、ラウ）　編（新出は本卷、ヘン）　胸（新出は卷五、ムネ）
食（新出は卷五、タウ）　異（新出は卷十、コトナル）　針（新出は卷三、ハリ）
傾（新出は卷八、カタムク）　青（新出は卷二、アヲ）　秀（新出は卷十、ヒイデ）

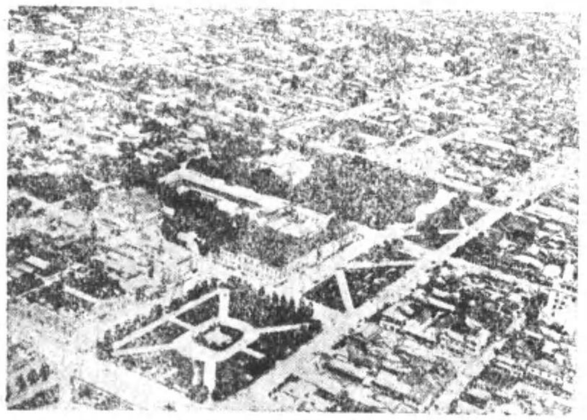
波（新出は卷四、ナミ）　拔（新出は卷四、ヌイテ）　澄（新出は本課、チョウ）
骨（新出は卷九、ホネ）　頂（新出は卷八、イタダキ）　久（新出は卷九、ヒサシク）
湖（新出は卷十、ワク）　晴（新出は卷五、ハレ）　雨（新出は卷二、アメ）
專（新出は本卷、セン）　網（新出は卷八、アミ）　潮（新出は卷七、シホ）
諸（新出は卷八、ショ）　任（新出は卷六、ニン）　揚（新出は卷十、ヤウ）
鈍（新出は本卷、ドン）

語句と其の解說

札幌　サッポロはアイヌ語の音譯、サツは〝乾いた〟ポロは〝廣い〟の意を表す。北海道廳の所在地。石狩平野の西南部、豐平川の扇狀地に位する政治・敎育・交通上の一大中心都市。街は山鼻（屯田兵村・住宅區）を頂點とし、南方に藻岩・圓山の小丘を控へ、豐平川市街の東南を貫流し、頗る景勝の地。往時は森林に被覆された洪涵原。明治二年開拓使廳を置かれた時設置されたもので、開拓使御雇米人技師ケフロン博士のプランと言はれる丈に區劃は碁盤の目の如く整然、其の中央に大通（道遙地）が帶の如く東西に延び、主要路の街路樹にはアカシヤ・エルム等がこんもりと茂つて、街全體がアメリカの植民都市にでも見る如き、エキゾティックな感を與へる。市の南部には商賈多く、北部には官衙・學校・會社等が散在。近代的文化都市の典型で、狸小路最も繁盛。道廳・石狩市廳・市廳・商工會議所・控訴院・鐵道局・遞信局・稅務監督局・鑛山監督局等の官衙多く、又北海道拓殖銀行以下多數の銀行會社の本支店があつて、小樽市と共に本道商業の大中心地。工業は官營に崩し盛大、原料・

燃料・交通・資本相俟つてビール醸造・製麻・製材・煉乳・製菓・製粉等の大工場があり、本道第一の工業都市。北海道帝國大學以下教育機關も亦備はる。又石狩平野の中心に在る爲、郊外は農牧地帶。名勝地としては、圓山公園(札幌神社)・中島公園・時計臺・豐平館・拓殖館・植物園等がある。尙附近に眞駒内種畜場・月寒種羊場・札幌競馬場・定山溪温泉等がある。名産物にはビール・亞麻製品・マニラロープ・煉乳及び牛酪・アイヌ細工等。交通は函館本線に沿ひ、市内に札幌・苗穗・桑園の各驛を有し、小樽市との連絡特に至便。其の他札沼南線・札幌軌道線・定山溪鐵道線・北海道札幌線・札幌線(省營自動車)等も通ずる。人口一九三、二〇〇。

札幌神社(サッポロジンジャ)　官幣大社。北海道石狩國札幌郡藻岩村圓山に在る。札幌驛から約四キロ、電車・自動車の便がある。祭神は大國魂神・大己貴神・少彦名神。明治二年九月勅に依つて札幌假廳の傍に祠を奉建し、同四年此の地に遷座して官幣小社に列す。即ち全道の鎭守。同二十六年中社と成り、同三十二年更に昇格して大社と成る。社殿は圓山と三角山との溪間を埋めた扇狀地に在る爲札幌市街より一段と高所に位する。例祭六月十五日。境内に接する一帶丘陵は圓山公園で、展望廣く櫻に美しい。



鵰鳥の近附地遙道市幌札

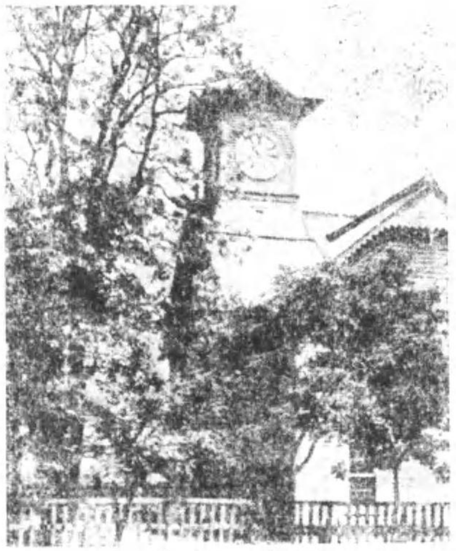
かんこ鳥(ドリ)　閑古鳥。かつこうどりの轉。郭公の異名。

呼子鳥とも言ふ。杜鵑の類で、それより稍〻小さく、羽は斑紋ある褐色。春夏の候、我が國に渡來、他鳥の巣に産卵。山林中にカツコウカツコウと反覆して鳴き、其の聲閑寂、古來多く詩歌に詠まれて居る。

遙遙地(ヒウエウチ)　遙遙は氣まかせにこゝかしこと遊びあるくこと。ぶらつくこと。遙遙地は札幌大通を言ひ、明治初年建設の當初防火計畫を兼ねたもので、市の中央を略〻東西に貫通し、遠く手稻の連峰を望み、近く左に圓山右に三角山を眺め、北海道らしい豐かな氣分を漂はしてゐる。

餘念(ヨネン)　自餘の念慮。外の考へ。他念。他意。"餘念のない"はたわいないこと。正體のないこと。一心になること。夢中になること。

時計臺(トケイダイ)　明治八年東京芝增上寺に在つた開拓使假學校を札幌に移すに當り、校風作振の爲招聘した米人クラーク博士(當時の黑田開拓使長官の懇請に依り北海道開拓の基礎調査を完了せるケフロン博士が推薦した人)の設計に依つて建てられた北海道最古の洋風建物として札幌の一名物と成つて居る。現在は札幌市の所有で、市役所の一部として保存され、階下が圖書館と成つて居るが、今猶報ずる時計の音は市民に一種の懷しみを與へて居る。



臺計時の物名幌札

大學(ダイガク)　もと札幌農學校と稱した。明治五年東京芝山内に設けられた開拓使假學校の後身として明治九年開拓使長

官黒田清隆創立、教頭マサチューセッツ農科大學長クラークを聘し、マサチューセッツ農科大學の組織に倣つて教則綱成、修業年限四箇年、卒業生を學士とし、單科農業大學の體貌を持して居たが、クラークの熱烈な基督教徒精神は在任僅か一箇年で學生に深い感化を與へ、内村・新稲戸・佐藤・伊藤志賀等日本精神文化に多大の貢獻を與へた士を輩出、特殊の學風を形成した。明治十五年開拓使廢止と共に農商務省に移管、明治十九年北海道廳新設と共に道廳管轄と成り工學科新設、明治二十八年文部省に移管、明治四十年東北帝大農科大學と成り、やがて北海道帝國大學と成つたが、三十年の歴史は農業教育以上に我が國精神文化に影響が多かつた。

一位の木（イチヰノキ） 深山に自生する一位科の常緑喬木。葉は線形、長さ二糎、幅三粍許、上面濃緑色、下面淡緑色。雌雄異株。三四月頃雄花は緑褐色の葇荑（ジュウテイ）花序を爲して稍葉腋に開き、雌花は葉腋に獨生、初め緑色壜狀を爲し、熟して紅色肉質の子衣を生じ、内に緑色の核狀種子を藏する。内地の高山・樺太・北海道等の山地に自生があるが、又庭樹として栽培。材には脂氣が有つて濕氣に堪へ、笏の材料として有名。其の他建築・器具材として用途が廣い。飛騨の高山は一位細工で名高い。

にれ 秋楡の別名。又いしげやきとも言ふ。山野に自生する楡科の落葉喬木。葉は小さく倒卵形或は楕圓形で齒牙があり、質が硬い。夏秋の頃葉腋に淡黄色の小花を開き、花後周圍に翅のある扁圓形の果實を結ぶ。

クラーク ウィリアム・クラーク。札幌農學校教師、米國人。初めマサチュセッツ農科大學長。開拓使長官黒田清隆の聘に依り明治九年來朝。青年薫育に當る僅か一箇年で有つたが、學生に及ぼした基督教的感化は頗る深く、基督教信者と成つた十數名の學生は後ブラウン及びジェイムズ門下と共に日本基督教の建設者と

成つた。彼が去るに臨み "ボーイズ・ビー・アンビシアス" （少年よ、大志を抱け）と叫んだのは有名。

胸像（キヨウゾウ） 胸のみで兩肩の無い半身像。クラーク博士の胸像は大學中央講堂前に在る。臺石に "ボーイズ・ビー・アンビシアス" （少年よ、大志を抱け）の名句が刻してある。

奮闘（フントウ） 力をふるつて敵とたゝかふこと。如何なる困難にもくぢけず益々つとめはげむこと。

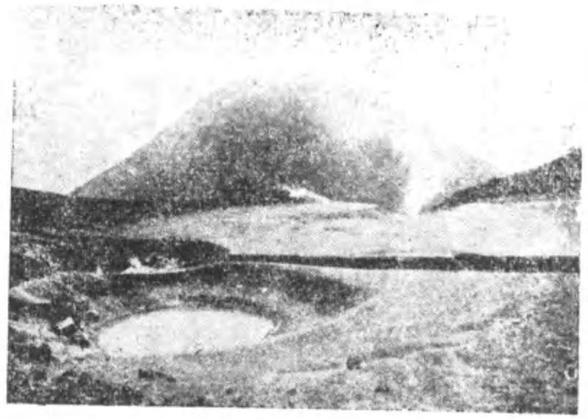
ポプラの並木路（ナミキミチ） 大學の構内、と言つてそれが何處を境にして居るのか、茫漠として唯鬱蒼たる曠野の中に建てられた學都、柔かな雑木の鮮かに區切つた其の通路、それをあても無く辿つて居ると、忽ち青空の眼界が開けて、清透な空氣の中を眞直に通つた楡やポプラの並木路、おゝ斯くも自由に、斯くも健康に、斯くも豐滿に斯くも親愛に育ち生きる事が出來るものか。誰も此處へ這入つたら思はず聲を上げて其の眞ん中を走り度くなるだらう。ポプラ街道は全く札幌大學の誇でなければならぬ。

牧舎の近く（ボクシヤ） 北大農學部は其の附屬せる八ケ所の農場の中、第二農場を自ら經營し、酪農を主とする經濟試驗を行ひ、以て道内に於ける大農經營の模範を示して居る。此の農場は大學構内の延長であつて、札幌市の北端に位し面積七十六町歩、繁養せられる乳牛の數は約一百頭、飼料は自給自足せられて居る。年産牛酪約八千斤、生乳一千石以上に及び、良牛に至つては年に六十三石餘の乳を生産するものすらある。又本邦何れの地にも見ない淡褐色のゲルンジー種と呼ばれる英國ゲルンジー島原産の乳牛が、五十年近くも近親蕃殖に係らず、能力衰へずに飼育せられて居るのも此の農場の誇である。

手稲の連峰（テイネ レンポウ） 札幌の西、後志の國境朝里山・余市山に續く連峰。標高一〇二四米。

阿寒（アカン） 原始的な北海道の神秘に接し得る所は阿寒地方と屈斜路地方とであらう。阿寒岳と言へば通常雄阿寒・雌阿寒の二嶺を總

稱するが、其の成因から見ると、雄阿寒岳は元來阿寒火山群と稱する直徑一五乃至二〇粁の一大カルデラの中央に生じた中央火口丘で、雌阿寒岳は其のカルデラを圍繞する外輪山の西南部に後から生じた寄生火山である。從つて阿寒湖は之に隣るパンケトー及ペンケトー二湖と共に外輪山の内部に陷落して生じた火口原湖である。雄阿寒は鈍頂圓錐形の優美な富士形の英姿を表し、海拔一、三七一米、火口底から抽出する事凡そ一千米、二種の相似た安山岩から成り、南麓には泥熔岩が分布する。全山針葉樹で覆はれ山巓には偃松が生ひ茂つた死火山である。之に反し雌阿寒岳は火山群中最新の成生に係り、諸種の安山岩並に火山碎屑岩から出來た成層火山で、現に物凄く噴煙しつゝ活動を續けて居る。標高一、五〇三米、更に之を雌山（マチネシリ）中雌山（ナカマチネシリ）小雌山（ポンマチネシリ）及び阿寒富士（ポンヌプリ）の四峰に分つ。雌山は最も最初に成生したもので、火口壁は破壞して三叉狀を成し、東部に一の爆裂火口がある。次に現に噴氣孔があり、小雌山の頂上には更に驚くべき一大噴火口があつて、直徑三丁餘に達し、一部の噴氣孔は尙活動の餘勢を保つが、大部分は既に終熄して暗綠色



雌阿寒岳（近景は湯沼）

の湯沼と成り常に硫氣と噴煙で覆はれて居る。阿寒富士は小雌山の南東方に孤立した鈍頂圓錐形の峯で、最後に成生したものである。中雌山の火口底には火山灰中に多量の硫黄が沈澱し、古くより硫黄採掘が行はれて居る。此の雌阿寒岳の頂上近くは磊々たる岩骨突兀として露はれ、山腹にはミネスワウ・イワウメ・コマクサ・メアカンフスマ・イワザクロ・メアカンキンバイ・アカンサスゲ等の珍奇にして可憐な高山植物が群生し、登山者の眼を楽しますのみならず、足一度び其の頂上に至ると、群峰脚下に在り、是寄（アショロ）白糠（シラヌカ）阿寒の三郡下は勿論遙にオホツク海及び太平洋を望み、十勝の大平野をも一眸の中に收める事が出來る。雄阿寒・雌阿寒の間に抱かれた湖盆阿寒湖は阿寒川の水源で、海拔六五〇米、周圍四七粁の廻りには翠巒を繞らし、湖上にはオンネモシリ・ポンモシリ・チェルイモシリ等を併せて五箇の小島が浮び、底知れぬ濃紺の水澄み渡つて、毅然たる雌雄兩阿寒の雄姿を倒映する風趣は、人をして恍惚たらしめる。且つ南岸の所謂湖畔には、滾々として清澄なアルカリ性温泉湧出し、十數戸の温泉宿とアイヌ人の漁家が木の間隱れに點在して居る。湖中には姫鱒又の名をカワチップと言ふ小形の鱒の一種を産し、肉の味は得難い風味を持つ。又此の湖には形毬狀を成すマリモと稱する淡水藻の一種を産する。無數の絲狀個體の集合して出來たもので、形態の珍奇は言ふ迄もなく、大は夏蜜柑大から小は雀卵大に至こ無數の圓球が湖底の淺瀨に小石原を見るが如く生育するさまは美事なものである。然も此のマリモは産地著しく局限され、本邦では此の外樺太の一箇所に産する丈で、外國でも頗る珍奇とされて居る。其の生態と分布とは學術上から頗る貴重なもので、天然記念物として保護されて居る。山紫水明の仙境、屈斜路カルデラと共に國立公園と

して指定されたのも所以なき事では無い。登山口は北見相生及び釧路舌辛驛から自動車の便があり横斷路を爲す。

釧路市 アイヌ種族は學ばざる地理學者だ。彼等が生れ乍らの直觀性は常に能く其の地形觀を地名に表現して居る。久壽里・久摺とも誌された釧路も其の一例で、アイヌ語の "越路" の意であると言ふ。釧路市は北海道の東南部、太平洋岸の開港場、釧路國支廳所在地。釧路川貫流し、山手（海蝕段丘）は住宅官衙、崖下の海岸通は發祥の地。下町（釧路デルタ）は商工業區。釧路川の切替工事完成し、港内浚渫・築港設備大半成り、根室・釧網兩線通じて至便、雄別炭田地方へ炭礦鐵道を分岐。近時東北海道唯一の商港として發展顯著。十勝雜穀の輸出港と成り歐洲直航船時に寄港、木材の大集散市場でパルプ（市外鳥取村に王子製紙工場）澱粉・亞麻製品の移出も多く、後背地は北見・十勝に及ぶ。水産加工盛大、總生産額の七割を占む。遠洋漁業（鮪）の大中心地。炭田近く石炭の供給至便、後背地も廣大で將來の發展を期待される。人口五八、九〇〇。

雌阿寒岳 雄阿寒火山の四周には火山基底の沈降と熔岩流の堰止とに依る四つの湖水が取卷いて居る。其の内最も大きいのは西側の阿寒湖である。其の次は北のパンケ湖東麓のペンケで、其の南麓に在るのが最も小さい。阿寒大火口は長徑二四粁、短徑一三粁、楕圓形の一大盆地である。恐らく火山臺地が沈降して生じたものであらう。其の後盆地の中央に雄阿寒の圓錐火山（一、三七一米）西麓壁上に雌阿寒（一、五〇三米）の活火山が噴出した。阿寒湖（湖面凹二〇平方米）は大火口内に在り、雄阿寒の西麓部を占めて居る。

千古斧を知らぬ 大古から一遍も伐採された事の無いこと。處女林。原始林。千古は長い間のむかし。いにしへ。又は永遠。盡未來。萬古。

超越 飛び越えて其の物と全く離れ去る

こと。客觀的態度を意味する哲學上の術語であるが、今は普通に常用されて居る。

明澄の水 明澄は少しの曇りも無く澄みに澄むこと。明徹。澄明。皎明。阿寒湖の水色は綠色であるが、然し著しく濃厚で且つ透明度も頗る大である。此の水は阿寒川の水源と成つて居る。

雌阿寒岳 雌阿寒火山の兩面に火口がある 其の東北にあるものは大きく、徑一・二粁、不明瞭乍ら三重に成つて居り、其の内部のものから噴烟して居る。

萬綠の世界 綠一色の世界。見るものゝ總てが綠なこと。萬綠は何もかも綠色なること。見渡す限り綠色の物のみなること。

異彩 かはつたひかり。普通とちがふきはだつたいろ。萬綠の世界に異彩を放つは漢詩の "萬綠叢中紅一點" に出で、青々とした中に唯一つ山はだの紅褐色が目だつて見えること。

まりも 珍植物として今天然記念物に指定されて居る。綠藻類の一種で、恰も綠色のビロードで作つた毬の如く、甚だ美麗で觀賞用としても頗る雅致がある。我が國では阿寒湖の特産で他では見られぬと言はれて居たが、最近に至つて千島・樺太の湖水に極めて稀に見られる。然し阿寒湖の毬藻は特に密生して層を成し湖底に轉々として居て、他の地方に見られるものとは全く其の趣を異にして居る。日中は酸素氣泡を含んで浮動する。そして分裂繁殖するのも此の植物の特徴とされる。

えぞまつ 蝦夷松。北海道に生ずる落葉性の一種の松。内地でも公園其の他の庭木として栽培する。

とゞまつ 椴松。松杉科樅屬の落葉喬木。北海道其の他の寒地に自生する。

雙湖臺 ペンケ・パンケの二湖を眺める展望所。此の眺望は天下一品である。

針葉樹林 針葉樹の林。針葉樹はマツ・モミ等の如く、狹長な葉を有する喬木。

默々 だまつて靜まり返つて居るさま。默然。

群青 青色の顔料。天産と人工との二つある。白青。

ペンケ・バンケ　共に雄阿寒火山の四周を取卷く四つの湖水の一つ。西側に在るのが阿寒湖で最も大きい。其の次は北のバンケ湖、東麓のペンケ湖、今一つ南麓に在るのが最も小さい。ペンケトー・バンケトーとも言ふ。共にアイヌ語で、トーは湖水・ペンケトーは下の湖・バンケトーは上の湖の意だと言ふ。

弟子屈（ディシカリ）　温泉地。屈斜路火山群を含み、釧路川と當別川とが合流する地點に在り、新舊兩市街から成る。兩岸に温泉湧出し、設備も能く備はり釧路線の開通と共に摩周湖・屈斜路湖探勝の中心地として發展、更に村内には鑛別・川湯の温泉の外、仁伏・池の湯・和琴・ポロムイ等の原始的浴泉が到る處に湧出、特色ある風光と豐富な泉量を誇る。又御料地林政の一中心で、枕木を出す。釧路線釧路から七三・四粁。人口九、〇一七。

屈斜路湖（クッシャロコ）　屈斜路大火口の環壁内に在り、釧路川の水源を成す本道第二の大湖で、周圍四七粁、海拔一二〇米の地に約七六平方粁の水面を開いて居る。ほゞ曲玉狀を成す此の湖は其の中央部に中島又はトウモシリと稱する繪の樣な一島を浮べ、風光の美を添へて居る。三方は峻峯で繞らされ、最深部は一二五米に達し、銚子口を前にして大鍋狀凹地の中に在る。水色は大體藍色であるが、時に著しく淡く綠色を呈する事もあり不透明になる事もある。沿岸の諸所に温泉が湧出し、釧網線開通に逆れ遊覽客が多い。弟子屈市街を去る一六粁。

和琴半島（ワコトンタウ）　屈斜路湖の南岸に在り、風景に富む。半島の突端は盛に硫炎を噴出し奇觀を呈する。附近に和琴温泉があり、浴槽は岩を堀つた天然風呂である。

美しい中島（ウツクナカジマ）　湖水の中央に在る中島卽ちトウモシリを言ふ。（周圍一一・八粁）

藻琴山（モコトヤマ）　屈斜路湖の北岸に在り、標高一、〇三八米。外輪山を成す連峰中群を拔いて高い。

美幌峠（ビホロタウゲ）　屈斜路湖の西岸、美幌川の水源を成す。

摩周湖（マシウコ）　阿

寒火山群の東北に隣接する屈斜路火山群は地形ほゞ阿寒火山群に似、規模は更に大きい。長徑東西凡そ二八粁、短徑凡そ二二粁に亘る巨大なカルデラを圍繞する外輪山とカルデラの中央に散在する十數箇の圓錐丘から成り、屈斜路湖は其の西端に、麻周湖は東端に相對峙して居る。外輪山を成す連峰中群を拔いて高いのは藻琴山で、標高一、〇三八米、巍然として屈斜路湖の北岸にそゝり立つ。其の他は一般に低く、三五〇米内外で、たゞ麻周湖の東方にある西別（ニシベツ）岳・カムイヌプリ・麻周山等は外輪山を破つて突起した所謂麻周火山群を成すもので、何れも八〇〇米以上に達する。是等の火山群は概して熔岩流・凝灰岩・角礫岩・集塊岩等から成る成層火山で、火口壁に沿つて其の成層狀態を能く觀察する事が出來る。麻周湖は弟子屈を去る僅に一〇粁、排水口の無い純然たる火口湖で、海拔二五〇米の高位を占める。二四粁に餘る周緣は悉く斷崖絕壁で繞らされ、容易に水邊に近づく事を得ない。湖中の中島は神岩（カミイハ）又はカムイシユと稱し藍を流した樣な透徹した水面にくつきりと浮び出て、森閑とした山の氣の漲つた幽邃境である。

摩周湖

碧玉（ヘキギヨク）　みどり色の玉。潛晶質の石英。空や水の淸く碧なるに譬へて言ふ。碧雲・碧

空・碧海・碧巖・碧水・碧流・碧山・碧草等皆同じ。

摩周岳（シヲウダケ） 麻周火山群の一で、麻周湖の東方に聳える。

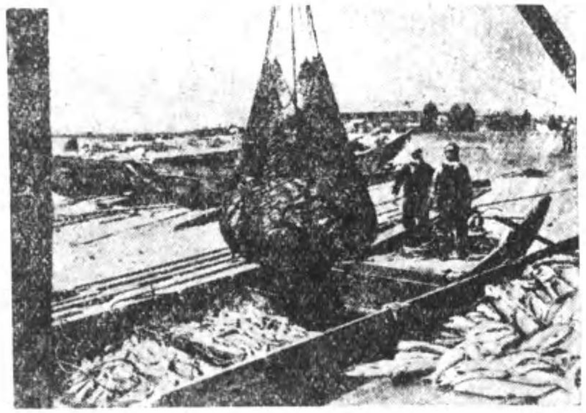
カムイトー 之もアイヌ語。カムイは神靈又は靈域の意。神居湖澤の如きも其の一例である。

十地の人（トヒト） 舊土人、即ちアイヌを言ふ。

國立公園阿寒（コクリツコウエンアカン） 阿寒國立公園は今通つて來た阿寒盆地並に川斜路・摩周盆地の一帶を其の區域に收めたもので、世界的な火山陷落地形に依つて構成された此の邊一帶の風光は他に類を見ぬ原始境のパノラマで、文化の惠澤に浴する事の遲れた事が幸した獨特の景勝地である。此の公園の中心である阿寒湖は盆地の中央に聳える雄阿寒（一、三七一米）の西麓を繞る周圍二六粁の火口原湖で、湖岸は曲折に富み湖中に點綴ずる島々には何れも原生林が黑々と繁茂し、明鏡の如く澄み渡つた水面に搖影する姿は神祕な風趣を添へて居る。雄阿寒火山群中の雌阿寒岳（一、五〇三米）は雄阿寒岳と相對する夫婦山として此の稱があるが、之は活火山で徑約三百米の火口からは今も尙噴煙を續けて居る。尙此の火山群中のポンヌプリ（一、四七六米）は、上部が少し缺げて居るが美しい圓錐形を成す故阿寒富士の稱がある。屈斜路湖は此の公園中最大の湖水で周圍四七粁、半月形を成して居るが、北岸に屹つ藻琴山（一、〇三八米）や南岸の和琴半島と湖水中央の中島（周圍一一・八粁）が能く其の單調を救つて居る。アトサヌプリ火山群は赤肌の無毛の峨々たる山々で、其の一たる硫黃山は今尙盛に噴煙を續け、山腹では硫黃の採取が行はれて居る。摩周湖は摩周火山の頂を占める湖で、面積二〇平方粁、湖心に神岩（カムイシュ）と言ふ小島を浮べ、周圍は悉く絶壁で容易に水邊に近づく事が出來ぬが、一度此の絶壁上から展望する時其の魁偉な風景は凄絶の感を與へられる。阿寒國立公園の特異性は、一に原始の地貌其の儘の姿が能く今日迄保存せられて居る點にある。加ふるに此の公園地域からは至る所清澄な溫泉が湧出し、是等の溫泉宿やアイヌ土人の漁家が木の間隱れに點在する情景を見る時、國立公園の一に選ばれた眞價を窺ひ知る事が出來る。此の公園は史蹟に乏しいが地質上・植物學上の研究資料は頗る豐富で、特に阿寒湖に產する毬藻は世界的に珍奇な藻で其の他魚類も豐富だが、就中姫鱒は阿寒湖が原產地だと言はれる。重複の嫌はあるが纏めて解說して置く。

北千島の漁場（キタチシマノギョバ） カムチャツカ半島の南部から北海道本島の東部に亘り、東北の方向に弛を弧描き、太平洋とオホツク海を分つ飛石狀の列島が千島諸島である。千島は東經一四五度二四分から一五六度三五分、北緯四三度三六分から五〇度五七分に及び、其の間距離は約一、〇九〇粁、面積六六六・六方里、北は占守（シユムシユ）阿頼度（アライト）島に初まり、南は國後（クナシリ）色丹（シコタン）島に終つて居る。是等の列島は本邦火山脈の要路、地質地形學的に興味あるのみならず、又島嶼的條件と相俟つて錯雜せる生物學上の興味を惹き、幾多科學上の重要にして興味多き問題を秘めて居る。加ふるに今や國家經濟の諸問題も漸次北方に進み、北洋漁業擁護上殊に樞要の地として、又一面航空科學の發達は此の列島の特殊的な存在を世界に明示せんとし、海霧の繁き所に拘すべき原始相を整へて幾多の問題を包み其の雄姿を横へて居る。元來北海の水族は種族は少いが或る一種の數量夥しいのを特徵とし、鮭・鱒・鮭等然りである。本道の位置は北緯四〇度以北であるからベーリング海とオホツク海からの寒流は東海岸を洗つて寒地水族を配給するが、幸に南洋からの暖流分派が强弱の差こそあれ東西兩岸に沿うて北上するから南方水族も亦分布する。殊に夏季東岸にある暖流は强烈で且つ陸地に切迫し、鮪・鰹の如き南方種でさへ遠く根室・千島方面迄廻游

する。此の暖寒二流の消長は本道に於ける水産業を支配し、又歐米の有名な漁場に比し漁類ばかりか他の水族迄も頗る繁饒で、世界三大漁場の一とされるのも當然である。　**にしんの漁期**　殘雪漸く鹿子斑の頃、漁村は勿論全道を擧げて待たれるのは鯡の消息である。之は水産のみならず金融・農業にも深く關係するからである。春鯡は四月上旬産卵の爲群を成し、さゞ波を立て海色を濁らして殺到する。其の先驅は五六年以上の老魚の一團で、之を〝走り〟と言ひ、其の肉肥膩で最も美味である。廻游期僅に十數日に過ぎず、後暫くにして中・後の二漁期あれど、魚も小形で然も少量であるから、豐凶は全く〝走り〟で決定される。　**根據地**　もととして據る所。ねじろ。北千島の占守・幌筵の沿岸、盤城崎附近と解して良い。　**流し網**　漁網には(1)仕掛網（棒受網・大謀網・桝網・大敷網・提灯網・四艇張網）(2)流網（トロール網・筧網・鯛縛網・鰮揚操網・地曳網）(3)落網(4)投網（5）抄網等の種類があるが、此處の流し網は如上の流網の中のトロール網を意味して居る。トロール網は流網の一種で一度船を出して網を繰出し、之を海中に流して置き、一定の時間の後（之は場所と魚の種類に依つて異なる）徐に引上げる。即ち



北千島の漁場

流し網は曳網の一種でもある。　**出動準備**　出動の準備・出動は出でゝ行動すること。出掛けて働くこと。　**エンジン**　發動機。一般にピストンを持つものをエンジンといふ。　**晴雨計**　又氣壓計とも言ふ。大氣の壓力を測る裝置。學術上に用ひられるものはフォルタンの水銀氣壓計で、上部に眞空を有する長さ一米程の水銀入ガラス管を底を革袋とした水銀槽中に倒立せるものを金屬筒中に納めた裝置。此の晴雨計では氣壓を〇・一粍迄精測できる。又普通一般に用ひられるものにアネロイド晴雨計があり、之は携帶に便利である。其の他氣象觀測用としてはフォルタン晴雨計・舶用晴雨計・山岳用晴雨計・自記晴雨計等がある。　**ます**　鱒には紅・銀・春張等の數種があるが、根室・千島方面は數量種類共に多く、殊に擇捉の紅鱒が有名である。　**投網にかゝる**　トロール船が網を海中に入れる作業に取掛かるの意。投網は大仕掛な漁業上の熟語で、普通に言ふナゲアミでは無い。此處はトロール網である。從つてカヽルも魚が引掛るの意では無くて、作業に着手するの意である。誤讀してはならぬ。　**カムチャツカ**　アジヤの東北部オホック海の東を南方に突出する大半島。面積約二七萬平方粁。凡そ北緯五一度乃至六〇度に位し、本陸には平坦な濕原で連り、千島の占守島と千島海峽を隔てゝ相對する。カムチャツカ附近は世界三大漁場の一を成し、漁業は西海岸を主とする。もと日本人の開拓したもので、近時東海岸でも漸く盛と成り、鮭・鱒・蟹を主とし罐詰又は鹽漬として輸出。定住人約一萬、土人は北極族に屬するコリヤク・カムチャダールで、外にロシヤ人も居る。　**漁獲**　水産物を捕採すること。すなどりすること。又は其の捕採せる水産物。えもの。　**滿載**　いつぱいに積みのせること。　**吃水**　船脚が水中に這入つた程度。喫水。ふなあし。

指導精神

札幌の印象・阿寒の幽遠・北千島漁場の壯快、三種三樣、夫々の趣を見せ、活躍北海道の風格を描き出して遺憾が無い。文の觀點は大自然を通じて能く其の特色を捉へ、氣分や情調を表した點にある。斯う言ふ捉へ方・感じ方・表し方は簡單に出來るものでは無い。簡潔で然も十分に箇性を見せて居る。土地の箇性も摑んで居るし、文章其の物にも箇性がある。　(一)の札幌は大北海道の中樞地として規模の壯大を誇り、(二)の阿寒は國立公園として世界に知られ、(三)の北千島の漁場には海國男兒の進取的氣魄が胸を打つ。其處には〝產靈のみわざ〟の程も窺はれ、躍進日本の將來性を思はせる。

北海道は樺太と共に我が北門の鎖鑰として、軍事的にも產業的にも國民の認識を新にする要がある。之を國策的に見ても、年々繁殖して行く人口を何う處置するかと言ふことは、焦眉の大問題として上下の頭を惱す所である。狹い國土に年々百萬に近い人口が殖えて行く。國內ではもう何うする事も出來ない。或は支那へ、滿洲へ、南洋へ、又アメリカへ、ブラジルへと移民の奬勵は行はれて居るが、然しそれらが色々な政治問題とこんがらかつたり、人種問題に妨げられたりして、思ふ樣に行かぬ現狀にある。此の際に於て我が領域の內に斯んな大きな然も自由な天地を持ち、多數の人口を包容すべき餘地を有して居る事に思ひ及べば、遠きを求めずとも近くに自由の天地が有るのに、何うして此の廣い原野を利用せずに居るだらうと寧ろ不思議に思はずには居られない。況や無限の寶庫とも言ふべき廣大な漁場を有して居るに於てをやである。

元來北海道の開拓事業は、歷代の內閣が多大の努力を拂つたもので、或は移住者に物資を給し、或は移住の便宜を與へ、或は屯田の方法を執り、色々と苦心を拂つたので有るが、何れも失敗に歸し、今日に至る迄十分に其の實績を擧げ得ないで居る。之は獨り北海道と言ふ一地方の問題では無くて、大きく我が國の恥辱である。現に外國の或學者は、日本人は移住の出來ぬ國民である。國內に於ける自然さへ十分に利用し得ない國狀に在ると批評を試みて居るさうだ　此の際に於て其の雄大至極の大自然と、生々潑剌、活潑々地の現狀を紹介する事は、國民の認識を新にする上に少からぬ効果がある。

北海道は經濟的に勃興の可能性がある。漁業に農業に鑛業に、更に商工業に、正に北海道は貧弱な日本の生產上に最も大きな存在たるを失はない。本課指導の核心も亦此の點に在るは勿論である。尙此の地が近く國際オリンピックのスキー會場と成り、世界注視の的と成つて居る事や、阿寒・大雪山の二つが共に國立公園として其の雄大を誇つて居ること等を附說して、其の將來性に期待を持たせる事を忘れてはならぬ。

指導形態

指導上の認識點

1　(一)の札幌からは何處と無く大陸的な悠々たる感じを、(二)の阿寒からは神秘的な原始景觀の素晴しさを、(三)の北千島の漁場からは世界三大漁場の一たる現地に於ける活躍振を夫々實感的に味はせ、活躍北海道の全貌を窺はせるのが本課の眼目である。

2　更に之を祖國の理解と言ふ見地から眺め、祖國愛護の精神と開拓事業の世界的宣揚と言ふ大國民的襟度を養ふ事も、忽諸に附すべからざる大切な心構である。

3　取扱は先づ地圖と照合して地點を明かにし

反覆讀誦させて旅行氣分を鼓舞し、挿畫や寫眞帖・繪葉書等を利用して身恰も現地に在る如き實感を喚るべきである。斯くて北門の要衝北海道の發展振を兒童の想像に描かせる事が出來たら、本課の指導目的は貫徹したものと言へる。

4　本課は大體五時間見當で如上の指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽先づ地圖に依つて地域の大體を會得させ、更に挿畫を一瞥させて讀心を喚るべきである。

2　全課の概觀。

▽全課が三篇から成つて居る事を知らせ、大體の見通しを附けさせてから通讀に移るが良い。

3　一度靜かに全課を通讀させる。

▽通讀して得た第一印象や感想等は殘らず記帳させて置く。

4　各篇の觀點を探らせる。

▽(一)の札幌は？　(二)の阿寒は？　(三)の北千島の漁場は？

5　不明の箇所を質問させる。

▽新出文字は字書の引方を輔導し其の都度索引させる。

朗　編　鐘　胸　英　奮　食　斜　澄
褐　異　針　默　傾　青　秀　岳　波
拔　澄　骨　頂　永　久　湧　晴　雨
專　網　適　湖　諸　任　揚　鈍

▽難語句は先づ類推させてから指導する。

こだま　案内役　花壇　餘念　放送
編物　時計臺　並木路　正門　青銅
胸像　大志　奮闘　牧舍　牧夫　食んで
肩を並べ　原始北海道　まのあたり　直下　急斜面　千古斧を知らぬ　湖岸一帶
密林　人間界　超越　明澄　よどませ
紅褐色　萬綠の世界　異彩を放つ　炭團
一興　原始林　針葉樹林　默々　傾斜

群青　優美　勝景　對岸　秀麗　一大展望　ほしいまゝ　地點　高原　煙波　海拔　碧玉　沈默　白骨　しろしめす　神祕境　雄大　展望　湧出　絕勝　漁場　漁期　下旬　活氣　けなげ　發動　機船　なぎ　根據地　出動準備　エンヂン　空模樣　爆音　快走　投網　とも　作業　日沒　北洋　濃霧　あこがれ　水溫　海流　適度　潮流　諸共　しばし　の夢　漁獲　滿載　鈍い　吃水

▽個有名詞は板書して入念に指導する。

札幌　札幌神社　かんこ鳥　逍遙地
三色すみれ　アカシヤ　ステッキ　一位の木　にれ　クラーク博士　ポプラ
ノート　千稻の連峯　釧路市　雄阿寒岳
阿寒湖　雌阿寒岳　まりも　えぞまつ
とゞまつ　雙湖臺　ペンケ　パンケ
弟子屈　屈斜路湖　和琴半島　藻琴山
美幌峠　釧路　オホーツク海　摩周湖
カムイシユ　しらかば　摩周岳　カムイトー　北千島　流し網　晴雨計　ます
カムチヤツカ浩岸　紅ます　防水具
さけ

6　數回繰返して默讀させる。

▽印象や感想は箇條書に記帳させる。

7　話合。

▽前項の作業を其の儘自由に話させる。

8　指名讀。

▽(一)(二)(三)を別々に。

9　箇讀。

▽各篇の要所に注意させて。

10　低音讀。

▽景觀や情景を想像に描かせて。

11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　全課の通讀。

▽個讀に自由讀を交へて。

2　質疑應答。

▽ゆつくり時間を割いて地名や物名等を得心

の行く樣親切に指導する。

3　上欄の新出文字を確める。

▽テスト的に一字宛書取らせて。

4　逐次研究。

（一）札幌

東京の叔父――僕

（1）札幌神社――→えん先――（いちご　牛乳）北海道の味

（朝）神社の森→かんこ鳥

（2）市内見物（午後）――（六月の空　うららか）――（朝かな中に　一種のさびしさ）

（3）大通――（道遙地）花壇の三色すみれ（蝶）

芝生に大學生（讀書）

野球放送に聞入る（一群）

赤んぼうを眠らせ（編物）

▽文脈を辿つて深究させ頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し、各自のノートを對照させる。

（4）時計臺（三時）鐘の音

アカシヤの並木路

叔父はステツキを

（5）大學の正門　校庭――（一面の芝生　小さな流）（子供）

クラーク博士↑銅像　一位の木を背に

『少年よ、大志を抱け。』

學→生に殘した言葉

（6）叔父の言葉←『君も一つ大志を抱いて』（力强く）

（7）牧舍←にれの林……太い枝　深い日かげ

ポプラ並木……大空の雲をはく

牛の群……いう〳〵と　草を食んで

大學生……ノートを抱へ　肩を並べて

（8）夕方

日はやうやく　手稻の連峯に

農場の鐘　廣野の彼方へ

（二）阿寒

(1) 釧路市
← 北方（八十粁）
(2) 阿寒湖（雄阿寒岳の直下）
← 原始北海道の神秘
急斜面に迫る絶壁
湖岸の密林
人間界を超越して
(3) 湖
上（舟）
明澄の水
冷やかに
暗い青さ
底知らぬ淵
(4) 雌阿寒岳
煙を吐いて
紅褐色の山はだ
萬緑の世界に異彩
自動車
まりも
湖の一角の底
緑色の炭團
一興
(5) 原始林
えぞまつ
とどまつ
途中
雙湖臺
針葉樹林の海
密林の底
ペンケ
パンケ
(6) 弟子屈

← (7) 屈斜路湖
（車）
道を北へ取つて
和琴半島の優美
美しい
中島
秀麗な
藻琴山
← (8) 美幌峠
一大展望
南面→屈斜路湖……釧路の高原・山岳（大波の如く）
北面→北見の高原……オホーツク海（遠く）
← (9) 摩周湖
摩周岳の中腹（海拔三百五十米）
約二百米の絶壁上から見下す
澄切つた碧玉の色
脚下の水
死の如く默然として
中央
一つの中島
カムイシュ
靜かさ
周圍の絶壁
水際から密林がぎつしり
立枯のしらかば（白骨のやう）
摩周岳
對岸やゝ右にけづり立つ

神秘境
- 水際は永久に近附けない
- 神の湖（カムイトー）
- 山岳―秀麗
- 阿寒
  - 湖―神秘
  - 密林―果しなき
  - 温泉―至る所
- 國立公園（北海道の誇）
  天下屈指の絶勝

（三）千島の漁場

春にしんの漁期の終る頃

北千島
- そろ〳〵活氣を帶びて（五月下旬）
- 發動機船→六百海里の北へ　續々
- 靜かな海←（此の頃はなぎの日が多い）
- 北千島を根據（約百隻）

流し網出漁（出動準備）
- （エンジンの調子
- 網の支度
- 晴雨計と空模樣）
- （やがて爆音高く）

（1）出發
- 思ひ〳〵　沖へ快走
- これから三時間→ますの漁場

（2）投網
- ぐつと　速度を落しながら
- 一直線　進む舟のともから
- 網が次第に（約五千米）（濃霧）
- 汽笛→カふチヤッカ沿岸の汽船（なつかしい）
- 『網の綱をしつかりつないでおくんだぞ。』
- 『水温は紅ますに適度、潮流は餘り速くない。』

（3）潮のまに〳〵
- 『きつと大漁だぞ。』
- 網の先に附けた目じるしのランプ（ぼんやり）
- せまくるしい船室　しばしの夢

午前二時頃（もう東の空が白み始める）

（4）『網を揚げるんだ。』
- 船長の聲
- 若者……防水具に身を固め
- 明方の風……いやといふ程冷たい
- 元氣のよい掛聲……『よいしよ〳〵。』
- 引揚げる片端から……海面にさゞ波がをどり
- 五六十糎のますやさけ（網の絲も切れんばかり）

（5）甲板　見る〳〵さけ・ますの山
作業が五時間も續いて
一萬尾に近い漁獲（滿載）
（濃霧が薄れて太陽は洋上に）（壯快）

（6）根據地へ　（思ひ切り吃水深く　殘雪の島山を目當に）（波を切つて）

5　グループ研究。
△前項の文圖を中心に問題を作製させて。
6　各篇各地の個性を摑ませる。
（一）札幌―のび〳〵した都市。
（二）阿寒―天下の絶勝。
（三）北千島―海の寶庫（若者たちの氣魄）
7　話合。
▽讀後の印象や所感を中心に。
8　指名讀。
▽（一）（二）（三）を別々に。
9　低音讀。
▽聲を立てゝ一氣に讀破させる。
10　ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1　通續練習。
▽時間を與へて存分に。
2　輪讀。
▽（一）（二）（三）を座席順に。
3　會話。
▽グループ毎に問題を作製させて。
4　話方練習。
▽旅行家氣取で、實感的に。
5　學習事項の整理。
▽內容・形式の兩面に亘つて。
6　補充說話。
北海道の開拓事業や先住民族等。

7　朗讀練習。
8　視寫・聽寫練習。
▽表現の勝れた箇所を選んで、又は選ばせて。
9　新出文字の書取。
10　語句の應用練習。
11　テスト。

テスト問題

一、次の漢字に振假名を附けなさい。

1　遣遙地　6　碧玉
2　花壇　7　沈默
3　奮闘　8　展望
4　斧　9　空模樣
5　炭團　10　吃水

二、次の熟語を解釋しなさい。

1　超越　6　絶勝
2　滿載　7　海拔
3　根據地　8　針葉樹林
4　海流　9　群青
5　晴雨計　10　神祕境

三、次の□の中へ適當の字を入れなさい。

1　午後は僕が□□役になつて、市内の□□に出□けた。六月の空はうら〻に□れて、所々に□い白雲が光つてゐた。

2　今しがた正時を□けた時計□の□の音を追ひながら、白い花の□をつけたアカシヤの□□□叔父はエプロンを思ひ切り□つて行く。

3　網の□をしつかりつないでおくんだぞ。今夜は□らしいが、水□や□□はどうだい。

4　其の山岳は□□、其の湖は□□、果しなき□□と、雄大な□□と、さうして至る所に湧出する□□とをあはせ有する□□□□阿寒は、たゞに北海道の□であるばかりでなく、まことに天下の□□だと私は思つた。

第十五　我は海の子

海國男子の意氣と氣魄を歌つた文語詩で、海の子我等が聲高らか愛唱すべき一種の愛國歌であり行進曲である。

海邊の苫屋で、將又荒磯に立つて合唱し度く成る詩だ。

海水浴の時でも良い、汀に釣を垂れる時でも良い、それともヨットに快走を試みる時、ボートを漕ぎ出す時、共に手を取合ひ肩を抱合つて、愉快に愛誦し度い詩篇では無いか。

地曳網を曳き乍ら一家眷族が揃つて歌ふも嬉しく、いざ船出と言ふ遠洋漁業の纜を解く時も宜しく、漁獲を滿載して漕歸る艪拍子に合はせて歌ふも更に妙、さては雄々しい探檢隊の門出にも、軍艦生活にも、遠洋航路にも海國日本の何人が愛唱してもぴつたりと共鳴する愛國歌では無からうか。

否、男のみでは無い。海國男子を奮起せしめる少女の歌でもあり、妻の聲でもあり、母親が我が子へ激勵の應援歌でも有り得よう。再錄ではあるが、其の邊に尙捨て難い趣がある。

文字語句

新出文字

龍（リュウ）

讀替文字

操（新出は卷九、サウ）　腕（新出は卷七、ウデ）　護（新出は本卷、ゴ）

語句と其の解說

海の子　海に依つて育て養はれた人の意。海國男子。　**白波**　白く泡立つ波。浪は水激し石遇し風則浪とあつて、波より少し强い場合に使用される。　**いそべ**　湖海等の水岸に岩石ある場所を指す。今は一般に水に近き岸をいふ。　**たなびく**　タは接頭語でナビタの意を强めていふ。なびくは氣流や風等の爲、物が横に平になること。　**とまや**　苫屋。苫は葦・菅等で編んで作つた莚の類。とまやは之で屋根や壁等を造つた粗末な家をいひ、多く漁夫の住家等に見受ける。　**こそ……なれ**　こそは係、なれは結び。語調を整へ、意味を强める。　**住家**　住ひする家。住處。　**ゆあみ**　入浴すること。水又は湯に體を入れること。此處のは產湯の意。　**千里寄せ來る海の氣**　海路渺茫果てしも無い彼方から、絕えず吹き來る海の空氣。海風を形容して言つたもの。　**わらべ**　わらんべの約。わんらべはわらべの音便で、童子を意味する。十歲內外のまだ髮も上げぬ幼兒をいふ。　**高く鼻つく**　何かの匂がプーンと强く匂つて來ること。　**いその香**　海岸には海岸特有の匂がある。それをいその香といふ。　**不斷の花**　四時枯れること無く咲き誇る花。此處では浪を花に譬へ、磯の香を其の薫りに喩へてある。　**なぎさ**　渚。波打際をいふ。　**いみじき樂**　非常に良い音樂。いみじきは甚だ。すぐれたる。此の上もない。　**丈餘のろかい**　一丈餘もある艪や櫂の意。艪は多く舟の後部にて使ひ、一丈二三尺の稍彎曲せる船具。舟の大なるに連れ後側部に一本又は二本を附ける。

一挺艪・二挺艪等と其の數に依つていふ。櫂は多く船をやるに用ひ、彎曲殆ど無く、唯僅に其の先端水かきの扁平部に彎曲のあるものがある。　**操りて**　たくみにあつかふ。ほどよくあしらふ。あやなす。あやどる。　**行手**　進み行く方向。前途。　**波まくら**　船路の旅をいひ、浪の上に枕して起臥するをいふ。　**百尋・千尋**　非常に深いこと。一尋は六尺。百千は數多きを形容していふ。　**幾年**　何年も何年も。長年の間。　**腕**　兩腕のこと。意氣と氣魄を思ふべきである。　**赤銅**　赤銅色。色黑く赤味を帶びた健康色の形容。　**さながら**　そのまゝ。まるで。あたかも。ちやうど。宛然。　**恐れんや**　やは反語。恐れようか、決して恐れはしないと意氣込んでいつたもの。　**龍卷**　猛烈な旋風の爲海水が卷上げられて柱狀を成し、空中高く立昇ること。旋回しつゝ進む風は其の中心部に於て遠心力の爲空氣稀薄と成り、低氣壓の甚だしき箇所を生ずる。斯くて旋回最も激しくなれば眞空に近き　所を生じ、水は其の空所を塡てんと集中する。然も其の旋回に力付けられて猛烈に上昇するに至るのである。上空の雲霧も激變ある際に生じ易く、砂漠等にも激しき旋風を起すものである。昔は之を龍の上天と心得て居たから此の名がある。　**いて**　人を誘ひ促す時、又は思ひ立つ時に言ひ出る聲。どれ。いざ。さあ。　**海の富**　海より得られる寶、卽ち海の幸をいふ。海中に藏されて居る財寶。鹽・海藻・魚介・海獸等の總てを指す。

指導精神

可なり長篇に亙つた七五調の叙事的抒情詩である。前半は主として過去の追憶で、後半は希望と勇躍を叙

して居る。原始的な力強い姿が想ひ浮ばれると共に、海國男子の剛健な意氣と氣魄が全詩に脈打つて居る。内容を一口に言へば、所謂海事思想の鼓吹を目ざしたもので、〝海はいゝなア〟〝海上は樂しいなア〟と海上生活に憧れを持たせようとの意圖に出でた出もの、それが徹底すれば自然本課の使命は果されたわけである。

一の歌は住家であり、二は生ひ立ち、三は漁村の樂しみ、四は海の愉快、五は身體の鍛練、六は精神の鍛練、七は作者の抱負、先づ作者の住家は海岸であると言ふ。それは極めて見すぼらしい破屋ではあるが、前には蒼茫千里の海を控へ、遠く續いた松原にはひた〳〵と白波が寄せては眞砂子を洗ふ。其の眺望絶佳の松原の中に作者の住家がある。然も此の作者は生れ落ちると直ぐ海水に浴し波の音を聞き、海の氣を吸うて其の明け暮を海に親しみ乍ら育つて來た。悲しい時には浪は慰めの曲を奏で、嬉しい時には又喜悦の樂を奏でゝ呉れる。

磯邊の香には不斷の花の香氣があり、清吹く松風は美妙な音樂であり、廣々とした海は遊びの庭である。之こそ唯一無二の喜びであり無上の樂しみである。斯くて茲に育ち茲に遊んだ作者は、鐵より堅き腕と、赤銅の肌と、氷山にも龍卷にも怖ぢぬ身體的にも精神的にも頑丈な健兒と成り終うせたのである。――鑑賞の作業も大體斯樣に歌其の物に幾許かの想像を加へ乍ら、明るい愉快な氣持で進めて行き度い。そして最後は矢張り〝大船を乘出して拾はん海の富〟〝軍艦に乘組みて獲らん海の國〟と言ふ作者の雄々しい希望抱負を頷かせ、共鳴させ、更に感激と憧れに迄引入れなくてはならぬ。海事思想の養成と言ふ實利的の目的が聊か鼻について厭味が無いでもないが、然し全體の緊張した調子と明るい氣持が其の缺を補つて、男兒には可な

り喜ばれる教材であらう。

『わらべなりにけり』の『けり』は詠嘆、『たなびく』の『た』は接頭語、『鐵よりかたきかひなあり』は誇張、『海卷きあぐる』も同じく誇張、『我は拾はん海の富』は倒置法、尙其の他各所に隱喩・誇張・反覆・直喩對句等が用ひられて居るが、之も形式上の問題として見逃し得ない事であらう。次に藤村の『舟路』を參考に揭げる。

海にして響くるの聲、
水を打つ音のよきかな。
大空に雲はたゞよひ、
湖わけて舟はゆくなり。
靜かなる空にすかして、
青波の深きを見れば、
水底やはてしも知らず、
流れ藻の浮きつ沈みつ、
綠なす草のかげより、
わき出づる泉ならねど、
おのづから滿ちくる潮は、
海原のうちにあふれぬ。
さながらに遠き白帆は、
群をなす牧場の羊。

吹き送る風に飼はれて、
わだつみの野邊を行くらん。
雲行けば舟もしたがひ、
舟行けば雲もまた追ふ。
空と水相合ふ彼方、
もろともに今日の泊へ。

靜かな大空の下、潮わけて滑り行く舟のこゝろよさが、五七の節奏と共に所謂三誦飽かざる感を抱かしめる。殊に〝雲行けば舟も從ひ舟行けば雲もまた追ふ〟と言ふ邊りの表現は全く金玉の響である。唯徒に自由詩と言ふ名のみにかぶれて、自由詩で無ければ詩で無いかの如くに考へて居る人々の多い現在ではあるが、其等の人々も斯うした詩に接すれば矢張音數律に依つた詩にも亦捨て難い味ひの有ることを思ふであらう。本課も聊かカビが生え他の新鮮な作品に比して幾らか見劣はするが、前課と思想的に連絡もあり、海の子我等の心意氣も四句七聯の間に力强く歌ひ盡されて居る。結びの〝いで大船を乘出して〟は海上發展、〝いで軍艦に乘組みて〟は國防意識。前のは北千島の漁場や歐洲航路と、後のは日本海々戰と連絡させて取扱ふべきである。尙直接次の課間宮林藏に入る橋渡と成つて居る點も、教材配置上重要な觀點として見逃してはなるまい。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指標は自叙體に成る七五調の流暢明快な詩柄に馴れしめ、海の子我等が誕生から成人する迄の希望と抱負の程を寛はせる點に在る。其の海國男子として意氣と氣魄に血の躍る委こそ、正しく興國日本の元氣と氣慨を象徴したものであらねばならぬ。此の旺盛な元氣と海への思慕とに深く觸れしめるのが本課の指導眼目である。

2　前半は主として情緒纏綿たる過去の追憶、後半は海の子我等の希望と抱負を勇躍の熱情で叙したもの。其の間都人士の思ひ及ばぬ素朴な原始的の委が力强く寛はれると共に、雜りの無い國民精神の鬱勃たるものが閃いて居る。健全な人間の生成・氣魄に富む國民の膽力、然して掬すべき情緒の微に觸れて居る點等、此の詩篇の生々として尙捨て難き所以である。

3　取扱としては極めて暢びやかな感傷的の氣分に滿ちた追憶から、漸次に力强く高潮し、最後は雄々しき踊躍に迄及んで居る點を味はせ、海國日本の行進曲・海の子我等が愛國歌として高らかに歌ひ力强く奏づべきである。蓋しリズムの波に乘り、旋律と呼吸を合致させるのは、何れの詩篇にも共通した常識的な指導概念たる事を忘れてはならぬ。

4　本課は大體二時間見當で指導を纏むべきである。

第一次指導

1　題目の指導。
▽唱歌と連繫し一度合唱させ學習動機を喚起する。

2　徐に一回通讀させる。
▽視寫又は聽寫させても良い。

3　讀後の印象を話させる。
▽紙片を與へテスト式に筆答させ、指導の參考に資するのも効果的である。

4　不明の箇所を質問させる。
▽新出文字は其の都度字書を索引させる。

操腕龍護

▽難語句は一度類推させてから指導する。

海の子　いそべ　白波　たなびく　とまや　住家　ゆあみ　千里寄せくる　海の氣　わらべ　鼻つく　いその香　不斷の花　なぎさ　いみじき樂　丈餘　ろかい操りて　行手　百尋千尋　きたへる　腕赤銅　さながら　來らば來れ　龍卷　驚かじ　いで　海の宮　海の國

5 數回繰返して通讀させる。

▽各聯の意味を考へさせて。

6 話合。

▽把捉した詩境を中心に。

7 範讀。

▽(七)(五)の旋律に注意させて。

8 指名讀。

▽一聯づゝ、輪讀式に。

9 低音讀。

▽場面や詩境を心に描かせて。

第二・三次指導

1 全詩の聽寫。

2 讀合。

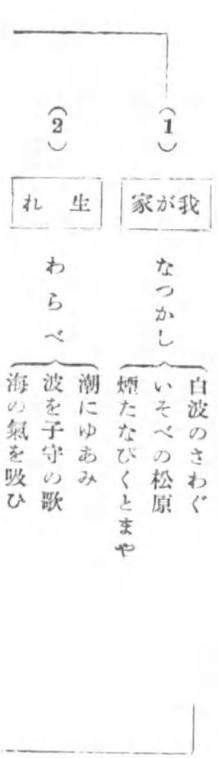
▽讀合せと同時に語句を吟味する。

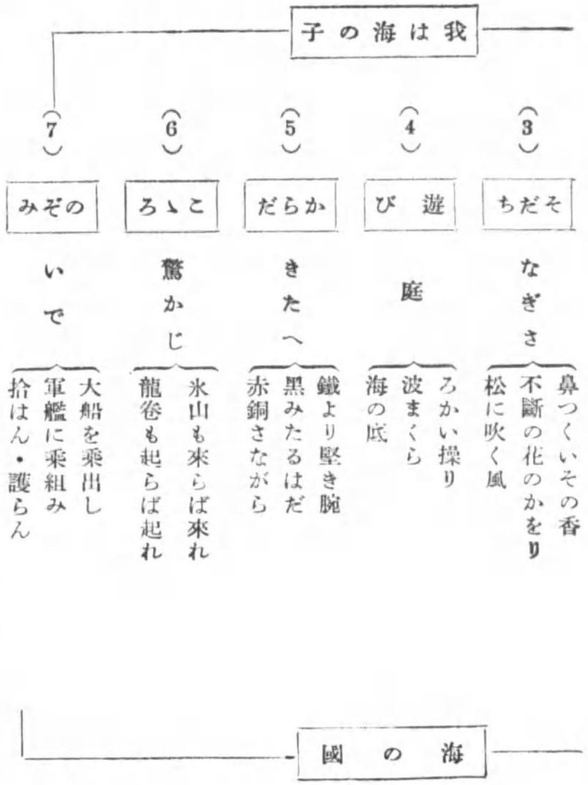
3 一度靜かに通讀させる。

▽詩心や詩情を汲ませて。

4 逐次研究。

▽頃合を見て要所を板書して纏める。





5 書取。

▽板書事項を讀本と照合して視寫させる。

6 話合。

▽詩心や詩情を中心に。

7 對譯練習。

▽感じを込めて一句づゝ散文化させる。

8 詩形の吟味。

▽既習の詩形と比較させて。

9 朗讀練習。

10 全詩の暗誦・暗寫。

11　歌謡化練習。
　▽唱歌と連絡させて。
12　新出文字の書取。

テスト問題

一、次の詩を讀んで後の問に答へなさい。

波にたゝよふ氷山も、
來らば來れ、恐れんや。
海卷き上ぐる龍卷も、
起らば起れ、驚かじ。

(1)　これはどんな心持をうたつたものか。
(2)　たゞよふとはどんなことか。
(3)　龍卷とはどんなものか。
(4)　恐れんや・驚かじのわけ。
(5)　此の詩を讀んでどう思ふか。

二、次の詩を分り易く口語に直しなさい。

高く鼻つくいその香に、
不斷の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を、

13　語句の應用練習。
14　テスト。

いみじき樂と我は聞く。

三、次の書取をしなさい。

1　コモリウタ　(　　)
2　オンガク　(　　)
3　カヒナ　(　　)
4　シホカゼ　(　　)
5　ウミノソコ　(　　)
6　グンカン　(　　)
7　クニノマモリ　(　　)
8　ウミノトミ　(　　)
9　アヤツリ　(　　)
10　タツマキ　(　　)

第十六　間宮林藏

海の子我等の愛國歌に送られ、本課は北門開發の偉人談である。配材の巧妙さに先づ興味を唆られる。

江戸幕府が嚴然たる鎖國攘夷の政策を取つた爲、德川時代の我が文化は西洋諸國より遙かに後れたが、唯樺太沿海の踏査探究のみは我が間宮林藏の雄飛に依つて、世界の誰よりも早く樺太の半島說を覆したので有つた。

林子平の〝三國通覽圖說〟には樺太は東韃靼の地續きで半島であると說かれ、近藤重藏も亦〝邊要分界圖考〟に同樣の說を立てゝ居た。

有名なフランスの探險家ラ・ペルーズも、ロシヤの探險家クルーゼンステルン、乃至はイギリスの探險家ブロートン等も、林藏と相前後して樺太地方を航海探檢して居り乍ら、相變らず樺太をサガレン半島だと唱へて居る。

間宮林藏に依つて初めて樺太が南北に長い島だと發見されたに拘らず、幕府では大して之を問題にもしなければ、彼の功績を賞讃するでも無かつた　樺太が島であらうと半島であらうと將軍家齊なぞに取つて、恐らく痛くも痒くも無かつたに違ひない。

然るに我が國に來朝した日本研究家獨逸の科學者ジーボルトの如きは、流石に林藏實測の地圖を見て驚き且つ讚嘆して其の功績を稱へた。彼が獨逸に歸國して東洋日本を紹介した書物の中に其の地圖が刷込まれ、

の Mamiya Seto（間宮瀨戸、卽ち間宮海峽の意）の名を世界に紹介したのが西曆一八四〇年（我が天保十一年で、彼の探檢より三十年目）の事であつて、彼の偉大な功績は却つて外國人に依つて認められたものである。之を思ひ之を察すれば、林藏の功績が如何に偉大であつたか、今更の如く敬仰されるで有らう　編者も其の間に於ける不屈不撓の精神と前人未踏の壯途を說いて、先覺の大なる足跡を偲はせ、文化增進の偉業に參加させようとの意圖に出でたものであらう。

挿畫の印象と其の解說

九十四頁の挿畫は間宮林藏の探檢委を見せたもの。手にして居るのは測鎖、長さは普通約二〇米、先に分銅が附き、之で海の深度を測量する。大刀が背後に拔けて見えるのは、背割羽織（ぶつさき羽織とも言ふ）を着て居るからである。據所は恐らく〝東韃紀行〟の原圖を粉本として描いたものであらう。

九十八頁は間宮海峽を中心とした樺太の略圖。中央部の點線が北緯五十度の日露國境線であるのは言ふ迄もあるまい。南は白主から北はナニヲー、さてはシベリヤのキチー・デレン、未見の土地に足跡を印した林藏の苦心の程が思はれる。本文と對照して見る時、單なる素描に過ぎぬ此の一片の略圖が、恰も林藏の偉勳を物語る生きた記念碑の樣に、光彩陸離として感慨深きものがある。尙此の略圖は次の樺太の旅にも共用される樣作製されて居るのを見逃してはならぬ。

文字語句

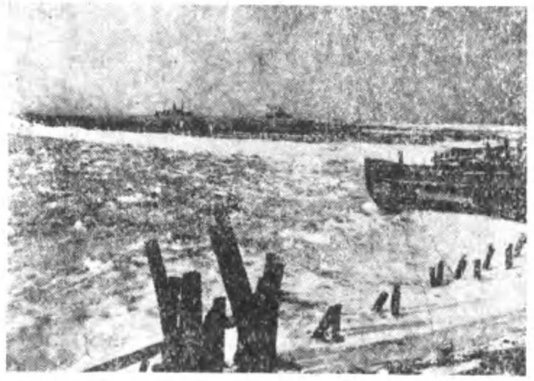
新出文字

狀（ジヤウ）　留（トヾマル）　綠（ロク）　險（ケン）　伴（トモナフ）　吏（リ）

讀替文字

疑（新出は卷八、ウタガフ）
欲（新出は卷九、ホシ）
怪（新出は卷十、クワイ）

語句と其の解說



間宮海峽（結氷期）

解（新出は卷十、トケ）　**越**（新出は卷七、コシ）
親（新出は卷四、オヤ）　**易**（新出は卷八、イ）
酒（新出は卷四、サケ）　**强**（新出は卷三、ツヨイ）

間宮林藏　幕末の探檢家。字は倫宗。常陸の人。文化五年幕命を受けて松田傳十郎と共に樺太を探究し、後更に單身北地に入り、シベリヤの風土・人情を詳錄して歸つた。此の探檢に依り樺太が半島に非らざることを初めて確めることを得、爾來樺太と露領東部沿岸との間を間宮海峽といふ。弘化二年歿。年六十三。

探檢　危險を冒して實地を探ること。　**解決**　もつれごとのかたがつくこと。きつぱりと結末をつけること。　**松田傳十郎**　初め幕府の小人目付、累進して松前奉行支配調役下役元締と成る。

單身　ひとりみ。たゞひとり。單獨。　**白主**　樺太の南端、本斗に在り、宗谷海峽を隔てゝ北海道の宗谷・稚内と相對して居る。舊幕時代樺太との往復は多く此の地と宗谷との間に行れて居た。

名狀すべからず　說明ができぬ。たとへやうがない。名狀は其の

狀態を言ひ現はすこと。　**越年**　年をこすこと。　**一小部落**　名も無いちつぽけな部落。部落は人家の集り。むらざと。村落。　**大陸迫り**　大陸が間近に迫ること。迫るは近よる。近づく。又は狹くなる。せばまる。つまる。此處の大陸は露領シベリヤ。樺太に近接する沿海州一帶を意味して居る。　**絕緣**　緣をきる。關係を絕つ。全く離れる。理學的には他のものに電氣の傳はる緣を絕つこと。電氣が外の物に傳はらぬ樣にすること。　**一周**　ひとめぐりすること。　**從者**　ともの者。ともびと。とも。　**危險**　害を生ずる虞れある狀況をいふ。あぶないこと。けんのん。　**鹵長**　えびすのかしら。蠻族の長。　**交易**　物品のとりかへこ。物貨の交換。貿易。　**記錄**　書きしるすこと。又は其の記した文書。かきもの。　**間宮海峽**　樺太島とシベリア大陸間の海峽。海峽の存在を初めて發見した林藏の名に因んでかく言ふ。　**黑龍江岸**　黑龍江の岸。黑龍江は東アジアの大河、露滿國境を流れて韃靼海峽に入る。　**野宿**　野天に寢て夜をすごすこと。露宿。　**雨露をしのぐ**　雨や露をたへしのぶ。　**出張所**　本部の事務所から分れて他所へ出て居る事務所。　**貢物**　屬國等から一定時に其の國に奉る財物。　**歸着**　もと出た所へ歸りつく。歸來。　**對岸大陸**　對岸の大陸。卽ち露領シベリヤ、樺太に向ひ合つた沿海州一帶を言ふ。對岸はむかうの岸。むかうぎし。むかうがし。

指導精神

本課の觀點は林藏が千辛萬苦、凡ゆる困難を克服して、能く探檢の目的を果した意氣と氣魄に在るは勿論であるが、文の核心は歐米の探檢家・地理學者に先んじ、樺太が半島に非ずして離島なる事を發見し、間宮

海峡の名を殘した點に在る。

記錄に據れば、林藏は名を倫宗、安永九年常陸國筑波郡谷井田村上平柳の農家に生る。父を庄兵衞と言ひ、母は森田氏。家計頗る貧しく籠工を營む。幼にして穎悟頗る數理に長じ、又地理・天文の事を好む。(探險家としての要素生れ乍らに備はる附說して欲しい) 寛政八年歲十七、幕府の普精役雇に擧げられ(之が出世の緒) 更に普請役下役に進む。尋いで蝦夷地御用雇を命ぜられ(彼が北地に關心を持つ機緣) 初めて北地に赴く。文化四年四月ロシヤ人擇捉島紗那に來寇するや、倫宗も亦此の地に在り(之が探險の動機) 幕吏及南部・津輕の戍兵等逡巡敢て應戰の術を講ずる者無し(林藏の義憤) 倫宗其の危機迫るを察知し、我より進んで之を擊攘せんと欲して激勵頗る力めしと雖も、遂に及ばずして大敗を招けり。(此の意氣推賞に値する) 是に於て北門の警益々急を告げ、倫宗畢生の大事業たる樺太北境探檢の命を見るに至れり。(之が探檢目的、附說の要がある) 倫宗文化五年四月を以て第一回樺太踏査の途に上る 此の行松田傳十郎(幕府の役人) 行を同くす。(雄心勃々たる同志) 傳十郎初め仁三郎と稱し、其の生家番ならずと雖も、幕府の小人目付松田傳十郎に養はれ、父の職を承けて同じく小人目付たり。寛政十一年幕府北邊經營の爭起るに及び(此頃樺太は何處の領地か國籍不明であつた) 自ら進んで用船德政丸を督して北地に赴き(彼も亦快男子) 累進松前奉行支配調役下役元締となり、宗谷に在勤せる時、倫宗と共に樺太探檢の命を受けたり。(好伴侶) 二人樺太の南西岸白主に至り、相約して東西に別れ、傳十郎は西岸に沿ひ、倫宗は東岸を進む。傳十郎北航してトンナイ・ホロコタン・ナヨロ・ライチシカを過ぎ、之より我が國人未だ足跡を印せざる境を進み、遂にヲチッシ・ノテイ(現今のテイック)を經てナッコ岬即ちラッカ(北緯五一度五十五分、海圖のボウチン或はリヤック角)

に達し、黑龍江河口地方を遠望して略樺太・韃靼地方の彊境を稽へ、樺太の離島なるを確む。倫宗東岸を進み五月二十一日知床岬に至り、六月四日マアヌエより半島の頸部を越えて西岸クシュンナイに出で北航してノテトに至り、二十二日遂にナッコ岬に達し、傳十郎と會する事を得たり。(二人の喜びが察せられる) 是に於て相議して歸途に就き、閏六月二十日宗谷に歸着、復命する所あり。倫宗此の行に於て東海岸知床以北を探らざりしを以て自ら滿足する能はず(探險家氣質) 更に第二回踏査の命を受け、決然として單身再征の途に上れり(其の意氣思ふべし) 即ち同年の秋七月宗谷を發して白主に達し、繼に土人を傭ひ、西岸トッシコカウに到りしも、土人進む事を肯ぜざるを以て、海面の結氷を待ちて進まんと欲し、トンナイに越年し、翌文化六年正月發程、四月ノテトに達し、更に進んでナニヲー(北緯約五十三度餘)に着せしも、隨從せる土人等食に乏しく、異種族の危害を怖れて歸心矢の如く、且つ脆弱なる夷船航行に堪へざるを以て、退きてノテトに還り、土人を解傭し、調査報告及び後事を記する書を托して白主に歸らしめ、決死東韃靼踏査の壯擧を企て、夷人の家に寄寓し、其の朝貢の爲に滿洲に渡航する日を待てり。(苦心の程が思はれる) 同年七月二日遂に夷七人と共に輕舸に乘じ、海峡最狹部を横斷し、デ・カストリー灣の北に上陸して陸上船を運びてキチー湖を渡り、マリインスク附近のキチー部落に至りて初めて黑龍江に達し、之を溯航すること二十里許にして七月十一日滿洲官吏の出張所たる德楞に至り、清官人と會し、滯留すること數日、具に地勢・風俗を察し、十七日歸途に就き、黑龍江を下りて注海の境を確め、八月七日ラッカ岬に歸着せり。此の行月を閱すること十五、深く不毛の境に入りて風濤瘴煙を冒し、且つ屢々異人種の爲に危害を蒙らんとして具に辛酸を嘗む。(征行の苦想ふべきである) 抑々我が國人の倫宗に先だち樺太を探檢するもの天明に二石某、寛政に

高橋某・最上德内、享和に中村意積・高橋一貫等ありと雖も、未だ奥地を確めたるもの無し。又樺太に關する知識も林子平・近藤守重等の如き半島說若くは歐人のサハリン島を以て別視するが如き謬見を有せしに過ぎず。又西人にして測量せるものデ、フリース・ラ、ベルーズ・ブロートン・クルーゼンステルン等ありと雖も、彼等亦其の島嶼・半島兩說に就き疑惑の裡に在りしなり。此の時に方りて倫宗の初めて樺太境域を確めて先人の蒙を啓き、且つ韃靼海峽を發見せし偉績は實に大なりと言ふべし。其の芳名を間宮海峽に留め、尙明治三十七年聖恩枯骨に及んで正五位を贈られたるは寔に故ありと言ふべし。倫宗此の功を以て文化八年四月松前奉行支配調役下役格に昇り、三十俵・三人扶持を給せらる。松前奉行廢せらるゝに及んで普請役を命ぜられ、文政十一年、代官柑木兵五郎に隨行して伊豆國島を見分し、又專ら幕府の耳目と成りて密偵に從事せり。天保四年多年の勤功を賞して足高二十俵を給せらる。然も其の晩年は勃々たる氣魄尙存し、老驥空しく櫪槽の間に伏する慨ありと雖も、文政以降外事ゝく小康を得たるを以て、其の器材を再び發揚する機なく、寧ろ不遇の間に在りしが如し。弘化元年二月二十六日六十五歲を以て深川蛤町の僑居に歿す。著す所東韃紀行・北蝦夷圖說あり。倫宗終生娶らず、幕府有司請ひて嗣を立て、其の後今尙存すと言ふ。

間題の間宮海峽は樺太島とシベリア大陸間の海峽、但し其の南部は日本海との境界線極めて漠然、狹義の間宮海峽はサガレンのゴロヴァチェフ岬以南とイク岬迄の間の南北水道と見るべく、ポゴビに於ては海峽五粁に狹まる。廣義の解釋としては珠戸寒司岬から沿海州インペラートルスカヤ灣東南の岬角に引いた一線以北を以てすべく、從つて亶岡・本斗兩町の如きは日本海岸の港市と成る。廣義の解釋に依る海峽延長約五二〇粁、水深は最狹部に於て約二〇乃至五〇米、日ソ國境線西方に於て一〇〇米を越え、日本海部に於て急に

一、〇〇〇米以上の深度に到達。リマン海流が海峽を南下する爲に沿岸到る所に結氷を見る。樺太が島嶼なる事に斷案を下したのは、文化五年から六年に掛けて韃靼取調の目的で此の海峽を精査した間宮林藏である事は前既に言ふ如くである。西洋人で此の海峽の存在を知つたのは、林藏より後れて露人ネヴェルスキーが一八四九年に於てゞあつた。

指導形態

指導上の認識點

1 間宮林藏が凡ゆる困難と戰ひ、前後二回遂に樺太が島なる事、及び對岸大陸の形勢を探檢し世界の疑問を解決した功績に對して深く感ぜしめる。

2 地圖と照合して文を讀解する能力を養ひ、且つ字書や參考書類を考覈し事歷の眞相・事態の核心を攝む修練に資するは本課の形式的方面に於ける指標である。

3 林藏の不屈不撓の精神と愛國進取の意氣と熱情に傾倒せしめると共に、幕末多難の際に於ける北地の形勢や事情を審にし、我が生命線の擁護と北門警備の一日も忽にすべからざる所以を知らしめるは本課の內容方面に於ける關心事である。

4 前課の〝我は海の子〟を前奏曲とし、本課に於いて世界的發展の氣風を作興し國土に對する認識を深め、次課の〝樺太の旅〟に於ける一種の殖民地氣分や國境線に立つ感懷等を後奏曲とし、玆に北方我が生命線に於ける三部曲の完成を見る配材の妙致を閑却してはならぬ。本課は卽ち其の中核である。

5 如上の趣旨に基き本課は大體四時間見當で指導を完了する樣立案するのが妥當であらう

第一次指導

1　題題目の指導

▽九十四頁の挿畫を一瞥させ疑問符を附した儘直に全課の通讀に入るが良い。

2　自由學習

▽ゆつくり時間を與へ第一印象・感想・不明の箇所等は纒めて記帳させて置く。

3　不明の箇所を質問させる。

▽新出文字は字書を輔導して其の都度索引させる。

疑解　狀留　遠縁　險　欲　親
易　伴　怪　酒　强　更

▽難語句は先づ類推させてから指導する。

大陸　疑問　實地　探檢　解決　幕府
ほゞ　心に滿たざるもの　單身　名狀す
べからず　越年　一小部落　潮水　絶緣
確實　一周　志し　從者　酋長　危險
時機　點在　對岸　志　交易　おのれ
伴なはん　怪しまれ　同行　記錄　一切
うづくまり　雨露をしのぐ　酒食　心を
はかりかね　强ひて　目的地　支那官吏

4　指名讀。

▽適宜に句切つて、輪讀式に。

5　文の荒筋を摑ませる。

▽摑んだ梗概は簡單に記帳させて置く。

6　話合。

▽讀後の印象や所感を中心に。

7　文意の把握。

▽靜かに默讀させて。

8　範讀。

▽文の觀點に注意させて。

9　低音讀。

▽文意に即し探檢の困難さを偲ばせて。

10　ノートを纒めて提出させる。

出張所　賈物　もてあそばる　事情

▽個有名詞は引離して入念に指導する。

樺太　間宮林蔵　文化五年　松田傳十郎
白主　トッショカウ　トンナイ　ノテト
ナニヲー　コーニ（人名）　間宮海峽　デ
カストリー灣　黑龍江岸　キチー　デレ
ン

1　一度靜かに通讀させる。

2　輪讀。

▽一句切づゝ、座席順に。

樺太〔島なりや〕〔大陸の一部なりや〕疑問 → 間宮林蔵 探檢して解決

（一）文化五年四月〔第一回探檢　松田傳十郎と共に〕〔ほゝ島なること（心に滿たず）〕

（二）同年七月　單身

（一）白主（南端）— 土人と

（困難）

トッショカウ → トンナイ（越年）

ノテト（四月）

ナニヲー（北端・土人の家五六）

〔以南—潮水南に（波靜か）〕〔以北—潮水北に（波荒し）〕〔樺太〕〔大陸〕絶緣

確實

同年九月

3　話合。

▽文意や感想を中心に。

4　逐次研究。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し各自のノートと對照させる。

（2）樺太の海岸を一周せんと——

- 以北 波荒く）
- ナニオ—東岸（危険）
- ノテト → 土人語る 樺太は島

3、對岸大陸の探檢

- コーニ—交易のため大陸に
- 一命も危からん。』
- （ヽ）
- ◎林蔵—途に同行
- 記錄一切を從者に（日本の役所へ）

（2）文化六年六月の末（一行八人）

- ノテト
- 間宮海峽
- 海
- 黑龍江
- （小舟に乘じて）
- デカストリー灣（上陸）
- 山を越え
- 河を下り
- 湖を渡り
- 山さしかゝれば舟を引き
- 野宿（木の枝 木の皮）

- を下り
- 歸途
- キチー（黑龍江岸）
- 土人の家→珍しがり
- 多數（或は抱き・或はふところを探る）
- 酒食（强ひてもかへりみず）
- 河をさかのぼる）
- デレン 支那官吏の出張所（貢物 交易）（七日間）
- 林蔵 怪しみもてあそばる
- 其の地の事情を研究
- 怠らざりき

（3）林蔵が二回の探檢により

- 樺太が島なること
- 對岸大陸の事情も
- 明らかに

5 グループ學習。
▽グループに分れ配付した文圖を中心に問題を作製して研究させる。

6 話合。
▽文の觀點を中心に。

7 默讀。
▽文意の所在を確め把捉した文意を反省させる。

8 文意の檢證。
▽前項の文意を表現面に卽して例證させる。

9 範讀。
▽文の要所に力を込めて。

10 低音讀。
▽文意を確認させる意味で。

11 ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

1 指名讀。

▽中・劣生を主として。

2 會讀。
▽グループ毎に問題を作製させて。

3 範讀。
▽文語の持味と其の韻調美に注意させて。

4 朗讀練習。

5 譯讀。
▽至難の箇所を選び特に文語の語尾の變化に注意させて。

6 對譯練習。
▽難句を摘出し文語を口語に、口語を文語に。

7 演習。
▽說明入の探檢地圖を作製させる。

8 話方練習。
▽作製した地圖を前にし、探檢の道筋や行路の至難さを表情的に、且つ模寫的に。

9 全課の暗誦・暗寫。
▽兒童の程度に依つては部分的に。

10 學習事項の整理。
▽內容・形式の兩面に亙つて。

11 補充說話
▽北海道と連絡させ千島交換其の他に就いて。

12 新出文字の書取。

13 語句の應用練習。

14 テスト

テスト問題

一、次の文を口語に直しなさい。

1 樺太は島なりや、又大陸の一部なりや、世界の人の久しく疑問とする所なりしが、其の實地を探檢してこれが解決を與へたるは、實に我が間宮林藏なり。

2 顏形の異なる君、若し彼地に行かば、人に怪しまれ、或は一命も危からん。

3 やがて酒食を出したれども、林藏、彼等の心をはかりかねてかへりみず。

4 かゝる中にありても、彼は其の地の事情を研究することを怠らざりき。

5 林藏が二回の探檢によりて、樺太が島なること明らかになりしのみならず、其の對岸大陸の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

二、次の漢字を上に使つて熟語を作りなさい。

疑　解　探　確　交
越　貢　歸　酒　絕

三、次の語句を組合せてまとまつた文を拵へなさい。

1 林藏　其の地を　對岸大陸に入りて
探檢する　新たに　志を起せり
2 我若し　日本の役所に　死したりと聞かば
必ず　彼の地にて　これを白主に持歸りて
差出すべし　汝

第十七　樺太の旅

曩に第十四で北海道を說き、前課に樺太探檢の恩人間宮林藏を稱へ、本課に樺太の現狀を語つて、玆にも北地の三部作が完成されるわけである。

（一）大　泊

北海道稚內から連絡船で九十浬の海を渡れば、約八時間にして樺太の大玄關大泊である。露領時代はコルサコフスキーと呼はれ樺太第一の町であつたが、當時と今とは全く面目一新し、昭和二年に完成した大泊築港には三千噸級の船が其の儘横付に成ると言ふ。

僅か二頁足らずの間に大泊の第一印象を巧みに描き出し、特に新興の意氣に燃立つ此の町の面貌を躍如たらしめた邊りに作者の手腕の程が窺はれる。

（二）豊　原

大泊から鐵路四二粁、樺太の首都豊原は昭和十二年七月一日市制實施と成つたばかり、勿論樺太第一の都で露領時代にはウラヂミロフカと稱し、人口漸く三四千に過ぎなかつたものが、大正九年には一萬二千、昭和五年には三萬　千六百、最近では無慮四萬を越えると言ふ發展振である。東洋第一の王子製紙工場では內地の需要とする洋紙原料の大部分が玆から產出すると言ふ、當地第一の名物を作者も特に力を込めて紹介に努めて居る。

鈴谷川の對岸追分の白系露人部落も異色である。彼等は日本人とも仲が好く、橇の馭者として赤い頰面をニコ／＼させて客を迎へるのも懷かしいものだと言ふ。午後の八時にまだ新聞が讀めるなぞ、鄕土異色の巧な狙ひ所であらう。

（三）養　狐　場

養狐業は千島と樺太が最適地とされ、總計二百數十ヶ所、中でも豊原市外小沼の養狐場が最も名高い。西曆一八八七年（明治二十年）加奈陀の一毛皮商が養狐業を開始して以來、防寒用具としての狐の毛皮の需要は全世界に廣まり、我が農林省でも大いに之を奬勵し、北地產業の興隆に努めて居る。樺太の如き寒地で養はれた狐は嚴寒を目衞する必要上、自然と稠密な毛の成長を促す爲、寒地が選ばれる理だと言ふ。北方寒地特有の產業の一つを語つて、內地の兒童には特に興味が深いであらう。狐に化かされた迷信は昔の事、今では人の爲死して千金の皮を殘す、愛すべき狐ではある。作者も特に其の意味を暗示し、"小沼一帶が狐で立つてゐるのださうだ"と附加へて居る。

（四）海　豹　島

樺太の北知床半島から東北へ海上一〇浬の我が海豹島は、ベーリング海の米領プリビロッ諸島及びカムチャッカ半島の東部露領コンマンドルスキー群島と共に、膃肭臍の世界三大繁殖地として有名である。此の天下の奇觀を兒童に紹介するのも興味百パーセントであらう。

毎年六月頃から此の島に來遊する約三萬頭の膃肭臍は、九月頃に成ると遠く南方の海洋に去ると言ふが、其の間に膃肭臍が分娩の爲殘した汚物を好餌とするロッペン鳥（鷗の一種）が約三十萬を越えると言ふ。日

本領と成つてからは一般の獵獲が禁じられ、明治四十五年から毎年官營獵獲に依り約千五百頭の膃肭臍が捕獲され、其の毛皮は耐久力が強くて外套の裏や襟卷に珍重される。初め露領から　本領に成つた當時、海豹島の膃肭臍は僅に一千頭内外で有つたのが、其の後我が官憲の保護に依り年々增加し現在の數に達したので有つて、此の大群が來島するのは生殖の爲であり、一頭の牡が二三十乃至五十頭の牝を迎へて各牡獸間に猛烈な爭鬪が演じられ、時としては一頭の牝の奪合の爲、牝の身體が無慙にも引裂かれる事すらあると言ふ。勿論本課の作者も其處迄は觸れなかつた樣に、兒童には何の爲來島するか、餘り深入は禁物であらう。

（五）國　境

明治四十年九月、樺太國境の劃定を終つた當時を回顧し感慨無量では有るまいか。元來樺太國境を北緯五十度と定めたのは維新前既に德川幕府が主張した所で有つたが、我が軟弱外交の故と明治維新の多事に追はれ、後藤象次郎の寶收主張もお流れと成り、明治八年樺太・千島交換條約が成立し、爾來三十餘年、日露戰役の結果、其の復活を見た事を思へば、國境線に立つて今更の如く感慨新たなものが有らう。作者は言はず語らず、此の國境標の邊りに言外の謎を殘し簡潔に筆を收めて居る。

挿畫の印象と其の說明

第百頁の寫眞版は樺太の表玄關、大泊の岸壁に、三千噸級の大汽船が横附に成つた所を撮影されて居る。恐らく稚泊連絡船であらう。右側の高い建物は大泊の稅關、貨物の出入・船客の待合・接待・乃至は食堂、其の他港灣事務の一切を處理する所で、此の埠頭は海中に突堤を成して居り、岩壁の兩側に船が着く樣便利

に出來て居る。近景の低い屋根は稅關附屬の荷物倉庫で、パルプ其の他樺太の主要物貨がぎつしり山積して居る。

百二頁の寫眞版は豐原市旭ヶ岡に鎭座の官幣大社樺太神社の二の大鳥居から參詣道を見下した景觀である。社は大國魂命・大己貴命・少彦名命を合せ祀られ、樺太鎭護の神として全土の信仰を集めて居る。鳥居の下に長く續く參詣道は本文にもある白い御影石の石段で、驅線豐原驛から眞東へ三粁、社頭の頂上に登り詰めれば、眼下に井然と碁盤目を成す豐原市街を俯瞰する事が出來る。

百四頁の寫眞は豐原市外小沼の養狐場で、金網を廻らした外圍・內圍の二重の圍が築かれ、白い扉が飼育者の出入口である。內部に在る犬小屋の樣なのが狐の巢で、大仕掛な經營振が窺ひ知られよう。飽性の狐には獸魚肉や野菜・穀類・骨粉等を適當に交ぜ與へねば、同じ食物では直ぐ飽きて食べようとしない贅澤さである。又猜疑心が深くて不斷狐に馴染んだ飼育者で無くては側へ近寄る事も出來ないと言ふ。從つて人里離れた閑靜な別天地が選ばれるわけである。

百五頁の寫眞は世界的一大奇觀、海豹島の一部を撮つたもので、圖中群を拔いて大きく見えるのが多妻主義の牡獸で、多くの牝を擁して居る處であるが、生殖に關係した事は一切遠慮せねばなるまい。受胎した牝獸は砂地を掘つて分娩する。其の分娩後の汚物を好餌として大擧して押寄せたのが、百六頁のロッペン島の大群である。露領時代には此の島をロッペン島と呼ばれた程であつた。ロッペン鳥も又此の島に產卵して繁殖するから、產卵期には岩の間砂の間に累々たる卵が見られると言ふ。島はテーブル狀の地卓を成し、東方に砂濱ある。畫面は卽ち其の砂濱（百五頁）と其を取卷く岩礁（百六頁）である。

文字語句

新出文字

薬　穂　標

讀替文字

豊（新出は卷六、ホウ）　井（新出は卷五、キ）　訪（新出は本卷、トフ）

居（新出は卷五、キ）　獣（新出は卷五、ケモノ）　伐（新出は卷七、バツ）

裏（新出は卷六、ウラ）

語句と其の解説

大泊　大泊は亞庭灣頭に位する樺太第一の要港で、北海道稚内（ワッカナイ）間に稚泊連絡船が通つて内地から樺太に渡る關門を成して居る。汽船が岩壁に横づけされると、臨港鐵道は直に大泊港驛から發して市街に向ふ。稚内・大泊間は海上九十浬、定期連絡船が一日二回づゝ往復し、夏季は七時間冬季は八時間で樂々と渡海が出來る。此の航路が閉ける迄は、主として小樽から長い海路と、殊に冬季の高い

大泊港の全景

波浪とに悩まされて居た。北國の寂寥さの中に新鋭の氣を漲らせた樺太の門戸で、長い冬に閉される頃の流氷や碎氷船の活動には一層旅愁を唆られるものがある。

鵜岡　西海岸に於ける漁業の中心地、西海岸鐵道の要衝、殊に本島唯一の不凍港として急激に開け、一時は大泊を凌駕する勢であつたが、其の後鯡漁の不況・蟹工船の發達・鐵道に依る交通系統の變化等に依つて多少衰勢を示すに至つた。然し尙艦内第三の都としての地位を保ち、海上から見れば人家櫛比して白壁も多く、丘上に迄擴がつて美しい港風景を與へる。此の港は一月頃平磯の淺瀨に結氷を見るが、船舶の出入には妨げない。

亦斗　樺太西南部の不凍港。領有當時は僅に一漁業聚落に過ぎなかつたが、大正五年沖合の長瀨と稱する岩礁を利用して築港計畫を立て近時完成。海馬島水産物の集散盛。且つ背後に林産地を控へ、最近開發の内幌炭山にも近く、頗る有望視される。樺太廳鐵道西海岸線の起點で内幌炭山・南樺太炭礦鐵道を通ずる。人口一一、三三八。

神樂岡　大泊市の北方臺地上にある。市街に圍まれた廣い丘陵地で市街を眼下に眺め、亞庭灣一帶の風光に接する事が出來る。亞庭神社・明照寺・表忠碑等が有つて、北面の楠溪町と共に樺太開拓者の事蹟を偲ばせる。

依仁親王　東伏見宮。慶應三年九月十九日御誕生。九歳にして海軍兵學寮へ通學。明治十七年英國へ留學。十九年四月明治天皇の御養子、親王宣下。同二十年七月佛國へ轉學、ツール市中學校へ入校。同二十一年十月四日ブレスト海軍兵學校へ御入學。同二十三年卒業、海軍少尉、佛國艦隊に乘艦。同二十四年歸朝。高千穗、次で浪速分隊士。同二十六年歐米へ差遣。同二十七年歸朝、大尉。浪速分隊長として日清戰役從軍。同三十一年公爵岩倉具定第一女周子（明治九年誕生）と御結婚。同三十六年中佐。千歳副長として日露戰役從軍（本課

は其際の御武勳）千代田・高千穗・春日の各艦長を經、同四十二年少將。同四十四年英國皇帝戴冠式に差遣。東郷・乃木兩大將隨行。同年横須賀豫備艦隊司令官。大正二年中將。同五年横須賀鎭守府司令長官。同七年大將。英國皇帝へ元帥刀贈進の爲差遣。同十一年元帥。同年六月二十七日薨去、御年五十六。

軍艦千歳（グンカンチトセ） 二等巡洋艦。四、八三六噸。速力二二・五ノット。八吋砲二、四・七吋砲一〇。當時は高砂・笠置・吉野と共に第一艦隊第三戰隊に屬す。日本海々戰の際は笠置・新高・音羽と共に同じく第三戰隊として活躍した。

敵艦ノーウィック（テキカン） 旅順の第一艦隊所屬で、バルチック艦隊では無い。此の海戰は八月十日（三十七年）の黃海々戰で、巡洋艦ノーウィックは一度膠州灣に入り、日本の南方を迂曲して浦鹽に逃げる途中、我が艦隊に追擊され、樺太のエンヅマ崎で擱座して對馬の爲に擊沈された。黃海々戰の戰果は此の外に驅逐艦ブィヌィは山東高角附近に擱座、旗艦ツェザレウィッチと驅逐艦三隻は膠州灣に逃げ込み、ドイツ官憲に依り武裝を解除され、巡洋艦アスコリド・驅逐艦グロゾウオイは上海へ、同じく巡洋艦ヂヤィナは遠くサイゴンへ遁走した。

亞庭灣（ノハハリン） 能登呂半島と知床半島とに依つて抱かれる灣。大泊は此の亞庭灣の奥、千歳灣頭に在る。

紺碧（コンペキ） 黑ずんだ靑い色。眞つ靑。

圖（ヅ） る。ぐあ。繪畫。地圖。圖形。又は考へ通り。思ふつぼ。心算等の意もあるが、此處の圖は眺め。眺望の意に解するが良い。

能登呂岬（ノトロミサキ） 能登呂半島の突角。此の半島は西樺太山脈の餘波を脊梁に有つ二等邊三角狀を爲し、西側に能登呂炭田があり、最南端には火山岩噴出、位置南に在る爲河川の流域は農耕に適する。沿岸一帶は鮭・鱒・蟹等の豐漁場。

豐原（トヨハラ） 樺太南部、鈴谷平原中央部に位する樺太の首邑。鈴谷川に沿ひ、經濟・交通上優越的位置を占め、樺太廳及び豐原

支廳の所在地。市街は道幅廣く然も街路井然。周圍に防風林が營まれる。官幣大社樺太神宮は東部の旭丘上に鎭座、全島の鎭護社である。附近は冬期絶好のスキー場となる。驛に近い樺太廳博物館には本島特產品其の他多數の參考品を陳列。町の北部には王子製紙會社の分工場があり、主としてパルプと包裝紙を生產する。露領時代にはウラジミロフカと稱し、當時露人の丸太小屋は今尙新市街の北方約一粁の舊市街地に殘る。樺太廳鐵道東海岸線の一驛で、表玄關大泊から四一・六粁、西部海岸へ豐眞線を分岐する。人口三三、四七四。

井然（セイゼン） 物事の規則正しいさま。正しく整つて居るさま。井々。整然。

なゝかまど 七竈。薔薇科に屬する落葉灌木。オヤマザンセウとも言ふ。我が國到る所の山地の灌木帶に生ず。幹の高さ一〇米、直徑三〇糎に達するものがある。葉は互生し奇數羽狀複葉を成す。五六月の頃（內地）枝梢の葉腋に聚繖花序をつく。花梗及び萼に軟絨毛あり、花瓣は白色にして五箇あり。雄蕊は花瓣と同長又は少しく長し。果實は九月頃（內地）に成熟し紅色を呈す。材質緻密堅硬且つ强靭なれば種々の用に供せらる。されど薪材としては燃え難い。ナヽカマドなる名は炭燒が七竈に入れるも尙炭と成らぬの意なりと言ふ。

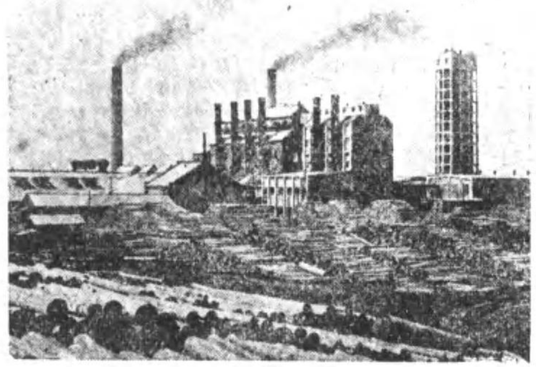
樺太神社（カフフトシンシヤ） 官幣大社。豐原町旭ケ岡に在る。鈴谷平野一帶を展望する北邊鎭護の聖地。祭神は大國魂命・大己貴命・少彦名命。明治四十三年七月創立、竝に列格。同町縣社豐原神社の境內に頓宮が有つて例祭には神幸がある。例祭は八月二十三日。

パルプ工場（コウヂヤウ） 王子製紙會社の分工場で、町の北部に在る。森林國樺太は製紙原料の寶庫であるから、製紙會社が活躍して居るのは當然である。其の主なるものは王子製紙株式會社及び富士製紙株式會社であつて、王子製紙は大正三年十二月に大泊工場を建て、同六年一月に豐原工場、同十年十一月に野

田町工場を設けた。之は其の製原工場である。

パルプ　木材・藁・靱皮其の他の纖維原料から紙の原料として適當なる狀態に分離した纖維を言ふ。故に別名を紙料とも言ふ。木パルプ・藁パルプ・靱皮パルプの如く原料に依つて分類し、又木パルプは更にパルプ製造法に依り亞硫酸パルプ・ソータパルプ・硫酸鹽パルプ・碎木パルプ等に分類する。一般に厚紙の形に作られて居る。

パルプの原料　樺太材の利用に就ては、領有後直に夫々の專門家に依つて研究が行はれた。明治四十三年には樺太廳に臨時工業調査所が設けられ、大泊に附屬工場を設置して松脂からテレビン油製造・樟腦製造・木材乾餾・割箸製造パルプ製造等の試驗研究を成し、一方製原には其の翌年乾餾工場を設け、濶葉樹材を乾餾して醋酸石灰・木精タールを製造し、副產物として木炭を製出した。乾餾工場は大正六年大倉組に拂下げ、其の經營を續行せしめたが、成績思はしからず、其の後間もなく閉鎖するの止むなきに至つた。斯くて種々調査研究の結果、針葉樹特に椴松（トドマツ）蝦夷松は建築材・鐵道用材等の外、製紙原料たるパルプ製造用に供するのが最も得策である事が分り、玆に其の奬勵に着手したのである。然し其の當初は我が國に於けるパルプ業は頗る不振幼稚であり、又樺太の事情が一般に知悉されて居なかつたので、



王子製紙豐原工場

勞力の缺乏・冬季操業の不安等に脅威を感じ、有利な條件・特種の保護あるに拘らず企業者の意を惹かなかつたが、漸次具體的調査が進むに從ひ、遂に大正二年に至つて初めて大泊と泊居（トマリヲロ）の二箇所に、一は王子製紙株式會社・他は樺太工業株式會社の手に依り工場が設置される事と成り、何れも翌三年から操業を開始するに至つた。之が本島に於けるパルプ工業の濫觴で、時恰も歐洲大戰に際會しパルプの輸入杜絶した計りでなく、却つて逆輸出の狀態に在つたので、斯業は頗る順調なる發達を遂げ、續々工場の擴張增設相踵ぎ現在では遂に全島を通じて十數工場の多きを數へるに至つた。然も今日本邦で使用する新聞・雜誌の用紙、其の他半紙・包裝紙の殆ど全部は本島工場若しくは本島木材に依り直接間接供給されるの盛況にあり、玆に本邦に於けるパルプ及製紙の完全なる自給自足を完成するに至つた。

工程（コウテイ）　仕事のはかどり。仕事の順序。　作業過程。

露人部落（ロジンブラク）　新市街の北方約一粁の舊市街地に在る。丸太小屋の寒地を思はせる粗末な家で、異國情調を漂はして

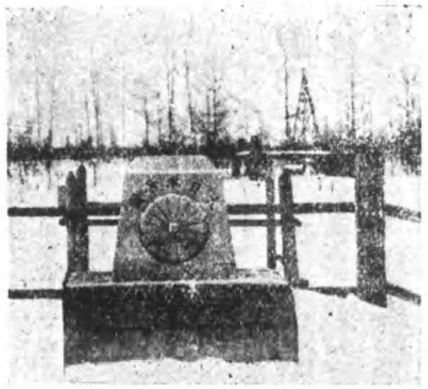
露人部落

居る。殘留露人は現在諸所に散在して居るが、彼等の得意な丸太組の家屋は到る所に殘されて居る。それらは現在日本人が大半占領して住舞つて居るが、伺豐原・大谷附近や國境近くには農牧に從事したりステーションのパン賣や牛乳賣をやつて居る。　**養狐場**　養狐場は人家を離れた閑靜にして、且つ高燥な針濶混淆林地を適當とする。然も飼料の關係上海濱附近を最適とするから此の條件を具備した地を選ぶ。豐原市外の小沼村は之に適し、數百頭の銀黑狐を飼養する中央試驗場の外に大規模の東洋養狐會社があり、大泊の郊外及貝塚村にも更に大仕掛の養狐場がある。　**小沼**　豐原支廳管内豐北村の主邑。樺太廳中央試驗場あり、場内一二六萬坪、廣く樺太農畜林水產の試驗調査を行ふ。小沼部落には殘留露人點在し、又養狐場の外に養鯉場もある。樺太廳鐵道東海岸線の一驛で、川上線の分岐點。人口約三千。　**燕麥**　からすむぎ。禾本科雀麥（チヤヒキ）族の一年生草本。大麥に似て葉は細長くして尖り、花は二箇宛集合して小穗を成し、内一箇は芒を具ふ。小穗は又多數集りて圓錐花序に排列し、五月頃帶黃綠色を呈する。果實は食料とする地方もある。舊世界の原產であるが廣く栽培され、牧草として佳良。あらむぎ・おおとむぎ・こうぼふむぎ・まからすむぎ等の名がある。　**穗淚**　稻や麥等の穗の波の打つ樣に風に戰ぐこと。又其の穗。　**黑や黃色の狐が**　養狐事業は大正四年に廳の種畜場廳内の農・畜・林・水產の試驗調査を行ふ。　**中央試驗場**　樺太廳中央試驗場。で試驗的に飼養したのが始まりで、爾來島内各地に飼養者が增加した。其の最も大規模のものは中央試驗場の養狐場と東洋養狐會社の狐舍で、本課は卽ち其の情景である。狐舍は金網を四方に張り廻らした中にある。狐は文字通りに驚怖心や猜疑心が强い爲、管理人は相當の經驗を有し、動物の習性を

熟知する要がある。熟達せる管理人は一人で約五十個を管理する事が出來、飼料は魚肉・獸肉を主とし根菜類・麥粉・骨粉・果實等を適宜に與へる。此の狐舍からは嘗て其の鳴聲を放送した事があるから、内地の人々の記憶に新なものが有るであらう。　**海豹**　我が國唯一の膃肭臍蕃殖場として、本島に來る程の者は直ぐ聞かされる有名な島である。散江（チリエ）から東南に向つて細長く延びた北知床半島の突端から海上一〇浬、呼べば答へん計りの距離に在る。敷香（シスカ）からは海路八〇浬、夏期は毎月一回位の便船があり、又臨時團體視察船も出て居る。此の島は南北に長く、長さ七〇〇米、幅七〇米、水面上僅に一〇米餘を露すに過ぎぬ嶮爾たる一島嶼で、寧ろ山礁と言つた方が適當かも知れない。全島第三紀岩層から成り島頂は平坦でテーブル狀の地卓を成し、東方には砂濱がある。恐らく北知床半島の連鎖で海蝕に依り離島と成つたものであらう。露領時代には之をロッペン島と呼んで居た。蓋しロッペンとは鴎の一種で、常に膃肭臍と共生狀態にあるロッペン鳥が無數に集合して飛翔亂舞するが故であらう。海豹島はベーリング海の米領プリビロツ群島・カムチャツカ半島東部の露領コマンドルスキー群島と共に膃肭臍の世界三大蕃殖地の一で、年々來游上陸するもの數萬頭に達して居る。彼等は主として其の東岸の砂濱水際に近い砂上に群居し、牡獸は頭を擧げて咆哮し數頭・數十頭の牝獸は其の周邊を圍繞し、唯之れ爭鬪・弱肉强食を以て多妻主義を發揮すると共に、母獸は仔獸を分娩し之を哺育して游泳に馴れしめ、斯くて一夏を過すを常とするが、秋季寒冷の候と成ると遠く南方の海洋に去り、再び翌夏玆に來ること燕と同樣である。鬪爭に破れ力及ばずして配偶者を得ざる牡獸は上陸し能はずして海上を彷徨し、仔獸は無邪氣に相戲れ匍匐する情景實に天下の奇觀であ

る。ロッペン島は臘鮏臍分娩の汚物を好餌として又茲に簇り、其の產卵は累々として堆く、羽音騷がしく天空を亂舞して居る。露領時代には臘鮏臍獵業者の激增したのと保護の行き屆かなかつた爲一時は非常に減少したが、我が領有後は直に獵獲を禁止し、尋いで之が蕃殖狀態を調査し、明治三十九年からは年々監視員を駐在せしめ、其の蕃殖保護に努めて居るので、漸次舊態に復して來た。此の奇觀を見物するには裏側の西海岸に上陸し崖上の監視所樓上から瞰下するが良い。**おつとせい**　臘鮏臍・又うにう・水鳥龍・海狗とも言ふ。食肉目の哺乳類。樺太の海豹島・千島・コンマンドル・プリビルフ等に分布。牡は二米、牝は一米の體長に達し、頭は廣く、且つ丸い。荒い毳がある。四肢共に短小、鰭狀を呈し、游泳と步行に役立つ。趾は內方のもの程大きく、外方のは小。後肢は後退する時揖に成るが、趾は殆ど等長。齒は三六本、同齒性に向つての變形は餘り顯れて居ない。成長したものでは毛皮は暗褐色で、下部は淡い。殆ど常に海棲・睡眠も海上に仰臥或は斜臥して採る。食物は主に魚類・いか。棲息地では各成牡を中心として一牡數十牝から出來た采邑を作る。秋千葉縣犬吠岬沖合及び朝鮮東岸に避寒の移動をするが、晩春北方に歸る。毛皮を主要な用途とするが、肉も亦有用美味。**ロッペン鳥**（ノウ）　海鳥。海豹島は臘鮏臍の蕃殖地であると共にロッペン鳥の棲息地である。之はロッペン鳥が臘鮏臍分娩の汚物を好餌とするからで、臘鮏臍群居の間に交つて飛翔し或は天空に亂舞して、其の數も亦驚くべきものがある。ロッペン鳥は海雀科のウミガラスで、此の鳥は臘鮏臍分娩の時胞衣を食ひ破る產婆役だといふ。南洋では水牛と白鷺が同棲して水牛の體にわく蟲を白鷺が食物として相互扶助をやるさうだが、ロッペン鳥と臘鮏臍にも何か相互關係があるに違ひない。ロッペン鳥の卵は青

と淡紅と白の三色あつて、大きさは鷄卵の二倍はある。然も鳥の大きさは鷄の半分か三分の一位であるから一寸意外である。ロッペン鳥は鴎からも鴉からも襲はれて折角抱いた卵を掠奪される事がある。監視員も遊覽客の土產或は御馳走に少量を採集するが、其の味は惡くない。此の時卵を失つたロッペン鳥は又直ぐに新しい卵を生む。但し一箇以上は決して產まないと言ふ。兎に角面白い鳥ではある。



日露國境標

國境線（コクキヤウセン）　樺太を南北に劃する五十度の境界線は地圖の上でこそ一條の線であるが、實際を見ては何等限るべきものも無く、山野と森林の連續であり唯其の間に點々として國境標が建てゝあるのみである。國境劃定の事業は頗る至難な事であつたが、日露兩國委員の協力と不斷の熱誠とに依つて明治三十九年から同四十年に亙り氣候の關係上、夫々夏から秋に掛けて働き、通計七箇月で完成を告げ、永しへに北門平和の保障を成すに至つた。境界標は北緯五〇度の國境線上の諸所に在つて、天測境界標・中間境界標・木標の三種がある。天測境界標は基本の地點四箇所に建設された。即ち東岸の鳴海・幌內川流域の境・星野・西岸の網干である。二米半の所から地固めを爲し、其の上に愛知縣岡崎產の花崗石で造つた將棋形の石標を建てた。國境標の南面には菊花御紋章を浮彫にし、其の上に〝大日本帝國〟其の下に〝境界〟の文字を彫り、北面ははロシヤ帝國の双頭の鷲章と、其の上下にロシヤ文字で上には〝ロシヤ〟下には〝一九〇

六年境界〃と刻み込んであつたが、ロシヤ革命に依り鷲は削り取られた。尙石標の東面には天測番號と年代とを二行に彫つてある。此の四箇の天測點を基礎とし、十七箇の中間境界點を主として山頂に陞いた。中間境界標は高さ一米餘で、ペトン層の上に嵌込み日本側には一號・二號と番號が書いてあり、ロシヤ側には1・2と數字が書いてある。其の他境界木標は〃日本境界標〃〃ロシヤベルチヤ〃と誌し黑い四角な木標である。之は年月と共に腐蝕するが、單に附近の住民に境界を布告する意味で作られたものである。

原始林（ザンシリン）　自然の儘で一迺も斧を入れぬ林。處女林。國境附近にはトドマツ、エゾマツ等が密林を成して居る。

指導精神

樺太はもと唐太と稱し、柯太・柄太とも記された。『北夷考證』に據ると樺太は〃唐人〃の轉訛したものだと言ふ。往古先住島人が我が宗谷に來り、久しく交易して居たので、江差・松前の商賈等は、是等の島夷をカラフトと呼び、延いては其の島をも同樣に呼び慣はすに至つたのだと解釋して居る。名稱の起源に就ては、此の外諸說紛々であるが、それは兎に角、本島は我が領土の極北に位し、オホツク海と日本海との間に介在して、西は一葦帶水僅に四浬の間宮海峽を隔てゝ沿海州に對し、北緯四十五度五十四分から五十四度二十分に亘り、蜿蜒として南北に延びること九六〇キロ、邦領樺太は其の南半で北緯五十度の一線を以て露領樺太と境し、延長四五五・六粁、東西幅員二七・五キロから一五七粁。其の面積九、一八五・五方粁で、九州より稍小さく臺灣より稍大きい。樺太全島の形は蝦（えび）に似たとも言ふが、又其の主產物である鮭・鱒にも似て、

赤蠣に酷似した北海道と共に極北の海洋に遊戈するが如き狀貌は寔に一奇と言ふべきである。本課は其の樺太紀行で思想的に前課と密接不離の連絡が保たれて居る。

樺太領有の跡を回顧すると、地理的にも、長期に亘つて日露兩國間に幾多の波瀾曲折を繰返して居る。我が國が此の地に初めて手を染めたのは、文祿二年豐臣秀吉が松前慶廣に對して蝦夷地統轄を公許したのを先驅として、寛永以後松前氏が樺太探檢施設を行つたのを最初とする。當時松前藩は白主・クシュンコタン（久春内）等に勤番所を設け、藩吏を派して保護取締に任ぜしめたが、國防警備等の施設は毫も無く、勤番の士も唯漁期中のみ在勤するに過ぎなかつた。然るに露國は當時既に其の傳統的政策として東方侵略を企て、屢々我が北門を窺つて野望を遂げんとしたので幕府も之と對抗し、數度に渉つて日露國境劃定の折衝を試みたのであるが、何れも彼我の主張に齟齬を來して纒まら無かつた。斯くて長期に亘り有耶無耶の中に幕府時代は過ぎ去つたが、漸く西曆一八七五年（明治八年）千島樺太交換條約が時の駐露公使榎本武揚の手に依り締結されたのである。然し露國の東方侵略は尙止まず、滿洲・朝鮮をも脅かさんとしたので、其の結果は遂に日露の交戰と成り、ポーツマス條約に依つて其の北半を露國に還付し、北緯五十度以南を我が領土として割讓させ、茲に過去二百年來國民の熱血を注いだ南樺太一帶は完全に我が皇化に浴するに至つた。

樺太の占領は明治三十八年七月、我が獨立第十三師團の手に依つたもので、占領後直に軍政署が設けられ、其の安寧秩序の回復を計つたが、僅々一箇月にして改めて民政署を置き、新版圖の組織的統治に當らしめた。之が今日に於ける樺太廳治の基礎を成したもので、樺太廳の設置されたのは二年後の明治四十年三月の事である。爾來今日に至る迄正に三十年、必ずしも短日月とは言へぬが、其の間行政・拓殖・土木・產業

教育等凡ゆる方面に亘り、治績大に上り、荒廢其の極にあつた占領當時に比し實に隔世の感が深い。今後尙施設の加ふべきもの、發展の策すべきもの頗る多いが、決して極北僻遠の寒土として等閑に附すべきで無い。殊に軍事的見地に於いて、千島・北海道と共に國防上重要な役割を演ずべき位置に在るに於ておやである。近時交通機關の異常な發達に伴ひ、內地・北海道及び樺太間の距離は著しく短縮され、東京・大泊間は僅々二晝夜足らずで行ける事に成つた。溫帶の優美溫雅な風光美に倦いた時、たつた二晝夜足らずの旅で我々は樺太へ行ける。其處には落葉松茂るツンドラ地帶、淸流を渡涉するトナカイの群、或は廣大な原野を點綴する幾多の新興市街が何れも物珍しく旅人の驚異と感激の眼を見張らせるであらう。夏も尙涼しい北緯五十度縱走の旅を是非敢行して、一度は本邦最北端の殖民地樺太を見學したが良い。尙樺太の特色は寧ろ北部地方に在るから、殆ど內地化して居る南部地方は扨置いて、首都豐原を訪ねた人々は更に一歩北部へと旅の延長を試みるが良い。それには廳鐵線落合驛を起點として、樺太東海岸を北方目掛けて縱走する樺太鐵道會社線と、其の終端驛南新問驛から連絡の乘合自動車に乘つて行けば、豐原から僅か二日乃至四日位の旅で情趣豊かな水鄕敷香町や、原始生活其の儘の土人部落や風光雄大な多來加湖、又トナカイの放牧地、沿道至る所森林美に富み歷史的にも地理的にも興味深い日露の國境標（半田澤）邊り迄（內路から二十八里・敷香から二十七里）其の全部又は一部を見極める事が出來る。遠山の雪を餘所に早春の名殘を福壽草に惜しみ乍らも、水芭蕉や金麗花が鮮かに水邊を彩り始めて來る六月頃から、樺鐵沿線一帶は九月頃迄夫々燎亂たるお花畠が殆然繪卷物の樣に車窓に繰り廣げられる。其の壯麗さは到底內地の旅では味へぬ特殊の境地だ。尙もう少し時日が許せば、珍奇な臘朋膏とロッペン島の群棲する海豹島に渡海すれば更に面白く、自然の偉大さに

感嘆するであらう。

本課は多趣多彩の新しい紀行文であるが、內容的には實業的色彩を多分に帶び、殖民地氣分を濃厚に漂はして居る。此の點前々課の北海道も同一構想で、叙事あり叙景あり說明あり、又地理あり理科あり實業あり、多種多樣・千紫萬紅の趣を見せて居る。蓋し前卷迄は個々獨立して一課を成して居たものを紀行文で統一しようとする新しい試みとして、正に一異色を見せた教材と言ふべきであらう。教材配置の上からは、前課と緊密な連繫あるは言ふ迄もない。

指導形態

指導上の認識點

1　三部曲の後奏曲、特に前課と密接の連絡がある。大泊・豐原の二都市と養狐場・海豹島それと國境の五篇から成り、大泊は門戶・豐原は主都として發展樺太の現狀を物語り、養狐場と海豹島に依り特異の地方色を描き、最後の國境に遊士の感懷を深からしめる。斯くて北門樺太の全貌を窺はせ、活躍日本の意氣と氣魂を思はせ邊に本課の潛意がある。

2　本課は全體的には樺太の氣候・產業・風土等を知らせた地理的教材であるが、此の紀行文が內含する小沼の養狐場は實業的教材の色彩を帶び、臘朋膏とロッペン島の海豹島は獨立した一箇の記事文たる風格を具へ、最後の國境は感想文の形を成して居る。斯く多樣の內容を紀行文に依つて統一した邊に本課の特異性がある。取扱も亦此の點に着目し、教材精神の徹底を念とすべきは勿論である。

3　指導に際しては前課と密接の連繫を保ち、皇國の發展性と氣候・風土・產業其の他の特

徴を多方的に考察させ、祖國愛護の熱情を培ふ事が大切である。

4　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽前課の略圖を契機に位置や地域の大體を知らせ、前課と關係附けて讀心を喚る。

2　自由學習。
▽不明の箇所は其の儘とし全課を一氣に通讀させる。

3　ノート作業。
▽一題目毎に讀後の印象や感想を記帳させる。

4　話合。
▽第一讀に於て得た印象や感想を自由に話させる。

5　不明の箇所を質問させる。
▽新出文字は字書の引方を教へ隨所に索引させる。

豐井藥訪穗居獸伐標
裏

▽難語句は先づ類推させてから適宜に指導する。

濃務　玄關口　中心地　活氣　にしん
漁期　武功　棧橋　巨船　ありさうな圖
眼を放てば　紺碧　所在地　耕地　井然
御影石　新鮮　打ちそよいで　製紙
パルプ工場　構内　原料　えぞまつ
とどまつ　丸太　藥品　工程　製紙工場
すかれる　養狐場　燕麥　穗波　荒野
中央試驗場　一巡　きよとん　尻尾
群居　岩頭　いつかな　エプロン　こつ
けいな委　無數　巨獸　幼獸　ものすご
い　一氣　おほひかくす　國境線　わび
しさ　朽ちた木樹　菊花の御紋章　大日
本帝國境界　刻した　石標　舊ロシアの
紋章　原始林

▽地名は地圖に就いて探がさせ、人物や物名は寫眞其の他を利用して入念に指導する。

大泊　眞岡　本斗　神樂岡　依仁親王
明治三十七八年戰役　軍艦千歳　敵艦ノ
ーウィック　亞庭灣　能登呂岬　樺太艇
豐原　しらかば　なゝかまど　パルプ
鈴谷川　露人部落　鈴谷平野　樺太神社
樺太山脈　小沼　海豹島　おつとせい
ロッペン鳥　オホーツク海

6　自由讀。
▽各場面の要點を書取らせる。

7　插畫の觀察。
▽順々に觀察させ、文に何う出て居るか其の箇所を書取らせる。
（1）百　頁　大泊。
（2）百二頁　豐原。
（3）百四頁　小沼の養狐場。
（4）百五頁　海豹島のおつとせい。
（5）百六頁　同ロッペン鳥。

8　插畫の不明な點を質問させる。
▽讀合せの兼ね簡單な解說を加へる。

9　地圖と照合させ大體の道順を調べさせる。

10　話方。
▽前項の道順に從つて讀取つた內容を話させて見る。

11　指名讀
▽一場面づゝ、輪讀式に。

12　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　全課を一度靜かに通讀させる。
一不明の箇所は其の都度質問させる。

2　輪讀。
▽一場面づゝ、座席順に。

3　話合。
▽懇談的に各場面の印象や觀點を自由に話合はせる。
一場面づゝ逐次に研究させる。

4
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付し各自のノートと照合させる。

(一) 大泊

港内一面濃霧

大泊 — 七月の初めといふにぞつとする程冷たい

(1) 漁業の中心地 — 眞岡・本斗と共に
　市内の活氣
　にしんの香

(2) 神樂岡公園に上る
　依仁親王の武功記念碑
　巨船（油畫）

紺碧の海
沖にかもめ
（亞庭灣）

山
山
山
（能登呂岬）

樺太の玄關口
↑
連絡船
↑

（最初の感じ）

(二) 豊原

(1) 樺太廳の所在地
　本島第一の都市
　鈴谷平野の中央
　市街井然　道幅が廣い
　しらかば・なゝかまどの並木

(2) 樺太神社
　市街は眼下
　遠く樺太山脈
　廣い鈴谷平野
　内地で見られぬ木々 — 廣い境内

(3) 製紙パルプ工場
　えぞまつ・とどまつの丸太が山のやう（原料）
　細かく碎き→藥品でどろ〳〵に
　之を洗つて乾かし→パルプに作る
　出來たパルプは内地へ→種々の紙に — すべて機械

(4) 變つたおもむき
　鈴谷川對岸の露人部落
　午後の九時まで新聞が讀める
　樺太の夏は日が長い

（大盛さ）

(三) 養狐場

豐原市外
燕麥の穂波
荒野の大道を走る
内地で味へぬ愉快さ

(1) 小沼
中央試驗場（農園や牧場を一巡する）

養狐場（金網の中）
黑や黃色の狐
すばらしい尻尾
寒いので毛並がよく
一匹數千圓
きよとんとした目
（珍し い）

(四) 海豹島

オホーツク海の濃霧が薄れて
ぽつかり浮かび上つた
不思議な島

(1) 海豹島
（百米）

(2) おつとせい
ロッペン鳥
（七十米）
ギャオ〳〵
羽ばたき
（三十萬）
ウォー〳〵
（騷ぎ）
（不思議だ）

身動きもならぬロッペン鳥の行列
(3) 西岸から上陸
近寄つても逃げようとしない
水兵さんがエプロンを掛けたやう
（こつけいな姿）

(4) 東岸の砂濱
無數のおつとせい
牛のやうな巨獸
よち〳〵する幼獸
ほえる者
叫ぶ者
かみ合ふ者
尾を振る音
（大變）

(5) おつとせい
五月末頃に上陸し
十月頃全部引上げる

(6) ロッペン鳥
ものすごい羽音
一氣に飛立つ
太陽をおほひかくす

(五) 國境

(1) 國境線に立つ
幅約二十米
東西に一直線
夏草の茂る
音一つしない
朽ちた木樹の中
林空（何かしら）

(2) 石標
表（菊花の御紋章
大日本帝國境界の文字
（さしびわ）

（3）原始林の彼方……夕日が赤々と

裏　舊ロシヤの紋章
ロシヤ文字

6　話合。
▽配付した前項の文圖を中心に。
7　一場面毎に文意を摑ませる。
▽ゆつくり各自に默讀させて。
（一）最初の感じ。
（二）盛大さ。
（三）珍しい。
（四）不思議だ。
（五）わびしさ。
8　範讀。
▽一場面づゝ範讀して觀點や文意を確める。
9　ノート學習。
▽地圖や挿畫を參照し印象や景觀を手際よく纏めて記帳させる。
10　話合。
▽文意や感想を中心に。
11　低音讀。
▽珍らしさ・にぎやかさ・不思議さ・わびしさ等各篇の持味を能く味はせて。
12　ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

1　通讀練習。
▽文の風格に注意させて反覆通讀させる。
2　會讀。
▽グループに分れ問題を作製して會讀させる
3　指名讀。
▽中・劣生を主として。
4　演習。
▽地圖やスケッチを挿入して印象的な旅行案内を作製させる。
5　話方練習。

▽前課と連絡させ樺太の特異性や殖民地氣分を實感的に、又模寫的に。
6　學習事項の整理。
▽三部曲の後奏曲として特に前課と連絡させ既習の學習事項の全般に亘つて整理する。
7　補充說話。
▽樺太の歷史や異民族の生活狀態等。
8　朗讀練習。
▽各場面の持味に注意させ、多種多彩な紀行文の趣を味はせる。
9　視寫・聽寫練習。
▽各篇の要所々々を部分的に。
10　暗寫・暗誦練習。
▽形式美の勝れた箇所を選んで。
11　新出文字の書取。
12　語句の應用練習。
13　テスト。

テスト問題

一、次の片假名を漢字に直しなさい。

1　レンラクセン
2　ギヨゲフのチユウシンチ
3　セイゼン
4　ミカゲイシ
5　マルタがヤマのやう
6　キカイのハタラキ
7　フシギのシマ
8　キヨジウのムレ
9　イツキにトビタつ
10　コクキヤウセン

二、次の漢字に假名を附けなさい。

1　玄關口
2　神樂岡
3　亞庭灣
4　樺太廳
5　狐場
6　尻尾

7　燕麥　　8　露人部落　　9　海豹島

10　菊花の御紋章

三、次の括弧に包まれた語句の中で正しいの殘し後を消しなさい。

1　パルプは內地の製紙工場に送られ（乾かして／煮て／もう一度）どろ〳〵にとかされてから、種々の紙に（切られる／すかれる／作られる）のである。

2　燕麥の（枝／葉／穗波）を渡る夏風に吹かれながら、荒野の（大道／中道／細道）を走る愉快さは（最も／ちよつと／少し）內地で味へぬものゝ一つである。

3　どれもこれも、水兵さんが（帽子／旗／エプロン）を掛けたといふ、すこぶる（おもしろい／こつけい／をかしい）な姿である。

第十八　雲のさまざま

氣象學的教材で樣々の雲と氣象の關係を感興深く說いたのが本課である。

日常無關心に仰いで居る雲にも夫々の學名があり、之に伴つて氣象の變化を知る事が出來たら、我々の日常生活も一段と興味が增す事であらう。

唯慢然と仰ぐ雲の變化にも我々は如何に自然の美を感じて居る事か知れない。殊に我が國の如きは半ば海洋性の氣候である爲、浸潤な風光に直面し、大陸地方で見られぬ雲の變化に接する事が出來ると言はれて居るから、雲を題材とされた因緣も成程と頷かれる。

學術的に深入して說く事を避け、何處迄も趣味の科學として兒童の實生活と結び附け、平明に實感的に懇切を極めた解說振が嬉しい。

十種雲級表

（中央氣象臺關口技師の著に據る）

番號	名稱（俗稱）	平均高度	階級	形狀及特性
1	卷雲（すぢ雲）	九千米	上層雲	白色。細かく纖維狀を呈せる離れ雲で屢々羽毛狀を呈す。
2	卷層雲（うす雲）	九千米	同	白色。淡い扁平の雲にして時には全天を覆ひ、單に乳白色を呈する事あり、又時には亂れたる蜘蛛の巢狀組織を呈し暈を生ず。

挿畫の印象と其の說明

10	9	8	7	6	5	4	3
層雲（霧雲）	積亂雲（夕立雲）	積雲（つみ雲すわり雲）	亂雲（あま雲）	層積雲（くもり雲うね雲）	高層雲（おぼろ雲）	高積雲（むら雲）	卷積雲（まだら雲）
一千米上限	八千米乃至千四百米	千八百米乃至千四百米	同	二千米	同	七千米乃至三千米	七千米乃至三千米
高霧	型上昇氣流	上昇氣流によるもの	同	下層雲	同	同	中層雲
霧に似て斑のない雲の層にて地より離る。	立狀の雲（偽卷雲）に纏はれ、其の底は雨雲と同樣なり。入道雲も其の一つの現れなり。	羊毛の堆積に似たる雲。上面は隆起したる圓頂形を成し、下底は水平なり。	暗色。雨雲。輪郭の亂れたる不定形。暗雲の厚層にして雨及雪を降らす。	暗色。暗雲の大塊又はロールを成し、時としては全天を覆ふ。特に冬季に多し	灰色又は緣がゝれる色の厚い層にして、時には暗灰色の密塊を成し、纖維狀組織を成す事も有り、光環を生ず。	白又は灰色の陰影あり。大きく丸い塊群を成し、時には列を成す。其の排列密にして、相隣る塊の緣邊が錯綜する事あり。	白色。稀に淡影あり。鯖雲・鰯雲とも言ひ、小さく丸い塊又は白い片、群を成し、又屢々列を成す。

雷雲・驟雨雲。山の如く塔の如く又鐵砧の如く立つ大塊雲にして、普通纖維的外見を有する布狀又は衝

百九頁は卷雲・百十頁は鰯雲・百十二頁はうね雲・百十四頁は入道雲であるが、何れも雲が白く浮き出し、空の青い部分が眞黑に撮られて居るのは、最近の寫眞術に於ける赤外線寫眞に依る特色である。普通乾板を用ひた寫眞では、空の青さは全然感光しないで白い雲と空との差別が附かない。だが整色調フィルム又は乾板を用ひれば空が鼠調に感色し、更に赤外線原板を用ひ寫眞機のレンズの前に赤色のフィルタと言ふ特殊のレンズを用ひれば、空の青い部分が殆ど眞黑に燒ける迄感光するのである。

文字語句

新出文字

兆（チョウ）　陰（イン）

讀替文字

卷（カン）（新出は卷五、マク）　龍（リュウ）（新出は本卷、タツ）　羊（ヤウ）（新出は卷十、ヒツジ）

比（クラベ）（新出は卷八、ヒ）

語句と其の解說

雲（クモ）　大氣中に凝結せる水蒸氣が高所に浮游するもの。微細な水滴から成るものと氷晶から成るものとがあり、其の水滴から成るものは霧と全く同物であつて、唯霧は地面に近く顯はれ、雲は高く空中に在る丈の相違である。氣象學上風を其の形に從つて十種に區別する。即ち卷雲・卷層雲・卷積雲・高積雲（積卷雲）・高層雲（層卷雲）・層積雲・亂雲・積雲・積亂雲・層雲が之である。此の十種の中、

卷雲と卷層雲とは氷晶から成り、其の他の雲は水滴から成る。然し雲の形は千種萬態で決して此の十種のみに分類し難い。此の十種は尙植物を科に分つて研究すると同樣で、科中の屬に至つては甚だ多樣であるは勿論である。從つて學者は之を雲形又は十種の雲紋と稱して雲を類別して研究する基本形式と成して居る。

卷雲　すぢ雲ともいふ。快晴の日が二三日續くと靑空に刷毛で一氣に描いた樣な眞白い薄雲を生じ、それが擴つて遂に頭上を蔽うて幾條かの長い羽毛の樣に竝ぶ雲である。卷雲は水滴では無く、極めて小さい氷の結晶體の集りで、雲の中でも最も高い所に生ずるものである。卽ち溫帶地方では平均七粁乃至一〇粁の萬さに生ずるが、夏や熱帶地方では地面が著しく熱せられるから氣溫もかなり高いまた爲に二〇粁も高所に生ずる事がある。又卷雲は低氣壓の前面に現れる場合が多いが、之は低氣壓の上層では空氣が四方へ吹き出される樣な狀態にあるから、其の結果として低氣壓よりも迅速に動き、其の前面に現れて來る。二箇又はそれ以上の卷雲が交錯して居る場合があるが、それは上下兩層の氣流が流れる方向を異にして居る爲で、之に依つて大氣の上層の不安定な事が知られる。それで一般に卷雲は天候不良の兆として現れ、殊に數條の卷雲が入亂れたり、又は空の一點に收斂する樣な狀態を示す時には、數日中に天候が變る前兆と見做されて居る。

卷雲と卷積雲

薄雲　うす雲は卷層雲で、卷雲が次第に發達して空一面に擴がり、乳白色のヴェールを擴げた樣に見える。此の雲は極めて變化し易く、之を通して太陽を見ると日暈を生じ、月を見ると月暈を生ずる。卷層雲は卷雲と同樣に氷の小片から成り、天候不良の兆として現れる。昔から日暈の出た後は數日內に降雨があると言はれて居る。

天氣がくづれる　天氣が惡くなること。

群生　むらがつてできる。群はむらがること。むれ。むらがり。集團。群集。

斑點　まだらに散在する點。まだら。ぶち。

さば雲　鰯雲の異名。さば雲・いわし雲共に卷積雲である。

いわし雲　卷積雲（ケンセキウン）である。卷積雲は小まだら雲ともいひ、俗には鰯雲又は鯖雲と稱して居る。此の雲が靑空の一部に群集して居る樣は實に美しい。太陽や月の周圍に美しい五彩の光環が現れる時には、多く卷積雲中に生ずる。此の雲は過冷却の狀態にある水滴と考へられて居る。突然見る間に滿天卷積雲で蔽はれるかと思ふ間も無く忽に積卷雲に變り、或は大雨を起すので、此の雲は一般に天候が急變する兆であるとも考へられて居る。尙卷積雲中には雲粒の大いさを增して、其の一つ一つが環狀を成し、中央が穴に成つて、恰も花環の樣な形を示すものもある。此の種の雲は能く見ると、一つ一つが煙草の環の樣な雲渦を構成して居る。

卷積雲

天候惡變の兆　天氣模樣が惡くなるきざし。兆は兆候の意で、しるし、きざし。

龍　タツともリョウとも讀むが、リュウが一般的である。龍は想像上の動物。體は大蛇に似て、背に八十一の鱗があり、四足に各五本の指、頭には二本の角を有し、顏長く耳があつて口邊に長い鬚を具へる。水に潛み空に翔り、神靈にして能く雲雨を起すと言ふ。

むら雲　叢雲。むらがつた雲。群れ集つた雲。叢雲の

劍で能く知られて居る。雲級から言へば高積雲（積卷雲）で、又大まだら雲とも言ふ。卷積雲が降下して發達した結果生ずる場合が多く、從つて卷積雲よりも低い所に現れ、突然豪雨を降らせる事がある。卷積雲と同樣の白雲の塊であるが、中程は淡褐色又は薄鼠色を成し、或は繭を並べた樣に成つて全體としては波狀を呈するが、或は牧場に群がる羊の樣な觀を呈する。雲塊の厚さも相當にあるから、半面は日光に依つて陰影を生じて居る。

（風陣線ある〳〵つじ生を卷龍）

おぼろ雲　高層雲（層卷雲）で、又どんより雲とも言ふ。薄鼠色をして滿天を蔽ひ、之を通じて太陽を見ると、擦り硝子を透した樣にボンヤリして見える。主に梅雨期や花期に現れる。此の雲は又纖維狀に排列する事もあつて、卷層雲と極めて能く似て居るが、唯高さが其の二分の一位に止るから區別される。

照りもせず曇りもはてぬ　新古今集、一、春、上、大江千里の歌。照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。"はて"はなりはてるの意で、しまひ。きはみ。をはり。照りもしなければ曇りもせぬどんよりとした春の夜の朧月夜の眺めは、他の何物も之にしき及ぶものがないと言ふのである。

卷雲より低く　いわし雲は卷積雲、むら雲は高積雲（積卷雲）、おぼろ雲は高層雲（層卷雲）で、卷雲の生ずる層は地上約九千米、卷積雲は地上約三千米乃至七千米、高積雲・高層雲の生ずる層も大體之と同樣である（別表參照）

なみぎる　水が滿ち溢れるばかりになること。はびこりわたる。みちひろがる。

うね雲　田畑のうねの樣に見える雲。層積雲（ソウセキウン）を言つたもので、又のざばり雲ともいふ。

層雲　層雲と積雲との中間に生ずる雲で、多く冬に雲堤蜿蜒として天空を蔽ふ場合が多い。褐色又は黑色を呈し、高積雲（積卷雲）よりも形が大きく不規則で、或ものは暗黑な大塊を成す樣に、又或ものは卷物狀を成して現れ、それが空一面に擴がると恰も桶に入れた味噌汁を膳に据ゑて暫く眺めて居る時の樣に所々に割目を生じ、其の割目から上層の雲や青空が見える事が多い。

雨雲　雨が降らうとする際に生ずる雲。雨氣を含んだ雲。雨雲は即ち亂雲で、又雪雲とも言ひ總ての形の雲が降下して雨・雪を降らせる黑雲である。一定の形が無く、普通は空一面を蔽ひ、雹を流した樣になる。亂雲が斷ち切られて、其の斷片が飛び交ふのは所謂暗雲又は片亂雲と言ひ、嵐の前後等に物凄く飛ぶ。

陰氣　氣分の晴れやかで無いこと。氣分の開けぬこと。鬱々として快活で無いこと。陰鬱。陰鬱。

層雲　きり雲とも言ふ。灰白色を呈し極く低く、ぼんやりと廣く空を覆ふ雲である。其の最も標本的なものは、此の雲の下では大氣も澄んで、遠くを明視し得る程である。通常霧が高く昇つた樣に山腹から山の半分を蔽うて居る。層雲は可成厚いが、それを境として兩者に明確な境界を與へて居る。山腹を蔽うて居る層雲を山霧から見ると霧が掛つて居る樣であるが、山上から見れば美麗な雲海を現す。若し此の雲が地表迄降下して來ると、霧と區別し得ない程である。

積雲　つみ雲・すわり雲・むくむく雲・綿雲・浮雲・水まき雲・綿帽子雲等の別名がある。夏に最も多く出るが、冬にも暖い海岸等に見受けられる。此の雲の特色としては下底が水平で上面はむつくりした白い綿の樣に盛り上つて居て、其の厚さは僅々十米乃至二十米である。積雲は上昇氣流に依つて生ずるものである。即ち地面に近い

空氣があちこちで一團と成つて上昇すると、約百米に就き一度の割合で冷却する。其の中には大抵相當の水蒸氣を含んで居るから、或高さ以上に達すると飽和して雲と成る。それで若し地面に等しい溫度に暖められ、且つ略同量の水蒸氣を含んで居る空氣が上昇して雲を生ずるとすれば、是等の空氣が雲を生ずる迄冷却するには略同一高度迄昇る必要がある。之が即ち積雲の下底面の高さが一定して居る理由である。一旦雲を生じても空氣は矢張複雜な渦動を成して上昇する。積雲又は海風が陸上の空氣と衝突した時から、積雲の形がむく〳〵する。積雲の前者が壓し上げられて冷却して生ずる事もある。夏の日等に海岸近く白雲の浮ぶのは此の爲である。

積　雲

入道雲（ニフダウグモ）　入道雲は雲級の所謂積亂雲である。積亂雲は夕立雲又は雷雲と言ふが、頗る特徴があるから各地方で種々の異名を附して居る。即ち其の生ずる位置から言つたものには大阪地方で丹波太郎、關東地方では坂東太郎、九州では比古太郎、近江・越前では信濃太郎、長門地方では石見太郎等と呼んで居る。又形から言ふものには鐵砧雲・猪の子雲等の外に入道雲・雲の峰を始めとして播磨の黑ぐも・加賀のいたち雲・安房のきじ雲等がある。積亂雲は積雲の大きいもので太陽の輻射が特に強い時異常に熱せられた地面から立昇る劇しい上昇氣流に依つて生ずる。其の下底は千四百米乃至八千米であるが、其の頂上は昇騰の勢力の如何に依つて今少し高いものもある。又昇騰に際して極めて複雜な渦動を生じつゝ進むのが其のむく〳〵した形に現れて居る。四周山に圍まれた盆地等の地形に依つて特に強い

日射を受ける所には、極めて強烈な上昇氣流を生ずるから積亂雲を生じ易い。又此の雲は昇騰の際には周圍の空氣と雲を構成して居る微細な水滴との相互作用に依つて、一種の現象を起して劇しく帶電する。然し其の帶電量は上昇するに從つて增大するから、積亂雲が十分發達した際には空中に放電を起したり、又は雲と地との間に放電する。之が雷雲の別名ある所以である。

俳句で雲の峰（ハイクデクモノミネ）　雲の峰は雲の形が峰の樣に見えること。又其のもの。俳句の歳事記に、雲の峰。安達太郎。丹波太郎。夏日屢々現るゝ天象にして、積雲若しくは積亂雲をいふ。夏雲多二奇峯一（陶潛詩）奇峰突兀火雲昇（杜詩）水無月になりぬと見えて大空にあやしき峰の雲のいろかな（衣笠内大臣）安達太郎・丹波太郎は異名と知るべし。他に異名多し。眞白に鎬干す庭や雲の峯（蘗魚）先に立つ丹波太郎や道しるべ（大江丸）雲貌に安達太郎雨を催さす（子規）とある。

かなとこ雲（カナトコグモ）　夕立雲の別名で、雲級から言へば積亂雲である。積亂雲の發達は地形に依る所が多いから、其の出現する場所は大概一定し、夏の旅行者の良い道案内となる事が多い。元來積亂雲は急激な上昇氣流に依つて生ずるもので有るから、大火事の際等劇しく熱せられた空氣が猛烈な熱で上昇すると矢張上昇に從つて斷熱膨脹を爲す結果冷却して雲を生ずる。但し此の場合には乾燥した空氣があるから、假令途中の濕氣を奪ひつゝ昇るとしても、飽和蒸氣が上昇する場合の樣に十分な水を凝結せしめる事が出來ない。そして斯樣の際にも氣流が上昇する爲に生ずる空中電氣に依つて雲自身が高い電位に迄帶電せしめられ、遂に雷電を生じた例がある。火事に依つて積亂雲を生じた例は少くない。殊に山火事に多い。近くは大正十二年九月一日の關東大震火災に於て、東京市の過半・横濱市の大半を燒盡した大火災は、三日に亙つて猛烈な上昇

氣流を起し、兩市の上空に恐しい積亂雲を生じ人々を彌が上にも不安ならしめ、然も遂に一滴の雨さへ降らせなかつた。又東京市の上空に現れた當時の積亂雲は擬卷雲をも其の頭上に生じ、絶えず變幻萬態、尙此の時の積亂雲が上昇した最高の高さは五粁乃至六粁であつたと言ふ。

かぼそい　かは接頭語。弱々しく細い。ほつそりしてかよわい。きやしやな。纖弱。

女性的（ヂョセイテキ）　女らしく

男性的（ダンセイテキ）　男子らしく雄々しい。男性は男子たる性質。女性の對。

强健（キャウケン）　身體の强く健かなこと。達者なこと。

指導精神

氣象學的教材で內容は勿論知識傳達の文章であるが、各種の雲に對する說明が痒い所に手が屆く樣に親切に書かれてある。何時も見て居乍ら雲烟過眼視して氣にも留めない雲のたゝずまひも、斯う手際よく書かれると夫々の箇性を持つた姿を見せる。自然を生かした文である。趣味の科學でもあり、平明・暢達の文でもある。

取扱に際しては雲の性質や雲形の大體を心得て置く要があらう。雲は飽和狀態にある空氣が高層で冷却された結果、浮游して居る細塵・イオン（正又は負の電氣を帶びて居る原子又は原子團）等を中心として凝結して生じた完全な水滴の群を言ひ、それが密集して長い間空氣中に浮游して居るのは空氣の抵抗が其等の落下を妨げるからで、若し更に凝結が進んで水滴の粒が大きく成り、其の重量が空氣の抵抗に打勝つと遂に雨と成つて降る。

雲の觀測には、先づ雲量は定めてから雲の種類を決定する。雲の基本的種類は亂雲・層雲・積雲・卷雲の四つであるが、現今は萬國氣象會議で認められた方法に依つて、以上の外、卷層雲・卷積雲・高積雲（積卷雲とも言ふ）・高層雲（又層卷雲とも言ふ）・積亂雲の六種、合計十種に分類するのが普通である。之を雲形又は十種の雲綱と言ふ。

雲は又其の生ずる高さから上層雲・中層雲・下層雲の三種に分ける事がある。

1　上層雲九千米乃至一萬二千米の位置に生ずる雲で、卷雲・卷層雲等が之に屬する。

2　中層雲　三千米乃至七千米の高さに生ずる雲で、卷積雲・高積雲（積卷雲）・高層雲（層卷雲）等が之に屬する。

3　下層雲　一千米乃至二千米の高さに生ずる雲で、層積雲・亂雲・積雲等が之である。

雲の高さ厚さ及び速度は時と場所とに依つて可成差異があるから一概には言へぬが、大體に於て雲が最も多く存在する層は次の五つである。

1　霧の生ずる層、卽ち地表又は地面。

2　積雲の生ずる層、卽ち地表上約千四百米乃至千八百米の高さ。

3　積卷雲の生ずる層、卽ち地表上約千四百米乃至八千米。

4　卷積雲の生ずる層、卽ち地上約三千米乃至七千米の所。

5　卷雲の生ずる層、卽ち地上約九千米。

雲の最も少い層、卽ち雲が起りにくいのは次の五箇所である。

1　層と積雲の下底迄の間の層で、片雲が飛交ふ所。
2　二千五百米・三千五百米の層。
3　高層雲の現れる三千米乃至七千米の層。
4　卷積雲と卷雲との現れる兩層の中間、卽ち八千五百米乃至九千米の所。
5　一萬一千米以上の所謂等溫層。

尙雲を乳房雲・波狀雲・旗雲・笠雲等の如く形から見て分類する方法もあるが、本課の取扱としては先づ大體以上の要領を心得て置けば十分であらう。

指導形態

指導上の認識點

1　本課は題目の示すが如く雲の種類と其の特性及び見た感じを手際よく說明した一種の解說文であるが、之が中核を成す十種の雲形は殆ど其の全部を網羅し盡されて居る。卽ち卷雲（すぢ雲）卷層雲（薄雲）卷積雲（いわし雲）高積雲（むら雲）高層雲（おぼろ雲）層積雲（くもり雲・うね雲）亂雲（雨雲）積雲・積亂雲（入道雲・かなとこ雲）層雲がそれで、唯其の複合又は變形して成る例へば擬卷雲の如きが省かれて居る丈である。

2　從つて之が取扱に於ても興味ある趣味の科學として面白く讀取らせると共に自然觀照の態度を馴致し、雲を眺め雲を研究する根帶とも言ふべき雲形に關する氣象學的知識を附與する事を念とせねばならぬ。

3　形式方面に於ては同列のものを多く說明する際の表現態度を知らせ、自然を生かして取

扱ふ新しい解說文の手法を呑込ませる心構が大切である。

4　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽現前せる雲を指示して興味を喚起し、讀心を喚つて直に讀みに入るが良い。

2　一度靜かに通讀させる。
▽第一印象や讀後感を記帳させて置く。

3　內容の大體を摑ませる。
▽摑んだ梗概は纏めて記帳させる。

4　話合。
▽讀後の印象や感想を中心に。

5　再讀して不明の箇所を摘出させる。
▽摘出した箇所を質問に便宜な樣ノートに整理して記帳させる。

6　新出文字の指導。
▽字書を輔導して其の都度索引させる。
卷　兆　龍　羊　陰　比

▽難語句の指導。
▽質問を待ち先づ類推させてから指導する。
刷毛　眞綿　舞の袖　白絹　天氣がくづれる　群生　斑點　天候　惡變の兆　龍受合　群羊　景氣　空一帶　曇りもはてぬ　前兆　みなぎる　もく〳〵　俗に　陰氣　强烈　まぶしい　銀鼠　雲の王者　俳句　雲の峯　朝顏形　雷雨　ひよう　一天にはかに　かぼそい　女性的　壯大　男性的
▽專門的・學術的熟語は一々板書して入念に取扱ふ。
卷雲　薄雲　さば雲　いわし雲　むら雲　おぼろ雲　雨雲　曇り雲　うね雲　亂雲　層雲　積雲　入道雲　かなとこ雲

7　何回も繰返して讀ませる。
▽說明內容を手際よく分類して記帳させる。

8　指名讀。
▽適宜に句切つて、輪讀式に。

9　挿畫の觀察。
▽文と照合させ不明の箇所は質問させる。

10 默讀。
▽說明內容を心に描がせて。
11 ノート整理。
▽學習事項を纏めて記帳させる。
12 課外學習。
▽朝・晝・夕・夜と雲の樣子を實地に觀察させる。

1 一二回靜かに通讀させる。

第二次指導

(1) 卷雲 → 白い雲
卷雲 → 澄んだ空（刷毛で輕くはいたやう／眞綿を引きのばしたやう）→（細やかすつきり／鯉の袖）（女性的）
卷雲 → 八千米から一萬二千米（一番高く）
卷雲 → 薄い白絹

(2) 蓮雲 → 卷雲がふえて（太陽や月がかさを着る／天氣がくづれるな）形がぼやけて來る

2 話合
▽印象や感想を自由に話合せる。
3 雲の種類を調べて記帳させる。
▽先づ羅列的に列擧させ、更に十種の雲形に分類させる。
4 指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。
5 逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

(3) いわし雲 → 白い雲（さば雲）
いわし雲 → 七千米以下／三千米以上
いわし雲 → 白い雲
いわし雲 → 青空に（うろこのやう／小さく群生する／さばの斑點に似て）→（さびしい感じ／天候惡變の兆／長く續くと雨）

(4) むら雲 → 七千米以下／三千米以上
むら雲 → 青空に（大きなかたまり／綿をちぎつて投げたやう／西洋人は群羊にたへる）中々景氣がよい

(5) おぼろ雲 → 空一帶が灰色（太陽でも月でもおぼろ／照りもせず曇りもはてぬ）→ 頭をおさへつけられさう／天候の惡い前兆
おぼろ雲 → 七千米以下／三千米以上
おぼろ雲 → いわし雲がふえて
おぼろ雲 → 薄黑い雲
おぼろ雲 → 曇り雲 → 青空に（雨雲に似てゐるが／所々に青空が見え／日光がもれる／もくもくとかたまり／畠のうねのやう）（うね雲）

- 二千米以下
- 薄黒く
- **雨雲** → 空一ぱいに
  - きまつた形がない
  - 亂雲と呼ばれる
  - 陰氣（いやな感じ）
- 二千米以下
- 白い雲
- **層雲** → 雨のあげく、
  - 流れるやうに滑り出る
  - 一番低い雲
  - 手に取れさう
- 六百米ぐらゐ
- 白い雲
- **積雲** → 天氣のよい日
  - 底が平で上は山の峯のやう
  - 積上つた形
  - （男性的）
- 二千米内外
- 銀白色
- **入道雲** → 夏の日など
  - 峯がむく〳〵とふくれ上つた雲
  - 雲の王者
  - 雲の峰

- 六千米から八千米
- **かなとこ雲** → 雷を流したやう
  - 頂が朝顔形
  - 雷雨を起しひようを降らせ
  - すばらしく厚い
  - （男性的）
- 六千米から八千米

6 グループ學習。
▽グループに分れ配布した文圖と各自のノートを比較對照して研究させる。
7 範讀。
▽文の觀點に注意させて。
8 默讀。
▽雲の樣相を心頭に描かせて。
9 話方。
▽說明の要點を摑んで明快に。
10 指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。
11 低音讀。
▽他に解說して聞かせる心持で、全課を一氣に。
12 ノート整理して提出させる。

第三次指導

1 輪讀。
▽座席順に、又は讀んだ者に指名させて。
2 話合。
▽說明內容を中心に。
3 指名讀。
▽中・劣生を主として。
4 演習。
▽各種の雲を十種の雲形に分類させる。
（1）卷雲（一番高い刷毛ではいたやう

な雲）

（2）巻層雲（薄雲）

（3）巻積雲（いわし雲・さば雲）

（4）高積雲（むら雲）

（5）高層雲（おぼろ雲）

（6）層積雲（曇り雲・うね雲）

（7）亂　雲（雨雲）

（8）積　雲（底が平で上は峯のやうに積上つた雲）

（9）積亂雲（入道雲・かなとこ雲）

（10）層　雲（一番低い流れるやうに滑り出る雲）

5　話方練習。

▽前項の雲形を中心に。

6　朗讀練習。

▽解說する樣な態度で感じを込めて反覆讀誦させる。

7　學習事項の整理。

▽內容方面では說明內容を、形式方面では流暢な解說文として。

8　視寫・聽寫練習。

9　全課の暗誦・暗寫。

10　新出文字の書取。

11　語句の應用練習。

12　テスト。

テスト問題

一、次の括弧の中に二樣の熟語を書きなさい。

1　眞（シン　）（マ　）

4　男（ダン　）（ナン　）

二、次の漢字に讀めるだけの振假名を附けなさい。

1　絹　2　北

4　龍　5　變

7　前　8　羊

10　亂

三、次の語句を使つて短文を作りなさい。

（1）女性的（　）

（2）王者（　）

（3）受合（　）

（4）前兆（　）

（5）天女（　）

2　雲（ウン　）（クモ　）

3　道（ダウ　）（ミチ　）

5　卷（ケン　）（マキ　）

3　任

6　現

9　候

第十九　燕岳に登る

登山が體育上の試練としてスポーツ化するに至つたのは極最近の事に屬する。昔の登山者は山上の神社や佛閣に詣でる爲か、或は旅行の爲の山越、さも無くは樵夫や獵師・茸狩等の際で無くては、體育を目的に登山すると言ふ樣な事は全く例が無かつた。本課は其のハイキングの壯快さを如實に物語つて、新讀本らしい面目を見せて居る。

同じハイキングの中でも我が國では高山重疊の中部山岳（日本アルプス）を以て最も理想とする。就中燕岳は北アルプスの前衛山脈を成す常念山脈の北部に聳える山で、比較的登山が容易な上に眺望佳絶の故、中部山岳中登山者の數最も多く、年々第一位を占めると言はれる。殊に此の教材を學習する時分は恰もハイキングシーズンでもあり、教へる者も興味百パーセントで自から胸躍るものが有らう。

絢爛たる高山植物が配せられたのも讀本としては最初であり、山小屋や勾配の角度・夏期の殘雪等にも大いに興味を感じ、殊に男兒の側から非常な感興を以て迎へられる事であらう。

挿畫の印象と其の說明

百二十頁の右上は高山植物の『ないかまど』（七竈）である。此の木の材は炭に燒き難い爲、七度も竈に入れねば燒けぬと言ふ意味から此の名がある。山中殊に高山地帶に自生する薔薇科の落葉喬木で、最も大きいのは高さ十米位に達する。枝頂に群生した五瓣の小花を開き、秋に成ると球形の赤色果を結び、葉は紅葉し

て美觀を呈する。

左下は『いはかがみ』（岩鏡）と稱するいはうめ科の多年生草本で、山地に自生する高山植物であるが、畿地方では普通の山地に能く見受けられる。葉柄が短く葉はハート形で光澤があり、緣邊に鋸齒がある。叢生した葉の中央から數個の花莖を出し、初夏の頃淡紅色の花を咲かせる。登山者がふと足許に此の花を見出した際は、如何にも可憐で誰しも其の名を知りたがるものである。

百二十四頁右下は『しなのきんばい』（信濃金梅）と稱するウマノアシガタ（毛茛）科に屬する多年生草本で、山地に自生する。北地に多いので蝦夷金梅草とも呼ばれ、信越地方から北海道・樺太地方の雪解時に咲き誇る黃色の花を着けた可憐な草本である。寫眞の如く葉に特徵があり、見附け次第〝あゝ信濃金梅だ〟と直ぐに見分が附く。日本特產の高山植物で、トラリウス・ヤポニクス（日本の）・ミクエルと言ふ學名がある。

左上の草本は『はくさんいちげ』（白山一花）と稱し、矢張ウマノアシガタ（毛茛）科に屬し、高山の御花畠に自生する多年生草本である。高さ一〇糎乃至三〇糎位の小さな植物で、全體にビロード樣の絨毛を密生する三出復葉で細裂が多い。夏季數箇の花梗を出し、毎頭に白色の五瓣花を咲かせる。登山者の眼には、其の純白さが恰も聖なる乙女の樣な感覺を與へる。

百二十六・七頁の横長な寫眞版は燕岳の頂上から西方を望んだ壯觀で、盛夏尙山頂の北面した箇所は白雪が殘つて居る。向つて左方遙に突兀として鋭く尖つて見えるのは、日本アルプスの盟主と謳はれた標高三一八〇米の槍嶽である。其の右方に重疊として連なる高峯が赤嶽（二四二四米）三俣蓮華（二八四一米）硫黃嶽（二五五四米）鷲羽嶽（二九二四米）南眞砂岳（二七一〇米）野口五郎岳（二九二四米）三ツ嶽（二八四五米）等の諸山で、長野・富山の兩縣に境する分水嶺は脉々として盡きる所を知らない。島國日本に斯んな壯大な眺めが有るかと登山者をして感歎措かしめざるものがある。

文字語句

新出文字

溪（ケイ）　奔（ホン）　狹（キヤウ）　紺（コン）

讀替文字

谷（コク）（新出は卷四　タニ）　鳴（メイ）（新出は卷五　ナク）　溫（アタタカ）（新出は卷六　オン）　紅（ク）（新出は卷六　ベニ）　紫（シ）（新出は卷六　ムラサキ）　刻（キザム）（新出は卷八　コク）　界（サカヒ）（新出は卷四　カイ）　塊（クワイ）（新出は卷十　カタマリ）

語句と其の解說

燕岳（ツバクロダケ）　日本北アルプスの高峰。長野縣北安曇・南安曇の兩郡界に屹立、標高二、七六三米。北アルプスの前衞山脈と呼ばれる常念山脈に屬し、花崗岩から成り奇岩突兀・山容秀麗・岩間にはお花畑あり特に美しく、頂上の眺望は雄大壯美。北は遙に立山・白馬嶽を望み、近くは有明山・安曇平野を一眸に收め、西には野口五郎・三俣蓮華の峻峰、南には大天井嶽・常念嶽が續く。燕嶽から大天井嶽を經て槍嶽に至る道は、林道能く改修されアルプス銀座通と言はれる。麓の中房溫泉から合戰小屋を過ぎ急峻な山道を辿れば頂上に達し（約六粁）山上には設備完全・多數宿泊出來る燕山莊がある。上り三時間、下り一・五時間、最も容易に然も短時間で登られる北アルプスの展望臺として登山者數の多い

燕山頂及立山連峰

事、北アルプス中屈指。尙燕は中部山岳國立公園地帶に在るが、最も登り易く且つ危險も少いから女子供の登山には頗る好適である。蓋し白馬を取らず燕を選んだ所以も亦其の邊に在らう。我が國のアルプス型山岳地は、本州中部に於ける北アルプス・中央アルプス・南アルプスの三區域に依つて代表されて居るが、本國立公園は其の北アルプスの全部を抱擁したもので、北は白馬・立山から、南は乘鞍に至る長野・岐阜・富山・新潟の四縣に亘つた廣大な地域を占めて居る。公園區域は白馬・槍・穗高・乘鞍・立山・劍等の三、〇〇〇米級の高山岳を始め、所謂北アルプスの殆ど全地域に亘つて高峰・峻嶺相連つて頗る雄大な風貌を現し、本邦第一の登山地として著名である。又是等の山岳に源を發する溪谷には、黑部川・双六谷・上高地を始め、高瀨川・黑薙川等の優れたものが多く、彌陀ケ原・五色ケ原・雲ノ平等の廣大な熔岩臺地が展開し、其の間に幾多の湖沼・濕原等が點在し、山腹は原始林に掩はれ山頂一帶は雪溪とお花畑に飾られる等、山岳公園として最も優れた風景を成して居る。又山間・山麓には溫泉が湧出し、登山の根據地又は湯治場として利用されて居る。本公園は夏季の登山・キャンピング、冬季のスキー、又は新綠・紅葉の探勝等、四季を通じて山岳公園

の眞價を發揮して居る。登山路は從來から能く其の開拓に努力されて居た結果、可なり行き屆いた設備が行はれ、相當の準備さへ怠らなければ大抵の箇所へ危險なく達し得られる。登山口は大體松本を中心とし、北部を目ざすものは信濃鐵道・上高地方面に赴くものは松本鐵道に依つて島々に至るのが普通で、裏日本側から富山市（立山方面）三日市（黒部方面）糸魚川（白馬方面）岐阜側では高山・船津（槍・穂高・上高地方面）等が主なものである。　**中房温泉旅館**（ナカブサオンセンリョクワン）　燕岳の麓、中房口にある。之から合戰小屋を過ぎ急峻な山道を辿るのが普通の順路である。北アルプスの登山口は信州側からするものに四ツ家口・大町口・有明口・中房口・豐科口・烏川口・島々口・白骨口があり、飛騨方面に蒲田口・平湯口、北陸線の方面に富山口・黒部峽谷等がある。大町口は北アルプス登山口の中心で、針ノ木を經て立山に出るにも、鹿島槍・五龍連峯へ縱走を試みるにも、高瀬入りや烏帽子・槍ヶ岳への連走にも屈指の登山口として知られて居る。中房には燕・大天井・常念・槍ヶ岳方面の所謂アルプスの銀座通に當るコースだけに初心の人に最も適して居る。　**リュックサック**　防水布製の背嚢。登山用具は大體キャンピング即ち天幕旅行用具と大差はない。即ち露營の爲の天幕・炊事用具・寢具・地圖・磁石・防水具・防寒具・食料品・照明具等である。然し本課の如く小屋の設備ある場合に於ては一層簡單である。唯多少異なる點は防水並に防寒の用具のより完全を必要とすること。及び雪渓の爲の金カンジキ・蔦口の類の必要ある事等である。是等の携帶品は總てリュックサックに入れて之を擔ふ。　**金剛杖**（コンガウヅエ）　昔修驗者の携帶する八角又は四角の白木の杖。登山者は多く之を携へる。登山杖は夏期の登山ならば金剛杖又は登山口にある蔦口の付いた杖で可なりだが、高度の登山に備へるに

はピッケルを用意したが良い。ピッケルは鋼の質と其の熟處度を第一とし、振り良くバランスの取れて居る事を要件とする。長さは腰の邊りで支へられる程度、鶴嘴と鍬の長さの割合は一九糎と一一糎を一般とする。　**かひ〳〵しく**　勢よきさま。はきはきしたさま。けなげな。いさましい。登る山が異なり又同じ山でも登る時期を異にするに從ひ、或は又隊員の組織の異なるに從ひ、準備品・用具の夫々異なる事は論を俟たない。然し常に準備はより完全を期するを可とする。山は常に登山者の期待するが如き狀況を以て迎へるとは限らないからである。山に入る前の仕度の出來上つた事は山を半分登つた事であるとさへ言はれ、又如何なる物を如何に携帶して居るかに依つて、其の人の登山者としての能力の程度が判斷されるとも言はれる。勿論徒に仰山らしく振舞ふのは賢明でないが、必要品を携帶しない事は登山者としての資格の無いものである。　**奔流**（ホンリウ）　勢ひはやく流れること。又は其の流れ。はやせ。奔湍。急湍。急流。　**はづむ呼吸**（コキフ）　はづむは息がつまること。はあ〳〵言ふこと。　**つゞら折**（ヲリ）　甚だしく折れ曲りたる坂路。羊腸。葛のつるの折れ曲がれる如きより言ふ。　**あへぎあへぎ**　いきだはしく呼吸すること。いきぎれすること。　**有明山**（アリアケヤマ）　標高二、二六八米。麓の有明には中房温泉から引湯。北アルプスをバックとし、有明山・淺川山等の嵐氣を集めた幽邃境。附近に信濃日光の稱ある有明神社もある。　**潤葉樹林**（クワツエウジユリン）　潤葉樹は雙子葉植物に屬する木本類。何れも廣き葉を有するもの多きが故に、松杉類の葉の狹き針葉樹に對して言ふ。くす・かし等の類。　**悲鳴**（ヒメイ）　悲しんで鳴くこと。又其の聲。悲鳴を上げるは絶望の極悲痛な聲を出すこと。　**針葉樹**（シンエウジユ）　まつ・もみ・つが等の如く、狹長な葉を有する喬木。潤葉樹に對して言ふ。　**さうしかんば**　しらか

んば（白樺）の一種。高地の向陽の地を好み繁茂するカバノキ科の落葉喬木。樹皮に横理・斑點を有し、外皮白色・内皮淡褐色を呈し、無數の層から成り紙の如く剝離する。枝は比較的細く、柔軟で稍下垂する氣味がある。葉はシラカンバ（白樺）に似、緣邊に鋸齒がある。早春葉に先だち帶黃色の花を開く。材も白樺に似て稍軟かである。

道標（ダウヘウ）　路傍にたてた標木又は標石。普通一合目・二合目、何町・何里、又は何米・何粁等の目じるしを附す。

なゝかまど　薔薇科・梨屬の落葉喬木。幹の高さ七米乃至一〇米。葉は羽狀複葉、各小葉は長楕圓形で鋸齒を有して對生す。五六月の候、白色の小花を開き、聚繖花序に排列し、紅色の果實を結ぶ。からたちばな。

さるをがせ　松蘿。地衣類・松蘿屬の樹皮狀地衣。體は絲の如く樹枝狀に分岐し、長さ往々三〇糎に及ぶ。全體黃綠色を呈し、我が國各地の深山に樹梢より懸垂して自生す。きつねのもとゆひ。くものあか。きりさるかぜ。さがりごけ。

いはかゞみ　岩鏡。高山に產するイハウメ科の多年生草本。莖は短く、往々横臥、葉は長柄・根出・圓形、基底は稍心臟形、先端は丸く或は微凹。滑澤無毛、緣邊に鋸齒、剛質。六七月頃花莖を抽き、上部に淡紅色の花數箇を著ける。花は鐘狀を成して横向き、花冠の上緣は絲狀に細裂し極めて美。ヒメイハカゞミは地下莖長く、葉は一般に前者より小さく、緣邊の鋸齒も少くて粗大。イハウチハも長い地下莖があり、葉は輪生、莖頭は僅に凹入。一葉に一花を著け、淡紅色の花はイハカゞミよりも大。オホイハカゞミは中部日本の山地に產し、葉の長さ及び幅は共に約一六糎に達する。

合戰小屋（カッセンゴヤ）　稍頂上寄の中腹に在る山小屋。

はひまつ　這松。松柏科に屬する常綠樹。葉は大抵五針攢生し、表は綠色で裏は帶白色。枝幹は直立せずに地上を這ひ擴がる。ねなしまつ。しもふりまつ

。偃松。

三角點（サンカクテン）　地名。三角點は原野等の一角に、遠望し得る樣に構成したもので、三角測量の角點を表示したもの。望標。

槍岳（ヤリガタケ）　長野縣南安曇郡と岐阜縣吉城郡に跨る山。北アルプス中第二の高峰。標高三、一八〇米。信濃川・神通川の水源。石英斑岩から成る其の名の如き尖峰で、南方に連る山稜は穗高諸峯を起して本州最高且つ最もアルプス的な連峯を成し、又西北・東北・東に向つては夫々西鎌尾根・北鎌尾根・東鎌尾根と呼ばれる鋭い山稜を分派。山頂の西側なる蒲田谷右俣・南東側の槍澤・東北側の天上澤は何れも氷蝕を受けてカール乃至U宇谷を成し、隨つて槍ケ嶽の尖峰はアルプスに於て何々ホーンと呼ばれる大尖峰と同樣、少くとも三方から氷河に浸蝕されて生じたものである事が最近に判明した。文政十一年播隆上人初めて登頂、現在は上高地から槍澤を經て登山するのが最も容易で、往復二日行程、山小屋も此の方面に最も完備。

槍ケ岳及御花畠

尾根（ネ）　山頂と山頂を繫ぐ峯筋。山稜。又は山稜から谷。

しなのきんばい　うまのあしがた科に屬する草本。形一見ミヤマキンバウゲに似、葉は掌狀を成し切れ込み深く鋸齒がある。黃色の大きな花を開き、其の黃金盞はムシトリスミレの紫やワタスゲの白穗と共に登山者の眼を喜ばせる。

みやまきんばうげ　毛

萇（ウマノアシガタ）科の多年草。高さ六〇糎内外。葉は掌狀に分裂、根生葉には長柄があり、四五月頃莖の頂に黃色五瓣の花を開く。　**はくさんいちげ**　毛茛科・白頭翁（オキナグサ）屬の多年生草本。高さ一〇糎乃至二〇糎、毛茸を有す。根葉は三出複葉、各小葉は二三裂し、各裂片は又分裂して線形の小片と成る。總苞の葉は根葉に類するも葉柄を缺ぐ。夏季莖頂に生ぜる三四の花梗上に白色の花を開く。我が國各地の高山に自生す。（**べにばないちご**　薔薇科・懸鉤子（キイチゴ）屬の落葉灌木。葉は三出掌狀複葉、大小不齊の鋭い鋸齒を有す。枝上に一花を開き、紅色倒卵形の五瓣を有す。我が國各地の高山に自生す。　**お花畠**（ハナバタケ）　高山の草原で、所謂高山植物が美しく咲き揃つた箇所の通稱。高山の頂上附近又は中腹以上の高い所では氣候其の他の關係で喬木は育たない。例へばハヒマツ・シャクナゲ等の相當大きい木が有つても、皆伏臥して居る。お花畑は斯樣なハヒマツやシャクナゲの群叢の間に點綴したり、又は廣い面積を占める一大草原を現出したり、特に緩かな傾斜地等で雪解の水で十分潤うた場所等に能く發達する。高山の草原は雪の無い期間が非常に短く、從つて植物の繁茂する期間も僅に七・八・九の三箇月間に限られて居るから、雪解けと成ると草原の植物は一齊に芽を出し、赤・白・黃・紫等樣々の美しい花を開いて、所謂眼も覺める計りの美しいお花畑を展開する。此の短い期間に一齊に開花し、新しい雪が降る迄に大急ぎで結實すると言ふ事がお花畑の特徵であるから、寔に慌しいものである。日本アルプスでは海拔約二、六〇〇米以上の箇所に發達し、特に壯觀を呈するお花畑として知られるのは白馬岳・立山・八ヶ岳等で、其の最も美しい時期は七月中旬から八月上旬迄である。　**雪溪**（ヒウケイ）　南アルプスに極く少い雪溪も北アルプスに可なり多數見られ

る。例へば白馬嶽の大雪溪・針ノ木の雪溪・槍澤の雪溪・乘鞍の雪田等は比較的大きく人口に膾炙したもので、白馬岳のは全長二〇町に及んで居る。此の外、穂高の唐澤・立山の雄山澤・劔嶽の長次郎谷・平藏谷・劔澤等がある。雪溪の表面は夏には鱗狀の波紋が生ずるものであるが、之は風に依つて出來たもので、風の當り方の强弱に依つて融け方に斑を生ずるからである。　**山小屋**（ヤマゴヤ）　登山者の爲山岳の中腹又は山頂に設けられて居る宿泊所。山麓或は登山口の旅館は之に含まない。宗教登山の盛な我が國に於ては、古くから石室其の他の名稱で山小屋の設備が發達して居たが、最近アルピニズムの勃興に連れて、ヒュッテ式の山小屋が諸所に發達した。特に日本アルプス地方に於ては年々激增する登山者收容の爲、山小屋の數は急に增加し、營業小屋のみでも一〇八舍（昭和十一年）の多きを數へ、近代的設備を具へ、冬期登山の爲にスキー小屋の設置を見るに至つた。燕岳の頂上にも燕山莊と言ふ設置の完全な山小屋があつて、多數宿泊が出來るから頗る便利である。　**鞍部**（アンブ）　山稜の凹所。山頂と山頂との間に在る低く平な馬背狀部を言ふ。　**穂高**（ホダカ）　日本アルプス槍ケ嶽の南方、一群の山峰の總稱。長野縣南安曇郡と岐阜縣吉城郡の境界、卽ち信飛國境の山脈の一部で、南北に連り北端の北穂高嶽（標高三、一〇〇米）は大キレットを隔てゝ槍ケ嶽山群の南嶽に對し、其の南は唐澤嶽（標高三、一〇三米）奥穂高嶽（標高三、一九〇米）が聳え、以南は山稜二分して東南に前穂高嶽（標高三、〇九〇米）西南に西穂高嶽（標高二、九〇九米）を起し、西穂高嶽から山稜急に低下して燒嶽方面に連る。是等群峯の東は梓川谷・南は上高地の盆地・西は蒲田谷に依つて限られる。奥穂高嶽は本州第三の高峯、北アルプスの最高峰たるのみならず、峯群としても日本アルプス中之に比肩する高さを有

するものは無い。

飛騨山脈　信飛越の國境を走る大山脈、即ち所謂北アルプスの別稱である。飛騨高原の東緣に崛起して成れる高峻な山脈であつて、其の東側急傾斜を成して犀川・姫川の谷に臨む。此の山脈を構成する諸山脈の軸線は南々西から東々北に向つて連亙するが、其の北端に於ては南北に轉じ、南端に於ては次第に東西の方向に彎曲する。此の山脈の南端に位せる高峯は御嶽（三、〇六三米）で、其の北東に乘鞍嶽（三、〇二六米）がある。此の兩山は共に火山であつて、其の高峻に頡頏し得るものは稀である。乘鞍の後方に於ても更に燒嶽（二、四五八米）の活火山の噴起するあり、是等の何れも飛騨山脈を基盤として其の上に噴出せるものに外ならない。更に之に連つて北々東に延び、穗高山脈の峻嶺が峙ち西穗高嶽（二、九〇四米）奥穗高嶽（三、一九〇米）北穗高嶽（三、一〇〇米）槍ケ嶽（三、一八〇米）等一萬尺以上の高峯を起し、峨々たる尖峰懸崖天を摩し、其の險峻日本アルプス中隨一に位する。之と梓川上流の上高地低地帶を隔てゝ常念山脈があり、北に延び大天井山（二、九二二米）と成る。穗高山脈の北には鷲羽火山（二、九二四米）野口五郎（二、九二四米）烏帽子（二、六二一米）の諸峯が連續し、高瀨川峽谷の西に聳える。此の連脈北に延び針ノ木峠（二、五四一米）を經て白馬山脈に連なる。白馬山脈は前者に比して其の高度稍及ばず、一萬尺を越える高峯は無いが、其の豪宕偉大なるは却つて之に過ぎるものがある。

三俣蓮華　黑部五郎嶽の東、槍ケ嶽の北に在る。標高二、八四一米。

鷲羽　野口五郎岳の南、三俣蓮華の北に在る。標高二、九二四米。

水晶　鷲羽の北、富山縣側に在り、黑嶽とも言ふ。標高二、九七八米。

野口五郎　水晶の東、國境線に在る。標高二、九二四米。

千尋　千尋はせんひろ。極めて長く又深きこと。せんじん。

高瀨川　長野縣の西部を流れる川。犀川の支流。源を槍ケ嶽の北麓及鷲羽嶽の東麓に發して北流し、其の北流路は西南方飛騨の蒲田川と一直線を成し斷層谷を暗示し、唐澤嶽及鍬の峯の北麓を廻つて大町の平地に出る。此の附近で北方から來る鹿島川・農具川等を入れて南流し、明科附近で犀川に入る。高瀨川は山麓に扇狀地を作り若返りに依つて段丘を刻成し、農具川を入れた後の流路は糸魚川・鹽尻地構線に支配され、農具川及南方の犀川・奈良井川と南北の一線を爲す。

興奮　感情に依り心氣の奮起すること。刺戟されて神經の引立つこと。又其の狀態。

御影石　完晶質粒狀の組織を有する火成岩の一種。主として石英・雲母・長石から成り、普通胡麻鹽の如き外觀を呈し、堅牢にして美。本邦各地に產し有用な石材となる。攝津國武庫・莵原二郡から產し、御影村で加工して出すより斯く言ふ。

富士　駿河・甲斐の國境に在り、不斷は遙かに群峯を拔いて雄姿を眺める事が出來る。標高三、七七八米。

淺間　信濃・上野の國境に在る活火山。天氣の好い日には噴煙が見える。標高二、五四二米。

白馬　通稱ハクバ、別名大蓮華。飛騨山脈中、北部の高峯。新潟・長野・富山の三縣界に屹立。お花畑と雪溪で名高い。標高二、九三三〇米。

立山　飛騨山脈の西北端に在る大山彙。立山連峰は富山縣の東南隅に蟠居し、海拔三、〇〇〇米に近い峻峰の集團で、盟主雄山（二、九九二米）を中心とし、北に大汝（オホナンヂ）山（三、〇一五米）別山（二、八八二米）劍嶽（二、九二六米）猫又山（二、三七八米）毛勝山・駒ケ嶽・僧ケ嶽が相連り、南に淨土山（二、八七二米）藥師嶽（二、九二六米）黑部五郎嶽等が屹立して居る。

指導精神

本課の着意は登山趣味の養成に在るは勿論であるが、單なる一箇の紀行文としても、是程フレッシュな作品は稀である。全篇を通じ如何にも能く景色を捉へ氣分を表して居る。紀行文の要諦は土地の箇性を描くに在る。自然を通しての人、それを描くには人を通しての自然・土地其の物の箇性も描かれねばならぬ。燕に登つた紀行であり乍ら、其の山の箇性が現れずに、淺間でも白馬でも差支の無い樣な、要するに"高い山に登つた"程度の事しか書かれて無いとすれば、旨い拙いの問題で無く、全然自然も人も描かれ無かつたと言つて良い。取扱も此の點に留意し文の美點を指摘して、新しい深みある紀行文の何であるかを知らせる心構が大切である。

箇性を描くには山を知り山に親しまねばならぬ。或登山家の話に山の持つ雰圍氣は山を味ふ上に最も大切なものである。そゝり立つ岩壁・人を壓する山の威容等は言ふも更なり、實際穗高や槍や燕の雪渓は全く淒い。是等の岩と雪とが醸し出す雰圍氣は、果して其の形丈で作られるもので有らうか。形丈なら遠望した丈でも良い譯であるが、山の雰圍氣は其處迄に達する道程の印象の累積として初めて味へるものである。遠く汽車を捨てた以前からの體驗を必要とする。長い間の煙の臭と北國訛りの人々の話聲から、車窓に移る景色・降りた停車場の櫟子、さては破損しかけた乘合自動車・其の走る兩側の田圃・自動車を捨てゝからの峠道・幾つか通り拔けた農村・初めて泊つた宿・道が段々と狹まつて遂には川沿ひの小徑となつて、何時の間にか辿りついた岩と雪との世界、其等の一つびとつの印象が記憶の中に累積して初めて山の雰圍氣を醸し出

すのである。

自動車で行けば肉體の勞働は必要としない。然しさう成つた世の燕岳は、淺草の觀音樣へ參詣するのとどれ丈の違ひがあらう。其の方が樂でいゝと言ふ人は、山の與へる雰圍氣の嬉しさを全く知らぬ人である。山は山の持つ雰圍氣を味ふ事が最も美しいもので無いであらうか。普通の言葉で言へば、山の靜寂とか、幽遽とか淒みとか言つた氣持である。さう言ふ山で無くては味へない人間の精神の休養地を山に求めて、山は初めて甲斐があるでは無からうか。高原の持つ地平線・空との對稱・川の流れ・森の新綠・白樺の木肌等の色や形丈の美しさも確に大きな指數である。然し其處に靜けさと言はうか、人間の社會と隔絕して居る何物かが無くて、山の樂しさはどれ丈殘るであらう。

山の持つ雰圍氣には色々ある。各の季節に於て、山の種類（地形や高度や地貌や草木等に依る）に於いて、天候に於いて、登山仲間の組方に於いて、登山の目的に於いて千差萬別であらう。然し其處を一貫して流れる一種の雰圍氣を求めて、人々は山へ山へと志すのであらう。"何事のおはしますかは知らねども"と言つた或何物かゞある。此の或物は決して神祕なものとは言はない。山に關心を持つ程の人なら感じられるものが普遍的に存在する。山頂へ達する迄の印象の累積と、山の有する條件とが作り出す山の雰圍氣の中に脈々として流れる共通の何物かである。靜寂と言はうか、莊嚴と言はうか、形而上の何物かゞある。此の雰圍氣を求めて山へ登るのでは無いだらうか。登山者が若し漫然と頂上を唯高い見晴の好い所として登つて見度いと言ふのなら、飛行機に乘つて見れば雪渓でも何でも眼下に見えてもつと良い。然し山は其の道に有つた足下の草花や岩・頭上を覆つて居た梢や空・靴の裏に當る砂礫の感觸や苔の軟かさ等と言つた細かい印象が無

數に累積して醸し出した雰圍氣に依つて初めて味へるのである。

"何事のおはしますかは知らねども" と言ひつゝ味へるかたじけなさは、遊覽バスや自動車で内陣迄乘込んで行つたとて、社の形や林の形はちつとも變らない。寫眞に撮影すれば同じものが出來るであらう。然し人間の感覺は遊覽バスや自動車で行つた時と、遠く玉砂利を踏み人々が咳一つするのさへ憚つて居る靜けさの中に、咏・手水して襟を正して近いた時と果して同じであらうか。山も同じ樣に雜沓の巷では味へぬ雰圍氣を味ふ爲に登るのであらう。必ずしも氷と岩との山で無くても良い。遙かなる枯野を渡る風の跡を見て居る丈でも良い。人環を絶した靜寂を愛し度くは無いか。山は高きのみが能では無い。花があるのみが故でも無い。氷雪があるのみが故でも無い。其處に内藏する雰圍氣がある故に懷しいのである。本課も亦此の精神で取扱つて初めて意義がある。

指導形態

指導上の認識點

1　遠足の發展した燕登山の體驗記を讀ませ、途中の苦しみに引換へ登るに從つて展開する風景の良さ、頂上に於ける景觀の雄大壯嚴さに感動させ、精神を緊張させ氣宇を宏大にするのが本課の指標である。

2　尙清淨な山肌に親しむ登山趣味の啓培に努め、心身の淨化鍛錬と不屈不撓・敢爲進取の氣象を養ふ事も忘れてならぬ着眼の一つである。

3　形式方面では自然觀照の態度を馴致し、感受性を鋭敏にし、生活行動を文學化するの興味をも持たせ、表現力を培ふと共に生活の愉悦を增大する事も大切である。

4　指導に際しては地圖や挿畫を利用し高度に從つて生物分布の異なる點、及び高山植物の種々相や山岳地理等、自然科學的方面の研究心を唆る心構が肝要である。

5　本課は大體五時間見當で如上の指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の取扱。
▽挿畫を一瞥させて讀心を唆り、地圖に依つて其の地點を確める。

2　全課の通讀
▽第一印象其の他は記帳させて置く。

3　話合。
▽前項の印象や讀後の所感を中心に。

4　新出文字の指導。
▽字書を繰らせて其の都度索引させる。

溪谷　奔　狹　鳴　溫　紅　紫　紺
剻　界　塊

5　再讀させてコースの大體を攝ませる。
▽何う登つたか、途中は？　頂上は？　何處が一番骨が折れたか等。

6　難語句の指導。
▽先づ類推させ適否を批評して後指導する。

溫泉溪谷　かひ〳〵しく　釣橋　奔流
一歩々々　はづむ呼吸　つゞら折　あへぎあへぎ　潤葉樹林　悲鳴　まぜかへす
針葉樹　なだらか　道標　眼界　尾根傳ひ　薄日　滿開　お花畠　滿天の星　山小屋　雪渓　鞍部　屏風　紫紺のはだ
そゝり立つ　相映じ　千尋　大自然　景觀　一種の興奮　縱走　やゝともすると
消散　岩塊　最頂　最高點　嚴然　とざして　下山　希望

7　地名・物名其の他個有名詞は地圖や挿畫は勿論、繪畫・實物・標本等を利用し具體的・實感的に指導する。

中房溫泉　リュックサック　金剛杖
大きな笹　有明山　さうしかんば　なゝかまど　さるをがせ　いはかゞみ　合戰